

明○更不于別人事作麼成佛子住○天下一兩頭三而作什麼也須七穿八穴

始得○一棒一條痕○還見德山臨濟麼

古に十六開士あり、此の一則も亦た垂示なしに直に本則である、開士と云ふは菩薩と云ふ梵語の義譯で、菩薩を具さに云へば菩提薩埵、それを覺有情と譯したり大士と譯したり又は始士とも云ふが、經文の中には多く開士と譯してある、此の本則の典據は、首楞嚴經の卷五に跋陀婆羅菩薩が其の同伴の十六人の開士と共に、自分たちの修行および開悟の經驗を説いた所がある、其れは跋陀婆羅菩薩および十六開士は、過去世に於て他の衆僧と共に例に隨て入浴をしたことであつたが、其の時に忽然として水因を悟り、既に塵をも洗はず體をも洗はず、中間安然として無所有を得たり、妙觸宣明にして佛子住を成じたりきと言ふた、其れを雪竇が抄録して一則の公案となし、頌古の題にしたのである、着語に群を成し隊を作して什麼の用處か有らん、人々具足箇々圓成の事に、十六人も聯合する必要は無い、畢竟這の一隊は不啻嚙の漢のみであらうぞと抑へる、浴僧の時に於て例に隨て入浴す、これは講するまでも無い、着語に露柱に撞着すソリヤ盲目どもが柱へ頭を打ちつけたぞ、漆桶什麼をか作す、添桶と云ふは眞黑に固まつて居る姿で、煩惱妄想の固まりよと罵るのである、然るに其れが忽ち水因を悟る、水因とは即ち水の因縁であるが、水と云ふものに元來實體が有らうか、今の科學者に聞いて見ても、水素と酸素の化合に因て且らく水と云ふ一物象を現はして居るまでの事で、これこそ水の容體實性であると確認すべきものは無い、謂ゆる因縁假和

合で、暫時の間の形狀に過ぎぬ、然るに、それを力にして身體を洗ひ清めるとか塵垢を洗ひ落すと云ふて居るのであるが、其の水因の本來空なることを徹底了悟すると同時に、身體も塵垢も皆悉く實體實性の認むべきものの無いことが自然に明了である、着語に惡火蔀頭に澆ぐ水因を悟つたなどと云ふのがハヤ無垢の體を穢すのであるぞ、元來何の悟るべきが有ると奪ふ、雪竇は門下の衆僧に向つて諸禪徳と呼び作麼生か會せん貴公等は之を何と合點するぞと一撈し、更に他は道ふ妙觸宣明成佛子住と十六開士の語を擧げて學人に示された、妙觸宣明と云ふは、妙は不可思議の義であり、觸は六塵すなはち色聲香味觸法の中の觸で、身軀の物體に何處へでも熱いと冷いと痛いと痒いと滑かであるとか澁いとか感ずるのが皆觸覺である、今跋陀婆羅菩薩等が眞空の水を以て眞空の身體を洗ひ眞空の塵垢を洗ふ、其の水の身に觸るゝ端的、それが即ち妙觸である、一體に眼に色を見て悟るものもある、釋尊の明星に於ける迦葉の拈華に於けるが如き皆それである、又耳に聲を聞いて悟るものもある、香嚴の擊竹に於ける、東坡の溪聲に於けるが如き皆其れである、然るに今十六開士は身に觸を受ける端的に無所有を得たと云ふのであるから、即ち自から妙觸宣明と云ふのである、宣明と云ふは宣は顯なりと註して、著明と云ふも分明と云ふも同じやうな意味と見てよからう、着語に更に別人の事に干からず、それは謂ゆる冷煖自知の所で、他人の知つたことでは無い、已に他人の知つた事では無いとすれば、人々各自に作麼生か會せんと門下への一撈、さうして置いて撲落他物に非ずと言ふ、撲落は打ち落すので今は妙觸の脫然たる姿を形容したのである、乃ち其の妙觸の妙處は他物では無い、人々各自の擧足下足ぞと提撕せられた、又佛子住を成すと云ふは、佛子と

なりて佛地に住すと云ふことで、之を教家の講釋にかければ中々複雑した議論のあることであらうけれども、禪家に於ては極めて單純に大信の發するところ立ちどころに成佛と見れば好い、着語に天下の衲僧も這裡に到りて摸索不着、サア此の成佛住すなはち立ちどころに成佛と云ふ端的に至りては、到底之を摸索して彼れの此れのと分別し得べきことでは無い、兩頭三面にして、什麼をか作さん、既に是れ妙觸宣明一色一香無非中道であるに、其他に何を苦しんで佛子だの成住だのと云ふことを求むる必要があるか、也た須く七穿八穴にして始めて得べし、抑も彼の十六開士等は妙觸に因て佛子住を得たと云ふが、若し我が祖師門下であつたならば洗浴のみのことでは無い、七穿八穴でなければ何の役にも立たぬぞと言ふのである、七穿八穴とは逆順縱横自由自在の義で、茶に逢ふては茶を喫し、渴すれば飲み困すれば眠る、それが都べて一點の障礙なく、眞に脱落灑落なることが出来なければならぬのである、着語に、一棒一條の痕とある、イヤ七穿の八穴のと云ふには及ばぬ、一棒一條の痕があれば十分ぞと語路を拂ひ、山僧に辜負すること莫くんば好し、已に七穿だの八穴だのと云ふだけハヤ木分に遠くなると奪ふ、撞着、撞着、一切時一切處往くとして還るとして妙觸宣明ならぬ所は無い、還て會て徳山臨濟を見るや、彼の徳山の棒また臨濟の喝、皆悉く妙觸宣明の端的である、何も七穿の八穴のと餘計なことを言ふには及ばないと、どこまでも奪ひ切たのが、即ち圓悟が雪竇に大贊成の喝采である。

頌了事衲僧消一箇現有二箇朝打三千暮打八百一箇也不消得長連床上展脚

臥果然是一箇論夢中曾說悟圓通早是睡更說夢香水洗來

驀面唾重○在上加泥又上

此の頌は都べて教家者流が轍もすれば迷ひとか悟りとか理路に滯ふり言論に着するのを彈呵して、祖師門下の活潑々地なる宗風を舉揚するのである、先づ第一句に了事の衲僧一箇を消す、これは十六開士と云ふに對して一箇と云ふ、眞に祖師門下に於て心事を了悟し畢つたる所の衲僧であらうならば、只一人で事足るので、經にも既に「一人眞を發して源に歸すれば十方虚空消殞す」とも説いてある、然るに何も仰々しく十六開士の隊伍を待つべきでは無いと奪ふ、着語に現に箇あり其の一箇とは誰ぢや雪竇お前かナ、但其の一箇も半箇も圓悟の處には全く用が無いに依て、若しも我こそ了事の一箇などと云ふ者があつたならば朝打三千暮打八百打つて打つて打ちするぞと言ふ、金剛圈を跳出す、眞に了事の漢ならば金剛の如く堅牢なる圓鏡をも跳出して居らうぞ、圈といふはコ、では檻のことであるそうな、一箇も也た消得せず、其の實は一箇も用は無いのぞと重ね〜に奪ふ、サテ其の了事の衲僧は如何なる事をして居るかと云ふに、長連床上に脚を展べて臥す、誠に太平無事安閑快樂の姿である、長連床といふは禪林の僧堂で、多くの衆僧がゾロリと并んで坐禪をするに都合の好いやうに作つてある床のこと、常には只單とばかりも云ふのである、既にハヤ大事了畢して迷悟も凡聖も超過した上のことであるから、妄想の除くべきも無ければ眞理の證すべきも無く、上に佛祖の除くべきも無ければ下に衆生の濟ふべきも無い、是の境遇に在るものは

脚を展べてグー／＼と高いびきで眠るのみのことである、着語に果然として是れ箇の瞌睡の漢、其うであらうと思ふて居た通り、瞌睡三昧で迷悟も凡聖も知らぬ様子ぢやと言ふ、劫を論じて、禪を論ぜず、劫を論ずると云ふは、無量阿僧祇劫の長い時間眠り通しに眠るのみの事で何時まで経つても禪道だの佛法だのと云ふ論量は絶して居ると云ふのである、皆是れ絶対平等の本體の上から言ふのであるから、若しも亦た誤つて禪學の目的といふものは斯ういふ處に在るのかなどと妄想せぬように注意しなければならぬ、夢中會て説く圓通を悟ると、之は此の本則の典據たる楞嚴經に於て、二十五箇の菩薩だちが代る／＼に圓通の法を説いてある其中の一人たる跋陀婆羅菩薩が十六開士と共に此の妙觸宣明を以て自家の圓通を説いたのであるから、其の事を將て来て二十五菩薩の圓通法門も皆悉く夢中に夢を説いて居るやうなもので、一旦夢が覺めて見れば、永嘉大師が法身覺了すれば無一物と語られた如く、迷も悟も悉く夢である、譬へば迷は夢の中で病氣に罹つたやうなもの、悟は其の病氣の全快した夢を見たやうなもの、然るに其の夢が一旦覺めた上には、病氣も夢なれば全快も夢である、着語に早く是れ瞌睡して更に夢を説くと、此れは雪竇に向つてお前が其の様なことを言ふて居るのも瞌睡中の癡言かナと抑へ、却て偏に夢見ることを許す其の圓通を悟つたと云ふことも夢であると云ふならば、是非もないから先づ且らく許して置かうぞと云ふ、然して寐語して什麼をか作さん、此の着語は古人も多くは捨て、取らぬ、着語の中に往々妄添の多いには實に困る、餘ほど能く擇んで見なければならぬ、香水洗ひ來るも、麝面に唾せん此れは本則の入浴と云ふことに因みて、設へ香水で洗ひ來りたる如く、如何ほど無垢清淨であるからと云ふても、其の無垢清淨と云ふ所にハ

ヤ穢れがあるので、譬へば真正の美人は美を粧はないはづのもの、若しもソレに紅紛の氣があつたとしたならば、鼻もちのならぬは云ふまでも無し、さればとてコレは素顔の天然で御座いますなどと云ふならば、ハヤ其の言葉の端に天然を害する所があるやうなもの、雪竇は麝面に唾吐きかけてやるぞと云ふ、圓悟は咄と叱りつけて、雪竇が斯う頷出したのさへに、土上に泥を加ふること又一重であるぞと抑へ、更に淨地上に來て扇すること莫れ、結局文字言句の上にもつてきては、淨地に扇するやうなものであるから、黙つて長連床上に脚を展べて眠るべきであると云ふ。

第七十九則 投子一切聲

垂示 大用現前不存軌則活捉生擒不勞餘力且道是什麼人曾恁麼來試舉看

大用現前は作家の衲僧が學人を接するに就ての大機大用、本より縦横無盡に轉變自在であるから軌則を存せず、必らず斯うでなければならぬといふやうな定りは無い、それ故に活捉生擒と相手の者を生け捕りにするにも餘力を勞せず、何の骨も折らずに易々と凱歌を奏す、且らく道へ是れ什麼人が曾て恁麼にし來れる、古人に其例があるかなと、自から問ふて自ら有るとも答へ試みに擧す看よと本則を拈出した。

本則 擧曾問投子。一切聲是佛聲。是佛聲。是佛聲。也解持三虎鬚○青天尊 **投**

子云。是○拈放一船人○賣身與你了也 **僧云。和尚莫屎涕碗鳴聲。**只見三難

一義。是。否。第二回持三虎鬚○抱賊叫屈作 **投子云。是。**又是賣身與僧也○陷虎僧

云。喚和尚作一頭驢得麼。只見三難頭利不見三鬚頭方○雖有三逆 **投子便**

打着○不○可○放○過○好○打○挂

杖末到折因什麼便休去

僧あり投子に問ふ、投子といふは舒州投子山の大同禪師、これは青原石頭丹霞微投子と相承して、即ち達磨第十一世の法孫である、常に實頭であり且つ能辯であると云ふ評判があつたと見える、そこで此の僧は如何に實頭なりとも能辯なりとも、陷虎の機を以て陥入れてやらうと云ふ考へ、胸に一物を貯へて出かけて往つたらしい、乃ち一切の聲は是れ佛聲なりとはなりや否やと問ひかけた、これは梵天所問經にもあり、法華經の常不輕品にも見え、其他の諸經にも散説せられて、凡そ世の中の都べての音聲、すなはち雨竹も風松も溪聲も鳥語も、皆悉く佛陀の音聲であると云ふは勿論のことである、けれどもソレは強いて佛聲といふには及ばぬことであるから、投子に最初から三十棒を與へられても一言ないのであるが、投子は

ササガに最初からはソウしない、着語に也た虎鬚を拵づることを解す、此僧は中々危険なことを好むと冷かし青天に霹靂を轟かすやうであるぞと擲論し、遂に自屎の臭きを覺えず、臭いものゝ身しらすは困つたものよと叱る、投子云く是、お前の言ふ通り一切の聲は佛聲であるよと、十分に放行して、此の僧の第二問を釣り出された、着語に一船の人を賺殺す、此の僧一人を釣り出すために満堂の衆僧悉く賺された身を賣て僧に與へ了れり、投子が此僧に對して身を投げ出して自由にさせるやうに見える、一邊に拈放すと云ふは物を一方へ片づけて置くこと、此の僧の問を是と一方へ片づけた、是れ什麼の心行ぞ此の投子が是と答へて此の僧の間に任せた機鋒が解るかと門下への一擲、僧云く和尚屎涕碗鳴聲すること莫れ、屎と云ふは尼窠なりとも尻なりとも注して孔門のことである、其の孔門に沸々の聲があるのであるから、胃腸の加減を悪くして頻りに便所へ通ふて居るの聲である、碗鳴は讀んで字の如く別して塗物の椀に熱湯を注いだ時フツ／＼と音がすることである、此の僧は果して投子に釣られて豫ねて巧んで來た通り、一切の聲が佛聲であるとすれば屎涕も碗鳴も違ひない、さうして見れば和尚の說法度生の聲も屎涕碗鳴と擇ぶ所はなからうと云ふ、これを惡平等とも破大乘とも云ふのである、着語に只三難頭の利を見て、鑿頭の方を見ず、此の僧の眼には投子が實頭に優しく是と答へた所だけ見えて、其轉語の底に陷虎の機のあることを知らぬぞと抑へ、什麼と道ふぞと咎め、果然として敗缺を納る、モウこれで此の僧は大失敗してしまふたと云ふ、投子便ち持つモハヤ投子は釣竿をグイと引あげて、手づかみに魚を籠の中へ投りこんだやうなアンバイ、圓悟が着しめたぞと言ふたやうな調子、好打なり放過せば不可、これは前の着語の註釋的に過ぎぬから無い

方が好い、此の僧餘ほど鈍感と見えて、一棒を喫しても未だ目が覺めぬ、イヤ前後を顧りみずに猛進する
突飛生らしい、又問ふ龜言及び細語皆第一義に歸すと是なりや否や、此れは涅槃經の佛語を將てきたの
で、如何なる龜暴な言葉でも、又如何に丁寧なる話でも、皆同じく中道第一義の眞諦に契はないものは無
いと申しますが、本統のことでもありますかと、これも前と同じやうな巧みでやつて來たのである、着語に
第二回、虎鬚を拵つ、先刻猛虎に咬みつかれたのに懲りないと見える、賊を抱て屈と叫ぶ什麼をか作さん、
己れの手罪過の證據を持って、しら／＼しく罪を犯した覺えが無いと云ふて居るやうなものであるから、
捕縛を受けるより外に致しかたがあるまい、東西南北猶ほ影響の在るあり、此の僧が是れまで東西南北と
法道教路に流浪して、色々な理屈を覺えて居る其の習慣が抜けないので、輒もすれば經文の言葉などを持
ち出してくるのである、投子云く是、又平氣に放行して答へた、着語に又是れ身を賣て僧に與へ了れり、
十分に餌をつけて釣糸を長く垂れた、それが即ち陷虎の機である、也た是れ什麼の心行ぞ、前と同じ意味
で門下への一擲である、僧云く和尚を喚んで一頭の驢と作し得てんや、此の僧は實に放膽な奴ではあるが、
此れが唯だ投子に向つて暴慢に瞞預するばかりでは無くて、或ひは謂ゆる文に依て義を解し、語に着して
意を取り、是のやうな弊竇に陥溺して居るのかも知れぬ、今の世にもコレに類したる教者も禪者も中々多
いのであるから、痴人面前には夢を説くべからずとも云へば、人を見て法を説けとも云ふ俚諺のある如
く、別して禪宗の談話などは餘程注意に注意を加へて慎まねばならぬことである、着語に只錐頭の利を見
て、鑿頭の方を見ずと云ふは、前と同意、逆水の波ありて只是れ頭上に角なし、投子に向つて和尚を喚んで

驢馬と謂ふても宜しいかと云ふ調子は、豫龍が浪を蹴立て、昇天する勢ひにも似て居るが、如何にせん頭
の角とも見るべき實參眞證の宗眼が無い、血を含んで人に喫く、これは四十二章經に見える佛誡で、人を
罵ると云ふことは、血を含んで人に吐きかけるやうなもので、相手の人を汚さない前に先づ己れの口を
汚すのであるぞと云ふの誡め、投子便ち打つ兩面ともに同じ軌轍を履むは甚だ面白くないけれども、勢ひ
已むを得ぬ次第である、圓悟は、着と贊成し、放過す可からずとたしかめ、更に好打拄杖未だ折るゝに到
らず什麼に因てか便ち休し去るや、モツと／＼打つて打つて打ちすゑれば好いと言ふ、圓悟は評唱の中
に於て、若しも此の僧が本統の作家の漢であつたならば、投子が將に棒を振りあげんとする途端に、ダイ
と其棒を振りあげてスポンと禪床を掀倒すれば好かつたと言ふてある、然しソレは圓悟の流義であるが、
我國の風外老人は也た之に異なり、投子が是と答へた時にサツサと拂袖して立ち去つてしまへば、投子は
手持ち無沙汰に置き去りにされるのであつたのと言はれた、いづれにしても御當人が偽物であつては、
幾らあとから入れ智慧をしても何の詮もない、それに就ても實參實究が肝要である。

頌 投子投子 灼然天下無這實頭 機輪無阻 有什麼奈何他 放一得二 處上〇也 有子一放

換却備眼請 〇同彼同此 也喫棒不恁麼來 可憐無限 弄潮人 放出一

箇半箇 〇放這漢 畢竟還落潮中死 不可得 〇愁人莫向愁人說 忽然活 震動

也○魯殺山僧○百川倒流鬧漚漚投子老漢也須是拗折拄杖始得

投子。投子と先づ大同禪師の稱號を連呼したのは、乃ち禪師を景慕するの餘り、彼の極樂往生を願ふ者が南無阿彌南無阿彌と連呼するやうなもの、着語に灼然と圓悟も贊成と見える、又天下に這の實頭の漢なしと掲げて置いて、更に人家の男女を教壞す此の投子老漢は大に人を誑かす作略があるから油斷は出来ぬと抑へる、機輪阻無し、阻は阻礙の義であるから、無阻は即ち自由自在の意味である、實に投子與奪自在の機用は寸分の隙間も無い、着語に什麼の何を奈何ともする處あらん其の機輪に阻なき働きに對しては誰も手の出しやうが無い、也た些子あり然し全く阻なしとばかりは言へぬ、我れ圓悟であつたならば、必ず彼が禪床を掀倒して見せるぞと云ふアンパイ、一を放ちて二を得たり、これは投子の機輪に阻なき證據を擧げるので、其の只是々と言ふた一つの何で、兩度まで彼の僧に痛棒を食はせた機鋒を謂ふ、着語に爾が眼睛を換却す、到頭彼の僧は是れで眼潰しを食つてしまふた、什麼の處にか投子を見ん、投子の把住放行に自在なる、神出鬼没であるに依て、これが投子の立ち場であると云ふ所を何うして見定めることが出来やうぞ、彼に同じく此に同じ彼と云ふは是と言ふて與へたところ、此と云ふは便ち打つて奪ふたところ、兩段の問答同一轍であつた、着語に恁麼にし來るも也た棒を喫し不恁麼にし來るも也た棒を喫すドウ手を換えて幾たび突き掛つて往つても棒を喫するより外は無い、閻黎にして他に替るを便ち打たれん、さう言ふて居る雪竇老漢、お前が彼の僧に替つて見てもヤハリ打たれるであらうぞ、イヤ三世の諸佛も歴代の祖師

も、樹此の棒下に立たない者は無いはずである、これは投子の機用を頌し了り後は彼の僧を評して後學の龜鑑に供するのである、憐む可し限り無き潮を弄する人、彼の僧には限らない、世の中の多くの參學者が、佛法の大海を遊泳して、満ちたり干たり差引する潮流を弄して居ることであるが、十が八九は皆氣の毒なもので、女浪や男浪の寄せては返る磯邊の風光や、碧浪白波の浮沈出沒する海面の景況を愛するに過ぎないので、眞實に滄溟の底を盡し驪龍の珠を取り得る者はメツタに無い、着語に叢林中一個半個を放出す、實に天下の禪林多い中にも僅に一人か半人であらう、這の漢を放出す彼の打たれた僧ではドウぢやナと擲擲する、天下の衲僧恁麼にし去る滔々たる天下參禪の徒も大低斯んな者かと歎く、畢竟還て湖中に落ちて死す彼の磯邊の風光や海面の景況に眺めを凝らして理路を探り言論を索め、謂ゆる葉を摘み枝を尋ぬるやうに、其れが一種難治の病となつて佛法の大海中に溺死してしまふのである、着語に可惜乎、サテモく氣の毒な争奈せん這の團續を出ること得ず、申々此の佛法とか禪道とか云ふ所の高尙なる束縛を脱することとは難しい、愁人愁人に向つて説くこと莫れ雪竇お前も此事に就ては千辛萬苦されたと見えるが、これ圓悟も同じ煩悶に苦しんだ覺えがあるに、其のやうな悲しい話をせぬが好いぞ、お互ひに涙の種ぢやと、眞實修行の容易でないことを示される、サテ斯うばかり言ふてしまへば甚だ心細い話であるが、一旦湖中に落ちて死に了つた者が更に忽然として活せば即ち百尺竿頭に一步を進めて、大死一番の後再び蘇生し來つたので無くては、本統の大機大用は現はれない、これは世間出世間の何事でも皆同じことで、梅は寒苦を経て清香を發すとも云へば、盤根錯節に遇はなければ斧鉞の利も知れないと云ふは、確かに眞理である、

着語に禪床震動すイヤ死んでしまふたと思ふのが活きかへつて来たなら、投子の禪床を掀倒するかも知れぬ、山僧を驚殺せしむ、圓悟も喫驚也た倒退三千里であるぞ、百川倒流して瀾瀾たらんと復活以後の機用を言ふ、瀾々と云ふは水の流れる音の形容であるような、都べて何事でも一旦往くべき所まで往つてそれから更に本の地へ立ち還つてからで無くては、決して本統の仕事は出来ない、之が佛教の尤も大切な所で、禪宗ばかりでは無い、淨土門でも眞宗などで還相廻向と云ふことを大切にすのも、の道理である、萬民の最頂上に立つて至尊と仰がれる聖天子の玉體の中に於ても、尤も最頂上なる御脳髓に於ては、萬民の最下等たる勞働者の脚の下の熱さ冷たさを御心配下されるのである、これが即ち百川倒流の姿である、着語に驗、そこが誠に危ふい處ぞ、徒らに忖思に勞す、サア此に至りては如何なる衲僧でも直に便ち打つと云ふわけには往かぬ、山僧も斯て口を開かず、如何に口の達者な圓悟でもモウ閉口ぢや、投子老漢も也た須く、是れ杖を拗折して始めて得べし、語意は辨するにも及ぶまい、但これで佛法は如何に大死一番の後の蘇生より得來る所の活動に重きを置くかを合點することが出来るであらう。

第八十則 趙州孩子六識

本則 舉僧問趙州初生孩子。還具六識也。無閃電之機說三什一趙州云。急水上打毬子。僧後問投子。急水上打及過也○後編趙不毬子。子云。念念不停流藤淡

毬子意旨如何也是作家同驗過子云。念念不停流藤淡

僧あり趙州に問ふ初生の孩子還て六識を具するや也た無しや、六識と云ふのは眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六塵に對して、眼には色の青黃赤白等を識別し、耳には絲竹金石の聲を識別する等の心的作用を起すのが即ち六識である、此事を教家の談する所に據て委しく云ふとになれば、小乗教には七十五とか、權大乘には百法とか、色々複雑した研究があつて、専門家が一生涯かゝつても臍落のしかねるほどの問題であるが、今はソウいふ議論をして居る暇もなければ又必要もない、要する所は此の僧が平生それ等の教相を多少心得て居て趙州老漢を勘檢して見やうと思ふ所から、禪宗に於ては無心を以て道とするやうであるが、若しも無心が道であるならば、赤子が即ち大悟の人であらうなどと云ふ妄想を以て、斯の間を起したのではあらうけれども、手近く云へば初生の孩子、即ち生れたばかりの赤子にも、眼耳鼻舌身意の六識を具して居ましやうか又は具して居ないでありましやうかとの單純なる問である、若しも趙州が赤子にも六識を具して居ると答へたならば、ナゼ赤子には分別が無いのであるかと反問し、若し又具して居ないと答へたならば、ナゼ泣いたり笑つたりするとも見ると見える、着語に閃電の機什麼の初生の孩兒子とか説かん、宗門向上の機に於ては、初生の孩兒だの百歳の老翁だのと論量して居る間隙は無いぞ、此の僧何をクドク言ふて居るのかと叱る、趙州云く急水上に毬子を打す、實に能くも斯う離れた答をしたものではある、瀑のやうに烈しく疾く流れる水の上で毬をつくやうなものよと云ふの答である、こ

れは果して初生の孩子に六識を具して居ると云ふことであらうか、又は具有して居ないと云ふことであらうか、無心と云ふことか有心と云ふことか、都べて擬議に涉ることは許さないぞ、圓悟は評唱の中に於て、學道の人も復た嬰孩の如くならんことを要す、榮辱功名逆情順境すべて他を動かし得ず、眼に色を見て盲と等しく、耳に聲を聞いて聾と等しく、痴の如く兀に似たり、其心の動せざる事須彌山の如し、這箇は是れ納僧家眞實得力の處なりと云ふてある、着語に過也、ソレ急水が瞬く間にハヤ流れ去てしまふた、倭編趣へども及ばず、急水上の打毬を見て留めやうとすれば眼がまはるぞ、也た驗過せんことを要す、此の着語は次の投子に問ふと云ふ下に置けば、乃ち此の事を以て投子を勘檢するの好からうと云ふことになら、けれどもソレも重複になるからイツソ削るが好いと思ふ、僧後に投子に問ふ急水上に毬子を打す意旨如何、此の僧は趙州の答を聞いても頗と會する所が無い、そこで兼々實頭であると云ふ評判の投子和尙に提撕を求めた、着語に也た是れ作家同く驗過す此問を以て投子を驗過しやうとするは中々の作家ぢやと冷かす、還て會すやと此れは座下の學人への撈着、過也何をグツ／＼言ふてあるくぞ、モウ急水上の毬子は何處へか往つてしまふた、子云く念々停流せず、果して投子は實頭な答である、一體に彼の急水上打毬子と云ふことは、此の念々不停流と云ふ意味の方語であるそうな、それを其儘の答である、但此の念々不停流これが六識と云ふことか八識と云ふことか、具と云ふことか不具と云ふことか、擬議に涉ればハヤ第二念に落ちやうぞ、此の僧さらに進んで働らく處の無いのが遺憾である、若しも此の僧がセメて前則の僧ほどの向ふ見すであつたならば、此の投子の放行が忽ち把住となつて、復た彼の前則の僧に一棒を食はせたや

うな機鋒を見ることが出来たのであらうに、惜しいかな圓悟をして葛藤を打するの漢と言ふて己むを得ざるに至らしめた。

頌 六識無功伸有眼如盲有耳如聾 作家曾共辨來端明鏡
一問當臺明珠在掌 一問道盡
茫茫急水打毬子始終一貫 過道什麼 落落處不停誰解看過

看即請過也
○灘下接取

六識無功一問を伸ふ、六識と云ふは前に申した通り、又無功と云ふは無功用と云ふことを略したので、何の爲めと云ふことなく任運無爲に作用あるを無功用と謂ふ、圓悟は評唱中に此事を論じて「日月の大虚に運りて未だ牽て暫くも止まざれども亦た我に許多の名相ありとは道はず、天の普く蓋ふが如く地の普く擎るに似て、無心の爲めの故に一物を長養すれども、亦た我に許多の功行ありと道はず、天地は無心の爲めの故に長久なり、若し有心ならば則ち齊限あらん、得道の人も亦復た是の如し、無功用の中に於て功用を施し、一切の違情順境皆慈心を以て攝受す」と言はれてある、今此の六識無功と云ふ四字で、六識の作用其儘に無功用で、無功用の儘に在ては色を見る耳に在ては聲を聞く、色は色に任せて理窟は無い、聲は聲に任せて詮議は要らぬ、之を經には色即是空空即是色と説き、又差別即平等平等即差別なども言ふてある、此僧は此邊の道理を教相上から考へ來りて一問を伸べたのである、着語に眼あれども盲の如く耳

あれども、聲の如しと無功の六識を注解し、明鏡は臺に當り明珠は掌に在りと無功用の姿を示した、鏡に萬象の影が映り妍醜美惡すべて擇ぶ所は無い、擇ぶ所は無いに依て妍は即ち妍を誤まらず、醜は即ち醜を味まさぬ、一句に道盡す、雪竇只此の一句に許多の道理を説き盡した、作家會て共に來端を辨ず、作家とは趙州と投子とを斥す、故に會て共にと云ふ、兩老ともに此僧來問の端的を能くも辨じて接せられた、着語に何ぞ必とせん、何も其のやうなことを辨するまでの必要も無からう、然し、也た箇の緇素を辨せんことを要す、彼の僧の來問を打ち棄てても置けまい唯證して乃ち知る、其の能く辨するか辨ぜぬかは他の窺ひ知る所では無い、茫茫たる急水に毬子を打す、乃ち趙州の急水上に毬子を打すと云ふの一句、擊石火の如く閃電光に似て、少しも擬議に涉ることは出来ぬ、着語に始終一貫急水の滔々として流れて盡きぬ様子、過也モウ疾に大海に歸してしまふた什麼と道ふぞ、其の水上の打毬とか云ふことは其れは何の事ぢやと根柢から奪ふた、落處停らず誰か看ることを解せん、投子は念々停流せずと言はれたが、其の念々と云ふは一體に如何なるもので、それが何うして何ういふ風に停まらないのであるぞ、其の落着の處畢竟如何、其れは誰にも見えないであらう、風外老人は此の誰と云ふ字が字眼であると言れた、若しもソレを見たと云ふ者があつたならば盲目になると云ふことである、畢竟沒蹤跡よ、斷消息よ、着語にも看れば、即ち瞎せんとある、ナゼかといふに看んと要せばハヤ無功用に背く過也看やうとて見えるものか疾に何處かへ往つてしまふた灘下に接取せよ、これは評唱の中に曹山大師の逸話があつて、其中の話であるが、今は只落處停まらず滔々として流れて盡きぬと云ふならば、大海に歸した上で波浪奔騰の中に於て、彼の打し來つたる毬子を取り

あげたが好からうと、結局手を着くべきもので無いことを示して、謂ゆる無功用の無功を認めさせやうと云ふのである。

第八十一則 藥山射塵中塵

垂示 擄旗奪鼓千聖莫窮坐斷誦訛萬機不到不是神通
妙用亦非本體如然且道憑箇什麼得恁麼奇特

旗を擄き鼓を奪ふ、此の垂示も相變らず宗師家が學人を接する峻峻の機鋒を明かされたのである、旗を擄き鼓を奪ふとは、戰爭に於て敵の戰鬥力を絶滅せる有様、其の活動の敏捷さは千聖も窮むることなし、即ち佛々祖々も之を窺ひ窮むることは出来ぬ、ナゼかと云ふに人々の光明は人々の放つ所であるから決して他人の窺ひ知るべきことでは無い、誦訛を坐斷す、此の誦訛と云ふ語は屢々出るのであるから前にも申したことでは有つたらうが、契牙とか盤根錯節とか云ふも同じことで、事の複雑して遽に解決し難いことである、即ち學人の方から色々な知解分別を逞しくして、容易に答辨しにくい問題などを持ち出して來ても、それを忽ち脚下に踏み躪つてしまふ有様を坐斷すと云ふた、此に至りては萬機も到らず、如何なる機鋒を持つて來ても決して之に當ることは出来ぬ、然ればと云ふて是が何も他に異なつた神通妙用であると云ふでも無い、平常の起居動作皆只是の如く働らくまでのことである、それならば天然自然に其う云ふ働

きがあるのかと云ふに、亦た本體如然にも非ず、然らば其れは何うして其う自由自在に活機輪を轉ずることが出来るのであるぞと云ふ意味を且く道へ箇の什麼に憑てか恁麼に奇特なるを得たると疑問を提出して置いて、さて他の藥山の働きを見よと本則を擧着した。

本則 擧僧問藥山平田淺草塵鹿成羣如何射得塵中塵

把臂投術○擊頭帶山云看箭走快便難逢○下坡不僧放身便倒死更不活○一

弄精山云侍者拖出這死漢據令而行○不勞再勸僧便走棺木裏眼○

有氣山云弄泥團漢有什麼限可借許放過○據令雪竇拈云三步

雖活走一手擗一手擗○直健五步須死走百步也須喪身失命

僧あり藥山に問ふ、澧州藥山の惟儼禪師は石頭大師の法嗣で、達磨九世の嫡傳である、平田淺草といふは廣々とした田圃や野原の鹿の多く居さうな處の景況、そこに塵鹿群を成す、塵と云ふは鹿の尤も大きなもので、多くの鹿を引き連れてあるくものさうな、今その塵や鹿が彼の平田淺草の地に多く群がつて居ますが、如何が塵中の塵を射得せん、多くの鹿を率ゐて居る塵も亦た少なからぬ中に、更に其の塵中の塵とも謂ふべき鹿王を何うして射とめたもので有りましたやうぞと云ふの間である、これは借事問とも驗主問とも

申して、驗主といふは師家の機鋒を點檢しやうとするのであり、借事といふは斯ういふやうな譬喩などを借りてきて、本分の道理を言ひあらはすのである、即ち今も塵中の塵といふたは、法王中の法王とも又は主中の主とも謂ふことで、宇宙萬象の本體を鹿王に比したのである、着語に臂を把て術に投ず、臂を把ると云ふは戦ひに敗けたものが胃を脱いだ姿で、術は言ふまでも無い官廳であるから、此の僧が斯のやうな問を藥山の處へ持つてきたのは、盜賊が警察署へ自首して出たやうなものぞ、けれども自分にはソウ思はない、已れが塵中の塵のつもりで頭を撃け角を帯びて出て来る、エライ勢ひぞと冷かし腦後に箭を抜く、藥山が如何なる箭を放つても直に自から抜き取つて射かへすであらうと弄した、山云く箭を看よ、サスの藥山は弓を引く手は見せぬ、直にソレ箭先を見ろとハヤ此の僧の胸板を射透してしまふた、即ち請託を坐斷して萬機到らざる底の働らきである、着語に身に就て劫を打す、彼れが如何が射得せんと言ふを直に受け流して、箭を看よと射落した、其のすばやさは實に拘兒のやうである、下坡走らざれば快便に逢ひ難し、下坡といふは下り阪といふこと下り阪は走り好いものであるに、今此の箭を看よと言はれる一言下に藥山の機鋒當るべからざる所が見えないやうでは、快便に逢ひ難し、面白く走り出して直に津頭に達することは出来ぬぞ、着うまく箭が中りましたナ、然るに此の僧中々屈しないで身を放つて便ち倒ると、と自ら何處までも塵中塵の氣取りで藥山の放つた箭をたしかに受け、コロリと其處へ倒れてしまふた、コ、で更に藥山の出やう次第では、此の僧にも働きのある考へではあつたらうが、到底其のやうな拵へた事では本統の機輪を轉ずることの出来べきものでは無い、着語に灼然として同じからず、テツキリ違ふた、本統らしく

見えるけれども偽物であると抑へ、一死更に再活せず、これが死中に活を得て能く働らければ面白いけれども、到底其の見込は無い、精魂を弄する漢、最初から知解分別を置くして色々と思考してきたのであるから、決して本統のものでは無い、山云く侍者這の死漢を拖き出だせ、それでも藥山の慈悲で、更に此の僧が死中に活を得るか何うかを試みられて、侍者に命じ此の僧の屍骸を取り捨てると言はれた、本統の者ならば、で一働らき無ければならぬ所であるが、藥山の此の一言が令に據て而して行ずる本分の處置であるから再勘を勞せず、モウ脈を見るまでも無い、確かに死んでしまふた。前箭の箭を看よは猶ほ輕かつたが、後箭の屍骸を拖き出せと云ふ一言は中々深く突き立つた、僧便ち走る此僧なほ人を誰らかす氣と見えて遽かに起きて走り出した、即ち死中に活を得たと云ふ體を辨ふのである、着語に棺木裡の瞳眼到底助かることは出来ぬのに尙だ眼をキョロつかせて居る、死中に活を得たりと冷かし猶ほ氣息の在るありと愚弄する、是等の着語も無くもがな、山云く泥團を弄するの漢什麼の限りかあらん馬鹿か氣狂ひのやうな奴いつまで相手になつて居るも果てしが無いと叱りつけた、着語に可憐許放過することを、其のやうなことを言ふて叱つて居る間に、スボンと一棒くらはせてやれば好いに、令に據て而して行ず、此の藥山の叱りは、本分の上から斯う叱らねばならぬのである、然し己に屍骸を拖き出させてしまふた上に此の叱りは、雪上に霜を加ふるやうなもので何の効も無いと言ふ、雪寶拈して云く三步には活すと雖も五歩には須らく死すべし此の僧一旦起き上つて走り出した所はチョツと死中に活を得たやうにも見えるけれども、結局一步か三步だけのことで、五歩とも生きて働けるものでは無いと云ふのが雪寶老人の裁判宣告である、

要する所は言句にもせよ伎倆にもせよ、如何ほど巧みに考へて何のやうに形式を似せても、眞實本統の見性悟道が出来た上に、如何なる場合に臨んでも灑々落落々として、自由自在に働けるので無くては何の詮も無いのである、着語に一手は擽げ一手はは擽く初めは活すと言ふて更に死すと言ふから直僥走ること百歩するも須く喪身失命すべし、語意は辨するにも及ぶまい。

頌 塵中塵 高着眼看○擊○ **君看取** 何似生○第二頭走○ **下一箭** 中也○須知

走三步 活盤○盤地○只得○ **五步若活** 有箇○死中○得活○ **何成羣趨虎** 照○

正眼從來付獵人 爭奈○藥山○未肯○承○ **雪寶高聲云看箭** 得○打○云○已○

麀中の麀と例の如く先づ本問題の主眼を拈起した、謂ゆる法王中の法王とも、主中の主とも謂ふべきもの、時に依て法身佛とも、眞如法性とも、本來面目とも、主人公とも、又は這箇と云ふたり、那一句と云ふたり、拄杖子と云ふたり、色々と名も形も異なるやうであるけれども、結局只此の麀中の麀を一箭に射留めることが出来さへすれば、佛法の能事畢るのである、着語に高く眼を着けて看よ能く見よこなはないやうにしろとの注意、其れ鹿王が頭を撃け角を戴き去れり其處へ往くぞと吾人を警醒する君看取せよ、君とは都べて參學の諸人をさす、彼の麀中の麀を何う見たものであらうぞ、着語に何似生其の麀中の麀と云ふ

ものは何に似て居るぞ、如何なる形のものぞと學人に撈着する、若し之を見やうとしたならばハヤそれが本分に背くのであるから第二頭に走る射んと要せば便ち射よ、鹿であるから射るなら射るが好い、それを看て、什麼をか作さんと抑へる、一箭を下す、と藥山の箭を看よと云ふた一言の孤危峻峭なるを顯はした、着語に中れりと云ふ、何に中つたと云ふのであらうぞ、死漢に射あてゝも其の効はなからう、須く知るべし、藥山の好手なるを、此の語意は好く解つて居る、走ること三歩と、彼の僧が一旦倒れて更に起きあがつた様子を一旬に顯はした、着語に其の起きあがつて走り出した所は中々活潑々地であると冷かし、更に其の走ること、只三歩を得て、死し、了れること多時と抑へた、そこで雪竇が之を判断して五歩に活せば群を成して虎を越はん、若しも此の僧が眞箇の衲僧であつて、彼の藥山が死漢を拖き出せと侍者に命じた途端、謂ゆる旗を捲き鼓を奪ふの機があつたならば、多くの塵塵が群がりあらはれて、サスガに虎の如き藥山も尾を巻き失糞して遁げるであつたらうにと云ふ、着語にたとへ五歩に活して見たところでは什麼をか作さん、跳ると百歩、此の句は前の作什麼の上に置いて「跳百歩するも什麼をか作さん」と續けて見るが好いと風外老人は言はれてある、忽ち箇の死中に活を得ることが有る時如何と、これは次の成群越虎の句を呼び出したの見える、二俱に並び照す、若し此の僧が眞に活して働くものであつたならば、此の僧と藥山大師と兩鏡相照すの壯觀であつたらうに、須く他の爲めに倒退して始て得べしソウなつては如何なる者でも倒退三千里、それでこそ天下の衲僧である他に、出頭を放ると揚げ、然るに如何せん也、只草窠裡に在り、到底五歩に活して虎を越ふの器では無い、艸の中に倒れて居るまでのことよと抑へる、そこで結局正

眼。從。來。獵。人。に。付。す。眞。箇。宗。師。の。活。機。は。藥。山。大。師。の。如。き。徹。に。熟。練。した。人。に。限。る。の。で。あ。る。の。の。語。教。で。あ。る。着。語。に。争。奈。せん。藥。山。未。だ。肯。て。這。の。話。に。承。當。せ。ず。、イ。ヤ。雪。竇。は。藥。山。に。限。る。や。う。に。言。は。れ。る。が。、一。體。に。藥。山。が。最。初。から。彼。の。僧。に。對。して。寸。分。に。放。過。せ。ず。に。、本。分。の。接。化。を。施。せ。ば。好。い。に。、そ。れ。を。放。過。し。て。倒。れ。たり。走。つ。た。り。、色。々。な。氣。儘。を。働。ら。か。せ。た。の。が。氣。に。入。ら。ぬ。と。圓。悟。が。不。服。を。唱。へ。る。、更。に。又。藥。山。は。則。ち。故。ら。に。是。れ。は。マ。ア。好。い。と。し。て。も。雪。竇。又。作。麼。生。、お。前。は。一。體。獵。人。で。あ。る。か。何。う。ぢ。や。と。詰。り。、抑。も。此。の。事。は。ま。た。是。れ。藥。山。の。事。に。干。か。ら。ず。ま。た。雪。竇。の。事。に。干。か。ら。ず。ま。た。山。僧。が。事。に。干。か。ら。ず。上。座。が。事。に。干。か。ら。ず。と。、都。て。奪。ふ。て。しま。ふ。た。、ナ。ゼ。か。と。云。ふ。に。、山。來。向。上。の。一。路。は。千。聖。不。傳。で。あ。つ。て。、誰。れ。の。彼。れ。の。と。云。ふ。べ。き。こ。と。で。は。無。い。と。、塵。中。の。塵。の。面。目。を。最。尊。最。勝。な。ら。し。め。た。、山。僧。と。云。ふ。は。圓。悟。自。分。の。こ。と。、上。座。と。云。ふ。は。都。て。の。學。人。を。さ。す。、雪。竇。高。聲。に。云。く。、と。コレ。は。記。者。の。言。葉。、雪。竇。高。聲。に。何。と。言。ふ。た。箭。を。看。よ。、こ。れ。藥。山。大。師。と。雪。竇。禪。師。と。同。道。唱。和。肝。膽。相。照。す。所。で。あ。る。が。、其。看。よ。と。云。ふ。箭。と。は。何。の。こ。と。で。あ。ら。う。ぞ。、塵。中。の。塵。を。射。と。め。る。所。の。箭。は。、即。ち。法。身。如。來。を。生。捕。り。す。る。所。の。手。段。で。あ。る。、人々。脚。下。を。照。顧。し。て。如。何。と。見。ね。ば。な。ら。ぬ。、着。語。に。一。狀。に。領。過。す。と。い。ふ。は。同。じ。罪。を。犯。した。者。は。同。じ。刑。に。處。せ。ら。れ。る。と。云。ふ。事。で。、乃。ち。藥。山。と。雪。竇。と。は。同。罪。で。あ。る。と。云。ふ。の。で。あ。る。、今。コ。、で。罪。と。い。ふ。の。は。、無。功。用。の。大。功。を。謂。ふ。の。ぢ。や。、ま。た。須。か。ら。く。他。の。爲。め。に。倒。退。し。て。始。め。て。得。べ。し。、此。の。雪。竇。藥。山。同。道。唱。和。の。機。鋒。に。は。唯。も。當。ら。れ。ま。い。と。言。ひ。つ。ゝ、打。つ。て。云。く。己。に。備。が。咽。喉。を。塞。却。し。了。れ。り。、と。コレ。が。圓。悟。の。箭。の。看。や。う。で。あ。る。、こ。れ。で。は。誰。で。も。口。は。開。け。ま。い。、イ。ヤ。言。語。道。斷。で。あ。る。に。依。て。咽。喉。を。開。く。の。用。は。無。い。の。で。あ。る。と。勳。絶。し。了。つ。た。

第八十二則 大龍堅固法身

垂示 竿頭絲線具眼方知格外之機作者方辨且道作麼生是竿頭絲線格外之機試舉看

竿頭の絲線具眼は方に知る、賓主相逢ふ一挨一拶の間に、釣針を下して他を勘檢せんとするの兆あれば、具眼の人は直に其れと覺るに依つて、其の何に欺かれ、後手に廻るやうな頓問なことはしない、格別の機も作者は方に辨ず、格外とは通常の規格を外れた機鋒であるから、何時何處で如何なる形式にあらはれてくるやら分らぬけれども、眞箇作家の衲僧ならば直に其の始終を辨見することが出来るはずである、作者といふは作家といふも同じ意味で、唐宋の頃に詩文の盛んに行はれたため都べて雄偉なる人のことを作家とも作者とも稱したのである、且く這へ作麼生か是れサア其の竿頭の絲線と云ひ格別の機と云ふは、如何やうなものであらうぞ、試みに舉す看よ、此の本則に參じたならば其の様子が解らうぞと言ふ。

本則 舉僧問大龍色身敗壞如何是堅固法身話作兩極分開也好龍

云。山花開似錦。澗水湛如藍。無孔笛子撞着誰拍板○渾崙壁僧○人從陳州來却往許州去

承し、其次が大龍であるから達磨十四世の宗師である、色身は敗壞す如何なるか是れ堅固法身との問である、色身と云ふは肉體のことであるが、此の僧は肉體の外に別に法身と云ふものがあつて、此の肉體は死んだ後に敗壞して焼けば灰になり埋むれば土になつてしまふけれども、法身とか法性とか眞如とか云ふものは、ドコまでも堅固なもので常住不變、いつまでも遷り變らないものと、色身法身を二つに見ての間である然るにソウ云ふ考へは全く外道の見であつて、佛法の上にては決して許すべからざる邪見である、當今の多くの佛教徒と稱する者は僧俗ともに皆此の邪見に落ちて、甚しきは此の身は死んでも靈魂は死なないなど云ふて、死んだ後に靈魂とか云ふものが地獄へでも極樂へでも往くやうに思ふて居るのが、十中の八九であるが、それは皆外道の邪見であつて、決して佛法の正義では無い、然し今は其事を論じて居る場合で無いからお預かりにして置くが、其事に就て手近く大要を知りたいと思ふ人は、承陽大師の辨道話、または夢窓國師の夢中間答、あるひは慈雲律師の十善法語などを熟讀するが宜しい、着語に話兩極と作る、色身と法身と別になつたぞと咎め、又分開するも也た好し、別に見たからと云ふても好いでは無いかと冷かしたやうに言ふて、色法二身を超絶させやうとするの見える、龍云く山花開いて錦に似たり、水湛えて藍の如し、誠に好い風景であるが、これは一體に色身敗壞と云ふことか、法身堅固と云ふことか、都べて思量分別を超絶して、只是れ山花開いて錦に似たり、澗水湛えて藍の如しである、若しも之に理窟をつけ、義味を求めて知解しやうとしたならば、千里萬里に蹉過了ることになる、或は之を無意味に口に任せて答へたのであるとか、又は飛び離れたことを言ふて問者の口を塞いだのであるとか、色々と考へる者

もあらうが、それはハヤ皆理路をたどり知解を求むると云ふもので、決して大龍の宗旨に逢着することは出来ぬ、着語に無孔の笛子毘拍板に撞着す、無孔笛は穴の無い笛であるから、音を出さない、毘拍板は毛毘を板のやうに張つて、それを打つても音はしない、即ち今此の天龍の答も其の如く何とも手の着けやうが無いと云ふのである、又渾崙擊けども破れず、崑崙は元來山の名であるけれども、俗に都べて聞くて眼鼻の分らないものゝことを渾崙と云ふ、それを擊けども破れないと云ふは、やはり手の着けやうの無いと云ふ意味、人は陳州より來りて却て許州に往き去る、京都から來たと思ふたらモウ大阪へ往つてしまふたと云ふやうなことで、色身法身を二つに見たほどの間に、何とも手の着けやうのない本地の風光を示されたので、頓と蹤跡が見とめられないと云ふのである。

頤問曾不知知東西不辨弄物不答還不會南北不分換却月冷風高

何似生○今日正當這時節○天○下人有眼不會見有耳不會聞古巖寒檜不雨時更好○無孔堪笑路逢達

道人也須是親到這裏始得○還我不將語默對向什麼處見天龍○手把白

玉鞭折了一至七拗驪珠盡擊碎留與後人看不擊碎放過一着○增瑕類泥

團作升麼○過犯彌天國有憲章議法者懼○朝打三千條罪只道得一半在○八萬

業也未還
得一半在

問會て知らず、彼の僧は色身のわけも法身のいはれも全く知らずに、妄浪に問ふたのであるぞと、先づ問者を評した、着語に東西辨せずと云ひ、又物を弄して名を知らずと云ふ、皆此僧の不知を評したのである、帽を買ふに頭を相す、これは前にもあつたが、帽子を買ふには頭の寸方相應なのを擇ばねばならぬやうなもので、雪竇が不知と云ふ帽子を、此僧の頭にかぶせられたのは誠に適當である、問すでに不知であるから答還て不會である、不會とは俗に合點がゆかぬと云ふほどのことであるのを、禪語では悟りが開けないことになるのである、然るに今此の不會は言語同斷心行處滅の義と見るが好い、本地の風光は言語を以て言ひ盡されない所を、且らく假りに山花開いて錦に似たり云々と語はれた、此の不會でなければ彼の東西不辨の病を治すことは出来ない、着語に南北不分と不會を形容した觸機を換却す、彼の僧の不知に對して本分の不會を以てしたのは、頭の骨を入れかえたやうなものである、江南江北と不知不會の兩面を形容した、月冷かに風高し、これは其の不會の境界の寂寞たる風致を語るので、彼の嚴子陵を賛して、先生之風山高く水長しと言ふたも同じやうな味ひである、着語に何似生、其の味ひがドンなであらうぞ比べて見やうものも無い、今日正當這の時節、その風光が何時あらはれるぞと云ふに、今日只今朝な夕なが皆其の時節ぞ、然るに天下人眼あれども曾て見ず耳あれども曾て聞かず、此の風光は元來眼を以て見たり耳を以て聞いたりすべきもので無いからである、古巖寒檜、更に此の好風光を添へ來つた、苔むしたる巖石に傍

ふて老檜樹の木枯し、何とも言へぬ寂莫蕭條の氣韵、着語に雨、ふらざる、時、更、に、好、し、東坡居士が西湖の景を詠して雨奇晴好と言ふたやうなアンパイ、無孔の笛子、琵琶板に撞着す、此の語は前にあつた如く音沙汰の無い姿、何とも手の着けやうが無いと云ふ意味、サテ大龍の此の答話の機輪から見わたせば笑ふに堪えたり路に達道の人に逢ふて語黙を將て對せざりしをと、これは曾て香巖の志閑禪師が、譚道頌と云ふを作りて其中に言はれた句であるが、達道開悟の人に出あふた時には、語ることも出来ねば黙ることも出来ないと云ふのであるが、今此の大龍の活機から見れば誠に笑ふべきことである、ナゼかと云ふに、大龍は只此の山花澗水の二句を以て十分に本地の風光を諷ふたぞと言ふのである、着語に也、た、須、ら、く、是、れ、親、しく、這裡に到つて始めて得べし、それは大龍の境界に至り又雪竇の分上に於てこそ笑ふことも出来るのぞと云ひ、我に拄杖子を還し來れ達道の人ならば拄杖子を持つて居るであらうに、それを用ゐることを知らぬならば圓悟にわたせと言ふ、群を成し隊を作して無塵に來る、ナニ達道の人など云ふても群を成し隊を作すほどあるよと仰へる、又若し語黙を將つて對せずと云ふならば什麼の處に向つてか大龍を見ん、且つ又語黙を將つて對せずと云ふならば箇の什麼を將てか他に對して好からん、其の語意は皆解釋に及ぶまい、手に白玉鞭を把て鬪珠盡く擊碎す、白玉鞭とは大龍の山花澗水の句を稱し、鬪珠とは彼の僧が堅固法身を珍重がるに譬へたので、彼れが敗壞する色身の外に、別に堅固なる法身ありと認めて居る閑妄想の固りを、大龍が無孔の鐵槌にひとしき白玉鞭を振りあげて、只一撃に打ち碎いてしまふたぞと言ふのである、白玉鞭の下の着語に一より七に至るまで拗折し、れりとある、これは一柄の白玉鞭を七尺の拄杖に見立て

て、其の白玉鞭も亦た畢竟無用の閑家具であるに依て、圓悟は一より七まで幾段にも打ち折つてやらうぞと、ます／＼自分の風光を高尙ならしめた、鬪珠の下に後人に留與して看せしむ、其の擊碎した有様を天下後世の參學者に能く見せるが好い、凡そ如何ほど尊きものでもソレを珍重がつて擔ぎ廻れば、皆救ふべからざるの大患となる、就ては斯う打ち碎かれた有様が好い龜鑑ぞと云ふのである、可惜許此の僧が擔ぎまはりさへせんければ打ち碎くにも及ばぬものを、鬪珠に何の罪があらうぞ惜いことをした、擊碎せずんば瑕額を増さん、若しもこゝで大龍が之を打ち碎いてしまはなかつたならば、却て其の珠に瑕が多くなるであらうぞ、即ちこれで今大龍が打ち碎いたと云ふのは、彼の僧が擔ぎまはるのを奪ふたので、珠は擔ぎまはりさへせんければ、元來一點の瑕も無いのであると云ふことが知れた、然るに近來は靈魂とか精靈とか、色々な名を附けて有難そうに擔ぎまはる者が多いから、本來の面目が全く見えなくなるほどに、瑕もつけば垢もついた、之を何とかして防がなければならぬのである、不擊碎の下の着語に、一着を放過すナニ不擊碎とな、それは一着を放過して後手にまはつた、早く擊碎すれば好かつたに、又無塵にし去る、や其れで其の儘にして置くつもりかと咎めた、瑕額の類の字は、絲に節があつて平らで無いことなそうな、着語に泥團を弄して什麼か作さん瑕額を増すやうな惡戯をしては何うもならんぞと咎め、轉た郎當たるを見る、若しも瑕額を増すやうなことであつたならば、誠に不都合千萬なことでは無いか、過犯彌天擊碎したに依つて罪を免れたやうなもの、若しも瑕額を増してあつたならば、其の罪過が天地に滿ち塞がるほどであらうぞ、國に憲章ありて、苟くも罪を犯した者は決して免るゝことが出来ぬやうなもので、法を識る

者は懼る、其のはすよ朝打三千幕打八百の刑を受けるのであるから、イヤ朝打幕打のみならず三千條の罪あり、若しも斯かる場合に於て本分の令を下し、擊碎すべきは擊碎し、褫奪すべきは褫奪してしまはなければ國の憲章の三千條の罪科を一時に受けねばならぬことになるぞと言ふて、人の師となり他を接する者を深く警醒せられたのである、着語に只一半を道ひ得たること有り、雪竇が斯ほどに言ふのも僅に一半に過ぎない、八萬四千無量劫無間の業に墮ちてもまた未だ一半を還し得ざること有り、實に其の本分に背く罪の甚だ深重なることを怖れねばならぬぞと言ふ。

第八十三則 雲門露柱相交

本則 舉雲門示衆云古佛與露柱相交是第幾機交涉千里外沒

裂ハ自代云東家人死西家人助南山起雲乾坤莫不北山下雨點滴不施

北半河

雲門文偃大師の事は前にも屢々出てあつたが、實に千古傑出の宗師であつて、門下から、九十餘人の善知識を出した人であるから、遷化の後の尊崇も尋常並々の事では無かつたが、埋葬の後十七年を経てから、節度使の阮紹莊と云ふ人が靈夢を感じたと云ふので、天子に奏し勅許を受けて雲門山の墓を開いて見たと

ところが、容貌すこしも變らず儼然として入定して居たと云ふので、其の遺骸を都まで持つてゆき一ヶ月以上宮中に留めて禮敬供養し、更に山に還して葬らせ、勅して大慈雲匡眞弘禪師と云ふ謚號を賜はつたとある、火葬した遺骨ならば他にも例があるけれども、埋めてから十七年もたつた肉體のまゝの遺骸が、參内して天子の供養を受けたと云ふのは、世界萬國にも例の無いことであらうと思ふ、それは兎もかく生前に於ての機鋒峻峭であつたことは、亦た他に比類が甚だ稀れである、或時衆に示して云く、これは謂ゆる上堂の時の垂示であるそなた、古佛と露柱と相交は是れ第幾機ぞ、古佛と云へば釋迦も彌陀も古佛である、乃至三世の諸佛も歴代の祖師も古佛である、イヤ今現に斯う言ふて居る雲門其人も古佛であらう、其の古佛が露柱と交はる、露柱のことは前にもあつたが、現在目前に誰も見て居る柱のことである、其の柱と彼の古佛と相交はる、誠に親しく交際して居ると云ふは、是れ第幾機に屬することであるぞとの問である、機といふは例のことながら機關とか機根とか機輪とか續く字で、色々に使はれるけれども、禪語では多くは精神の作用、すなはち心の働きと云ふ意味に使はれるのであるが、其の心の働きにも段々の階級がある、例へば眼にチラリと物を見た途端に、彼れは黒いと見れば赤いと見わけるのも心の働きであり、更に彼れは黒いから氣に入らない二目と見たくないとか、これは赤いから美しいモツと見たいとか思ふのも心の働きである、サテ又其の前にも後にも色々と心の働きはあるので、前と云へば肉眼が向はな

段目の働きであらうぞとの間である、これは古佛と露柱との交りばかりでは無い、若しコレが燈籠と露柱であつたならば何うであらうぞ、露柱と露柱は何うであらうぞ、月と花とは第幾機で、山と川とは第幾機ぞ、此れ等はすべて皆機外の消息であると云ふことは、誰でも一往わかるであらう、然るにコレが淺野長矩と吉良義英とは何うであらうぞ、業平と小町とは何うであらうぞ、猫と鼠とは如何、虎と豺狼とは如何と言はゞ、其の機は誰にも思ひやらるゝであらう、然るに更に世尊の拈華に對して迦葉の微笑したる其の機は何邊に屬するぞ、二祖が臂を斷ちて達磨に迫りたる其の機は何邊に屬するぞと云ふに至りては、學人概ね漠然として自失することを免かれぬであらう、況んや今は古佛と露柱との機、サスガに雲門門下の納僧だちも一人として之に答ふる者は無かつたと見える、著語に三千里外沒交涉イヤハヤ掛け離れた話であるぞと坐下を見まはし、其のくせ七花八裂、雲門の示衆は誠に歴々分明、誰にも能く解るはずぞと云ふ、サテ誰も答へたる者が無いから、雲門大師自から代りて云く、圓悟が東家の人死すれば西家の人哀を助くるやうなものよと評し、一合相不可得、一合相とは讀んで字の如く、古佛も露柱も別々なものではない、全く一つよなどと思ふたならばソレは全く不可得ぞ、決して雲門の宗旨を得られるものではない、然らば一合相の反對で異離の姿、すなはち古佛と露柱は別々であると思ふたならば、其れも亦た元より不可得ぢや、それでは何うしたものであらうぞ、雲門大師は南山に雲を起し北山に雨を下すと云はれる、これは一體第幾機と云ふことであらうか、南山の雲と北山の雨と如何なる交渉があるのであらうか、一相と云ふことか異相と云ふことか、要する所は吾人お互ひが一切諸法と相交るの標準をコ、に取れと云ふこと

か、圓悟は刀研れとも入らず餘りに雲が重なり重なつて髪を容るべき間隙も無いぞと言ふ、又雪寶も施さず、雪寶は雨を下すと云ふが、蓋天蓋地只一雨となつて点滴の姿は絶えて無いぞと言ふ、半は河南にして半は河北、南山と云ひ北山と云ひ、雲と云ひ雨と云ふ、是れ同か是れ別かと參じて見ると云ふことか。

頌 南山雲 乾坤莫不入 北山雨 點滴不施 四七一二三 面相觀 幾處覓

帶累傍人 新羅國裏會上堂 東湧西沒 東行不見 西消息來 大唐國裏未打

鼓 凡一刻 還我話頭來 苦中樂 誰教阿 樂中苦 兩重公案 使誰舉 苦便苦 誰

道黃金如糞土 具識者辨 且道是古佛是露柱。

南山の雲北山の雨、南山の雲北山の雨と雲寶が雲門の語を幾たびも吟誦して感興に入つた様子に見える、是れ果して第幾機であらうぞ、圓悟は乾坤觀る莫しナニ南山の雲とナ、其の様なもの天にも地にも絶えて見えぬぞと言ふ、刀研れども入らず、蓋天蓋地密雲漠々と滿ち塞つては、これが雲ぞと別けて見るべきものの無い有様点滴も施さずと云ふも同じ味ひ、拙作に雷を詠じて「あめもつちも霜のみとこそなりにけれ那須野の原の冬のあけぼの」と口ずさんだのがある、一色邊の景況も亦た一段のながめである、然らば雲の一色かと思へば北山の雨がある、サテは二邊に落ちたのであらうか、ソコで南山と北山と雲と雨と畢竟是れ同か是れ別かと參じなければならぬのである、圓悟は半は河南にして半は河北と言ふ、河南と河北亦た

是れ同か別か、四七二三面相観る、四七は例の西天の初祖摩訶迦葉より東土の初祖菩提達磨に至る二十八代、二三は少林の初祖から曹溪の六祖まで、祖々正傳嫡々面授し來つた、其の歴代の祖師は皆能く南山の雲、北山の雨を御存知であると言ふ、是れ果して第幾機ぞ、祖々相承と古佛露柱の交りと是れ同か是れ別か、南山の雲北山の雨よ、圓悟は幾處に覓れども見えす、歴代の祖師は能く視たと雪竇は言ふけれども、我には何處を尋ねても見るべきものは無いと言ふ、然るに四七の二三のと引合に出しては列祖が迷惑であらうと云ふので傍人を帶累すと咎め、更に露柱に燈籠を掛く、現在目前其れソコにぶらさがつて居るでは無いかと言ふ、新羅國裡に會て上堂し大唐國裡に未だ鼓を打たず、新羅といふは今日の朝鮮のことで、大唐とは遠く離れて居ると思ふのが普通の人情である、されば新羅に上堂すれば大唐に鼓を打つと云へば、遠近の隔てを絶して法界平等の姿、彼の橘皇后が「もろこしの山のあなたに立つ雲は我が日の本に焼く火たりけり」と云はれたも同じ意味である、然るに今は新羅に上堂して大唐に未だ鼓を打たずと云ふのであるから、これは掛け離れて遠くに依つて、互ひに關係が無いと云ふとであらうか、コ、が實に雪竇の文字を弄することの甚だ巧みなる所で、遠いとも近いとも、關するとも關せぬとも、謂ゆる言語の道の斷えたる所を妙にあやつりて其の味ひを示されたものである、若語に東涌西洩と自由自在の姿を評し、更に東行は西行の利にあらず、コ、で行といふのは銀行などと云ふ時の行の字で商賣の市の事である、今こゝの意味は魚河岸の方では青物市で贏けたやら損をしたやら一向に知らぬぞと云ふほどの事で、畢竟お互ひ無心無念にして一異の相を絶したる姿である、那裡より、這の消息を得來る、元來遠近の相を絶してあるのに、今雪

竇はドウして新羅だの大唐だのと云ふ話をするのかと咎めて、吾人後學の者が其の語脈裡に轉ぜられて却て遠近の分別などする者あらんを豫防せられたものと見える、遅一刻未だ鼓を打たずと言ふもハヤ一刻おくれたとぞと抑へ、更に、我に話頭を還し來れ、己に新羅で上堂したと云ふに未だ大唐で鼓を打たぬなどと話は話が齟齬する、其の様な話は止めるが好いと云ふて暗に益々一味平等の眞味を示し、又先行未だ到らず末後太だ過ぎたり、ドウも後前の足拍子が揃はないとぞと奪ふて語路の痕を打ち消す、これでハヤ本則の頌は済んでしまふたが、これからは例の如く雪竇落草の拈弄である、苦中の樂、樂中の苦、苦かと思へば樂は濟んでしまふたが、これからは例の如く雪竇落草の拈弄である、苦中の樂、樂中の苦、苦かと思へば樂があり、樂かと思へば苦がある、更に明中の暗とも、暗中の明とも、迷裡の悟とも、悟裡の迷とも見ねばならぬ、經には色即是空々即是色とも説いてあり、或は平等差別相即圓融なども言ふてある、若語に阿誰をして知らしめん誰がドウして能く其の苦中の樂を知らうぞ、兩重の公案とはドチラなりとも片方で分るにと咎め、誰をして舉せしめん、これは他人に知らせて貰ふべきことでは無い、苦は便ち苦にして樂は便ち樂、元來に苦を厭ふは樂を求める妄想があればこそ、苦樂と云ふことが氣にかゝるのである、若し能く厭ふの心もなく求めるの念もなかつたならば、苦は苦に任せ樂は樂に任せて何の厭ふべきも無ければ求むべきも無い、コ、に至りては苦だの樂だのと云ふ閑名目も畢竟無用である、那裏にか兩頭三面あり來るや、本來無二亦無三のものよ、誰か道ふ黄金菟土の如しと、此れは前漢書の列傳に出て居る故事で、張耳と云ふ者と陳餘と云ふ者が最初は誠に親しい交りを結んで居て、吾々兩人の交りの堅い所に比べて見れば、黄金も猶ほ菟土の如くであると言ふたこともあつたが、其後に兩人の意見衝突して互ひに權力を争

ひ、謂ゆる糞土よりも穢はしき姿となつてしまふたと云ふ話があるのを引いてきて、今や古佛と露柱の相交はるの、最初から互ひに無心無念にして一毫も凡情を雜えないのであるから、強いて黄金を糞土の如しなどと言ふ必要もなく、黄金は黄金のまゝに、糞土は糞土のまゝに、本より擇ぶ所もない、圓悟が其眼の者は辨ぜよ、黄金と糞土と是れ同か是れ別か、試みに拂拭して看よ、能く塵埃を拂ひ除いて看るが好い阿刺々と云ふはオツト危ないと云つたやうな言葉、多くは黄金と糞土との見さかひが附くまい可憐許まことに口をしいことぞ、且、道へ是れ古佛か是れ露柱か、黄金と糞土とを辨ずるはサテ措いて、古佛か露柱か辨じて看ると本則に立戻つて參究せしめられた。

第八十四則 維摩不二法門

垂示 道是是無可是言非非無可非是非已去得失兩忘。淨裸裸赤灑灑。且道面前背後是箇什麼。或有箇衲僧出來道。面前是佛殿三門。背後是寢堂方丈。且道此人還具眼也。無若辨得此人許。爾親見古人來。

此垂示は、先づ初めに是非だの得失だの、善惡邪正だの迷悟苦樂だのと云ふ相對差別の相を都べて泯滅し

てしまふのである、乃ち是と道ふも是とすべき無く、非と言ふも非の非とすべき無しとある、迷悟と言ふも迷悟の迷悟とすべき無く、苦樂の苦樂と言ふも苦樂とすべき無く、都べて兩々双々相對して彼れの此れと言ふもの、元來實性なきことは推て知るべきである、サア斯う達觀して見れば是非已に去り得失兩ながら忘じて淨裸裸赤灑灑である、畢竟是非だの曲直だのと云ふ忘想分別が我にあればこそ、宇宙間の一切萬法みな悉く其の真相が隱没してしまふのである、然るに今は己に我に是非の心が無い、得失の分別を忘れてしまふた、斯うなれば宇宙萬象みな只天真爛漫で少しも掩ひ蔽される所が無くて、都べて悉く其の本色があらはれてくる、それが淨裸裸赤灑灑で身に寸絲も繋げぬ丸はだかの姿である、けれども天は必ず高く地は必ず低く、水は必ず濕ひ火は必ず焼くと云ふ本分の姿は、元より歷々分明にして寸分も味ますべきでは無い、其處の様子を且らく道へ。面前背後是れ箇の什麼ぞ、絶對と聞けば絶對につきまはり、不二と言へば不二に動轉せられるやうなことではならぬ、幾ら是非を去り得失を忘すと言ふたからとて面前は面前であり背後は背後である、手で歩行することも出来ねば足で箸を持つことも出来ぬ、サアどうしたものであらうぞ、或は箇の衲僧あり出て來りて道はん、面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈と、此れは法堂の中央に南面して立つて居ての話である、若し之を吾々の書齋の机に依り靠つて居てのこととすれば、面前は是れ竹椽小庭梧桐修竹背後は是れ書架押入典籍骨董と云ふたやうなアンバイ、都べて目前現成底の事々物々、一毫も味ます所は無い、且、道へ此の人還て眼を具するや也た無や、即ち一旦は差別を泯じて平等に入り、更に平等に即して差別に還る底の人若し此の人を辨得せば爾に許す親く古人を見來る

ことを、此人とは誰であらう即ち天竺毘耶の古先生維摩詰其人であるぞといふので本則を提示された。

本則 舉維摩詰問文殊師利一漢太然合關何等是菩薩入不

二法門故犯文殊曰如我意者道一什麼離諸問答直得分疎不下是爲入不

切法作二無言無說道一什麼無示無識離別人離諸問答道一什麼是爲入不

二法門許多葛藤於是文殊師利問維摩詰我等各自

說已仁者當說何等是菩薩入不二法門這一華英道金粟如來

得一人倒轉頭來也雪竇云維摩道什麼咄復云勘破

丁也且非但當時即今也雪竇也是賊過後張弓復云勘破

維摩詰文殊師利に問ふ、此れは維摩經が本據である、具さには維摩羅詰と云ふのを常には略して維摩とばかりも云ふて居る、天竺の毘耶離國の人で五百の長者の隨一である、在家居士の身を以て大乘佛法の眞髓を穿ち、小乘佛法にばかり執着して居る羅漢だちを手當り次第に叱りつけて居たが、或時釋尊お説法の席に維摩が見えない、釋尊はナゼ今日は維摩が來ぬかとお尋なされた、彼れは病氣で引つ込んで居るそうぞ御座いますと申しあげたのをお聞きなされて、然らば誰ぞ病氣見舞に往けと仰せられるので、先づ第一に

舍利弗尊者にお命じになつたが、舍利弗は曾て坐禪のことに就いて甚く維摩に叱られたことがあるので、ドウぞ私は御免かふむりたいと云ふ、然らば目連に往けと言はれるが、誰も彼も皆怖ろしがつて一人として往かうと云ふ者が無い、そこで結局文殊師利菩薩が如來の教勅を受け、菩薩だちや羅漢だち一同を引つれて維摩の病氣見舞に往き、遂に入不二法門といふことに就て大問答をしたそのことを記した經文が即ち維摩經である、其の支那翻譯が六通りもあるけれども、尤も多く用ひられて居るのは羅什法師の翻譯で、十卷十四品に分かれてある、其中で此の本則の話は、其の第八卷の第九入不二法門品と云ふ所に出て居る、維摩羅詰と云ふ語を譯せば淨名または無垢稱と云ふことになる、文殊師利と云ふは七佛の師とも稱し、凡そ諸佛の大智慧を表するので、實際に肉體を具へて此世に出現した人では無く、全く理想に人格を與へたものゝやうにも見えるが、或は又實際に其人があつたやうに思はれる所もある、誠に不思議な菩薩である、文殊師利を譯すれば妙吉祥と云ふことになるそうナ、着語に這の漢太然合關、一場一體に此の維摩と云ふ漢は色々な厄介なことを仕出かして騒々しい漢である、病氣であるなどと言ふて八萬四千の羅漢だちや菩薩等を一堂に引寄せて羈市でも立たやうであるぞ、口を合取せよ何を文殊に問ふのである、元來他人に問ふべき法のあるべきでは無い、何等か是れ菩薩の入不二法門、此れより前に法自在菩薩等三十一人の菩薩だちが皆其れゝに自分の見舞を以て、入不二法門の道理を説いて維摩居士に答へたのであるが、一體に不二と云ふことは已に是れ二に對した言葉であつて唯一と云ふ意味では無い、故に分りよく言へば二にして不二と云ふべきのである、元より一ならば最初から一と云ふべきであるが、宇宙の諸法、其の現相から云

へば已に是れ千差萬別で決して一とは言はれない、即ち皆大小深淺厚薄高低善惡邪正是非得失苦樂迷悟と云ふやうに、悉く兩々双々相對して二ならざるものは無い、然るに其の本體より之を見れば千差萬別の諸法皆悉く平等無差別の一流に歸せざるは無い、こゝに於て二にして不二の法があらはれるのである、然るに大方の世の有様は皆其の二、すなはち千差萬別の現相にばかり執着して其の一流平等の本體を忘れて居る、そこで之を導いて不二に立戻らせるの道がなければならぬことになつたのが、謂ゆる佛法といふもので、其の本分の立場から見れば、實に子供をすか賺して啼泣なみを止めるの手段に過ぎぬのであるけれども、亦た已むを得ぬのである、然るに其の法にも色々の階級があつて、淺い所から深い所へ、低い所から高い所へと段々に進むのであるが、今は愈々菩薩の入不二法門とあつて、モウこれで結局の目的に達すると云ふ處であるから、従前三十一人の菩薩だちは皆其の邊で答へられたのであるが、それでは中々維摩に承知が出来ない、ソコで第三十二人目が即ち文殊菩薩の當番になつたのである、着語に、コト、さらに犯す、此の入不二法門は元來言説を以て解き明さるべきことでは無い、且又他人に問ふべきことでは勿論無い、それを平常の見識として居る維摩が、そら／＼しく文殊の意見を問ふと云ふは何事ぞと咎めるやうに言ふて、益々入不二法門の高尙なることを示すのである、文殊云く我が意の如くならば、着語に「什麼と道ふぞ、我が意とは何のことである、何が我で何が意である、直に得たり分疏不下イヤハヤ流石の文殊も維摩に一撈されては最初から不見識なことを言ひ出したぞと抑へ、擔枷過狀、自分から自分の身に繩を掛けて裁判所へ出てゆくやうなものぞと言ひ、更に髻を把て衝に投ずと言ふも同じ意味である、そこで文殊の

説は一切法に於て圓悟は什麼を喚でか一切法と作す、了々として見るに一物も無く人も無く佛も無し、然るに一切法に於てなど、は文殊寢ぼけたかと咎める、無言無説、十方三世の一切諸法畢竟言説を離れたものであつて、何とも口で言ひあらはすことは出来ぬ、圓悟はソレを咎めて、什麼と道ふぞ、已に無言無説であると言ふことを言説を以て言ふて居るはドウしたものぞと詰る、文殊は更にイヤ無言無説ばかりでは無い無示無識であると言ふ、言説の外の如何なる手段を以ても示すことも出来ねば識ることも出来ぬ、着語に別人を瞞すことは即ち得ん、其のやうなことを言ふても他人ならば賺すことも出来やうが、維摩をば到底瞞することが出来ないぞと言ふ、然るに文殊は更に諸の問答を離る、入不二法門と云ふことは、之を他人に問ふことも出来ねば又他人に答へることも出来ぬものぞと言ふ、そこで圓悟は例の如く什麼と道ふぞ、問答を離ると言ひながら問答して居るは何事ぞと咎めるのである、是を入不二法門と爲すと此れが文殊の答案であつた、即ち釋迦門下の大菩薩だち三十二人打ち揃ふて維摩の質問に答へた大總督であつたのである、サスガに前の三十一人のやうに先づ二を擧げて置いてソレから其二を不二に論結すると云ふやうなことは無い、最初から一とも異とも不二とも其のやうなことは言はぬ、都べての言説も示識も問答も皆離れてしまふた本分の答ではあるけれども、維摩居士は其れで能く承知するやらせぬやら、已にハヤ圓悟は着語に入ることを用ひて、什麼をか作さん、元來不二の法は出入を絶つたものであるに、其の法門に入るの入れぬのとは何事ぞと咎め又許多の葛藤を用ひて、什麼をか作さん、文殊の言説を都べて排斥する、圓悟は更に評唱の中に於ては文殊が無言無説と言ひながら尙ほ言説して居るのを評して、掃帚もて塵

を拂ふが如く相似たり、塵は去ると雖も筈迹猶ほ存し末後依前として蹤跡を餘すと言ふて居る、是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ我等(三十二人)各自に説き已れり、仁者(維摩を指す)當に説くべし何等か是れ菩薩入不二法門と云、で主客顛倒して今度は維摩居士が文殊等に對して答へねばならぬこととなつた、果して維摩は何と之に答へるであらうぞ、着語に這の一靠道ふと莫れ金粟如來と、これは嘉祥大師の維摩經疏に、文殊は過去の龍種上尊佛と云ふ古佛で、維摩は金粟如來と云ふ古佛であると云ふところが思惟三昧經と云ふ經文に出て居ると云ふことがあるけれども、未だ其の本據は見ないと云ふてある、ソコで今此の着語の意味は、幾ら過去の金粟如來であるなどと云ふても今此の文殊の一靠に出あふては閉口であらうぞと云ふのである、靠は倚靠と續いて依り懸る意味のこともあるけれども、今は靠倒と熟字して推し倒すの義である、設使三世の諸佛も也た口を開き得ざらん、其の閉口は金粟如來ばかりでは無いぞと云ふので、前の着語と續いて居る、此れは元來口を開くべき場合では無いからである、鎗頭を倒轉し來れりと云ひ、一人を刺殺すと云ふ、皆文殊の一間を稱揚するのであるが、餘りに冗語に過ぎるやうである、恐らくは後人の忘添であらう、但だ箭に中るは人を射る時に似たりと云ふは、維摩が今は受太刀になつて是まで多くの人だちを問ひ苦しめた其の痛さが身につまされるであらうと、維摩に向つての着語である、雪寶云く維摩什麼とか道ひし、維摩經の經文では此の様子を維摩詰默然と書いてある、然しソレは記者の言葉であつて、何も其時に維摩居士自から我は默然と言ふたわけでは無い、且つ又默然と云へば乃ち亦た默然といふ一つの法となつて、設ひ言説では無くともソレも一種の表象に陥る、ソコで雪寶は默然とも良久とも何とも言

はずに、只維摩什麼とか道ひしと働いた、これは一と云ふことか不二と云ふことか、言説か示識か、只是れ什麼とか道ひしと參究して見るの外は無い、圓悟は咄と着語した其の什麼と道ひしと言ふもハヤ第二第三と仰へるのである、萬箭心に持る、四方八面から雨の如く射かけて來る矢が悉く胸板へ集まつたやうで、此の一拶には誰でも進退これ谷まるであらうと言ふ、他に替て道理を説く、維摩は默然として何も言はぬから、雪寶が維摩に代りて什麼とか道ひしと道理をつけて説いたのかと冷かした、復云く勘破了也諸人は維摩の默然を何と合點するかは知らぬが、我が雪寶は能く其の眞意を勘檢し了りてあるぞと言ふ、要する所は不二法門が默然に在るなどと錯り會したならば、千里萬里の隔たりになるであらうぞ、不二法門は元來語默動靜を超過したものであるから、一切の語默動靜皆悉く不二の法門ならざるは無いのである、着語に但當時のみに非ず、即今也、た慙麼、そのかみ會て雪寶が勘破したばかりでは無い現に今此の圓悟も勘破了よ、けれども今さら勘破了也などと言ふのは雪寶も也た是れ賊過後の張弓で遅い遅い、然も衆の爲めに力を竭すと雖も争奈せん禍の私門より出るを、これは雪寶の老婆心で斯のやうなことを言ふのも已むを得ぬやうなもの、後々に之れが爲め言句に着き廻つて不二門に迷ふ者が出來やうぞと抑へ、更に且く道へ雪寶還て落處を見得ずや、一體に雪寶が本統に此の維摩一默の底意を合點して居るのか覺東ないぞ、夢にも也た未だ夢見ず什麼の勘破とか説かんと、雪寶を抑へるやうに言ふて、益々宗乘を高尙ならしめ、元來此の事は夢想にも渉るべきことで無いは勿論のこと、勘破の不勘破のと云ふ論量を絶したものであるといふことを示し、更に檢と言ふ、到底此の一默の參究は峻峻峭拔容易に攀ち躋ることの出來ない處で、金

毛の獅子もまた摸索不着であらう、金毛の獅子といふは文珠の乗つて居る獅子のことで、今は即ち文珠をさしたのである、要する所は維摩の一黙は其響き雷の如くであつて、聞かんと欲すれば耳聾し、耳を掩ふても鼓膜破裂せんとする有様を色々語をかへて吾人の参究に資せられたのである。

頌 咄這維摩老 咄他作什麼 臥疾毗耶離 臥他作什麼 悲生空懊惱 悲他作什麼

王寶劍 爲他四事 朝打三千棒 打八 一室且頻掃 全身太枯槁 病則且置爲什麼

長無明 勞而無功 臥疾 毗耶離 帶累一切人 全身太枯槁 口似匾擔 一室且頻掃 猶有這箇

喫不得 喘 七佛 祖師來 客來須看 一室且頻掃 成羣 當時便靠倒 若天若天 不

在鬼窟裏 請問不一門 若有可說 金毛獅子無處討 不見 當時便靠倒 道什麼 不

此の維摩老と最初から呌却して叱りつけた、只この一呌で二も不二も語も黙も皆掃蕩し了つた、着語に他を呌して什麼をか作さん雪寶甚だ手緩い、圓悟ならば、朝打三千棒打八百打つて打つて打ちすゑてやるにと言ふ、次に呌し得るも事を濟さじと好し、三十棒を興ふるにと言ふ、前と重複であつて而も語が弱い恐くは後人の書き入れであらうと思ふ、生を悲しんで空く懊惱すとコレが先づ呌却せられた第一の罪狀である、生を悲しむとは衆生を悲愍すること、維摩經の問疾品には、維摩自から其の病因を説いて、一切衆生の病を以て是の故に我病めり、若し一切衆生の病滅せば我が病も滅せん、ゆる者何となれば菩薩は衆生

の爲めの故に生死に入る、衆生あれば即ち病あり、若し衆生にして病を離るゝことを得れば即ち菩薩も亦た病なしと言ふてある、然し本分の地から見るときは、元來病むべきの衆生も無ければソレを悲しむと云ふことも有るべきでは無い、そこで圓悟が他を悲しみて什麼をか作さんと抑へ、更に自ら金剛王寶劍あり、一切群類ことごとく金剛王寶劍を具して居らぬ者は無いに依つて他の悲愍を借る用は無い、他の関事の爲めに無明を長ず、これは餘計なお世話にも人の痲氣を頭痛に病むと云ふ意味、勞して功なし、元來有りもせぬ衆生を悲しみて懊惱するとは誠に徒勞であらうぞ、然るに維摩は疾に毘耶離に臥し全身太だ枯槁す、毘耶離といふ國は、釋尊が長く滞在して説法をせられた摩揭陀國と、只一つの河を隔てた隣境である、毘耶離と稱し子を善思と曰ひ女を月上と名くとある、元來過去の金粟如來であるけれども、安樂の衆生を濟度するために斯やうな身を現じ、且つ幻身無常の理を示すが爲めに病を示したのであるから、甚だ病疲れた様子である、着語に誰に因てか致し得たる、誰の爲めに其のやうな病氣になつたかと言ひ、更に一切人を帶累す、其の爲めに三萬二千の菩薩だちが其の病氣見舞を命ぜられて迷惑したのである、病むことは、則ち且く置く什麼としてか口匾擔に似たる、病氣になつたのは衆生の爲めであるとしても文珠に問ひ詰められて默然閉口したのは何の爲めぞと言ひ、口を開かずには飯も也た喫し得ざらん喘ぐことも也た喘ぎ得ざらんと嘲弄したやうに言ふて暗に一黙の眞底を示す、彼の承陽大師が言語道斷とは一切の言語なりと言はれた味ひを思ひ合はされる、サテ其の毘耶離の維摩の宅へ釋迦牟尼世尊の教勅を受けて七佛の祖師

來る七佛と云ふは釋迦牟尼佛より以前に毘婆尸佛と尸棄佛と毘沙浮佛と拘留孫と拘那含牟尼佛と迦葉佛との六佛あり、番々出世歴代相承して釋迦牟尼佛まで七代になると云ふので、元來佛法は敢て釋迦一佛の新法では無い、宇宙の眞理を其儘に達觀するまでのことであると云ふ意味やら、正法は必ず正師の相承を得べきものぞと云ふ意味やらを教ね示したものである、然るに今此の文殊師利菩薩は、三世諸佛の根本資料たる大智慧を表したものであるから、諸佛の師とも諸佛の母とも謂ふのである、其の七佛の師たる文殊が維摩の處へ病氣見舞に來たと云ふのであるから、主人の維摩も打ち棄てゝは置けぬのである、着語に客來らば、須く看るべし、賊來らば、須く打つべし、其の七佛の祖師とか云ふのは客であるやら賊であるやら能く取調べて接待するが好いぞ、何か知らぬが群を成し隊を作す、三萬二千と云ふ同勢であるような、また須く是れ作家にして、始めて得べし、此の同勢の隊長として世に名高き嶮峻家の維摩の處へ見舞に來るのは餘程の作家でなければならぬ、一室且つ頻りに掃ふ、これは維摩居士が珍客を待つ準備の右様、此時に維摩の臥褥して居た病室は僅に一丈四方の小室であつたと云ふことで、今に方丈と云ふ言葉が残つて居り、又日本の茶道家が茶室を四疊半に定めたのも此の方丈と云ふことに形どつたのであると云ふことだ、サテ維摩は其一小室を奇麗に掃除して寢臺の外には何一つも置かない、これは維摩の方丈中には一切諸法を悉く空盡脱盡して一點の塵埃をも留めない姿を表したのである、此の一切空淨の室であればこそ三萬二千の大衆を一丈四方の中に入れて、狭くもなく廣くもなく、愉快に談論することが出來たのである、着語に猶ほ這箇の在る有り、維摩が幾ら奇麗に掃除をしてもヤハリ這箇だけは遣らうがナ、這箇とは何であらう、其の掃

除しやうと思ふ心、それが有つてはマダ本統に綺麗とは言はれまい、元來鬼窟裡に在て活計を作すもとく不二門には掃ふべきもの無いはずであるに、これは何か謀計のあることらしい、そこで維摩は不二門を請問すと本則の公案に及んだ、着語に若し説くべき有りとも、他に説き了られん、元來不二門は問ふべきも無く答ふべきも無きはずであるに、若しもソレを説くべき道があるとしたならば、三十二菩薩かはる／＼に説いてしまふであらうから、維摩自分に於ては閉口の外はあるまい、打て云く鬪黎に和してまた尋ねれとも見えず、とコレは雪竇に向つて其の不二門とか云ふことを君もろとも尋ねても見當らぬでは無いか、君にも見えまい僕にも見えぬ、イヤ三世の諸佛も歴代の祖師も到底見ることは出來まい、ナゼかと云ふにコレは元來見るべきものでは無いからである、そこで文殊は當時便ち靠倒す、此の靠倒と云ふ語は面白い言葉で、例へば人が屏風などに倚り掛つて居る所をボンと一つ胸でも推せば自分で後へ倚り掛つて居た力のために屏風もろとも顛倒してしまふやうなアンパイと見える、即ち文殊が維摩に向つて我等各自に説き已る仁者まさに説くべしと乗り掛かつて往つたグアイ、着語に蒼蒼天ア、切角築いた不二門と云ふ關處を一推しに推し倒されたと冷かし又什麼と道ふぞ、何を靠倒したと云ふのであるぞ元來不二門は起したもので無いから、倒さるべきはずも無い、果して雪竇は靠倒せすと一轉した、即ち本則に雪竇が維摩什麼とか道ひしと言ふた所、若しも當時維摩が何とか言ふてあつたならば謂ゆる靠倒し了られたであつたらうが、サスガに毘耶の老古錐であるから一默迅雷の如くピクともしなんだ、着語に死中に活を得たりと云ひ猶ほ氣息の在るありと抑揚した、金毛の獅子討ぬるに處なし、サア此の維摩默然の處に至りては、金

毛獅子の文珠師利菩薩も靠倒するところが出来ないばかりでは無く、頓と其消息を窺ふことが成らぬぞと維摩の全機を稱揚し盡された、着語に、咄と其の討ね得ざる底の事を咄散し、還て見るやと學人に向つて其の見識を懲し蒼天蒼天到頭不二法門の行衛の知れぬ悲しいことよと弄するやうにして、愈々宗乘の不可思議なることを示された。

第八十五則

桐峯庵主大蟲

〔垂示〕把定世界不漏纖毫盡大地人亡鋒結舌是衲僧正令頂門放光照破四天下是衲僧金剛眼睛點鐵成金點金成鐵忽擒忽縱是衲僧拄杖子坐斷天下人舌頭直得無出氣處倒退三千里是衲僧氣宇且道總不恁麼時畢竟是箇什麼人試舉看

此の垂示は、衲僧の體用を四段に分けて示された、第一に世界を把定して纖毫を漏さずと、世界中の都べての事を皆掌中に握りつめて少しも他の自由を許さない、即ち宇宙平等の本體は真空清淨にして、一點の影像を留めない鏡の體のやうな處に坐つて居るとした時には、何をもつて往ても受け附けないのであるから、

盡大地の人も鋒を亡し舌を結ぶで、手の出しやうも口の出しやうも無い、是れが衲僧の正令と謂ふものである、第二に頂門に光を放ちて四天下を照破す、前の一味平等真空清淨の體に明煌々と輝やいて居る光が、漢來れば漢を現じ胡來れば胡を現するが如く、智慧の大光明を以て宇宙萬象の現相を照し功用を輝かせ、萬物をして皆其處を得しむるのが是れ衲僧の金剛眼睛であると云ふ、四天下といふことは例の須彌山説に謂ふ所の須彌山の四方に四大洲があると云ふ説から來たので、要は世界中と云ふの意味である、第三には前の把定と放行とを臨機應變に自由に行ふ機合、鐵に點して金と成し金に點して鐵と成す忽ちに擒へ忽ち縱つ、仙術家に還丹と云ふ靈藥があつて、それを鐵につければ其鐵が直に金に成ると云ふ支那の神話がある、今は師家の接化の仕かた一つで鐵を金と成すやうに、如何なる煩悶惱苦の凡夫も一言の下に悟らせることもあれば、又それと反對に中々ゑらい悟りを得て意氣衝天で威張る者を一棒に打ちすゑて退倒三千里させることもあるのは、恰かも金を鐵にするやうなもの、是れが衲僧の拄杖子の作用である、又第四には天下人の舌頭を坐斷して直に氣を出だす處なく退倒三千里なることを得る、これは第一の亡鋒結舌と同じやうではあるが、前のは單に把住の邊、即ち衲僧の正位の號令の上から言ふのであり、今度は把住とも放行とも窺ひのつかぬ邊から人に一言を吐かせぬところ、是れ衲僧の氣宇であると云ふ、氣宇の字の字は寰宇だの區宇だのと云ふ時の宇の字で、一定の區域をさすやうな意味であるのが、今は氣象の集り場處といふやうな意になるのである、然るに今前に擧げた四段の作用の外に且く道へ總に恁麼ならさる時サア其れと全く反對の時には之を何と名けたものであらう、畢竟是れ箇の什麼人ぞ、其のやうな人もあらうかナ試み

に舉す看よと本則に結飯した。

本則 舉僧到桐峯庵主處便問這裏忽逢大蟲時又作麼

生作家弄影漢○草裏裏一箇半箇 庵主便作虎聲將錯就錯○却有爪牙○承言須會宗 僧便作怕勢

兩箇弄泥團漢○見機而作○似則也似是則未是 庵主呵呵大笑猶較些子○笑中有 僧云這老賊

也須識破○敗也 庵主云爭奈老僧何○雪上加霜又一重 僧休去○二

俱不了○天 雪竇云是則是兩箇惡賊只解掩耳偷鈴○且○遺他雪

寶道當時合作麼生免得 點檢○天○下○納○信○不○到

僧あり桐峯庵主の處に到り便ち問ふ、這裡忽ち大蟲に逢ふ時又作麼生、桐峯庵主といふは臨濟大師の弟子に庵主と稱する者が四人ある中の一人であつて、傳燈錄の第十二に其傳が見える、圓悟の評唱には大梅白雲虎溪桐峯の四庵主とあるが、傳燈には虎溪と覆盆と杉洋と桐峯との四人で孰れも其語録をのせられてある、サテ此の本則に於て桐峯に問ひかけた僧も中々作家の衲僧で、桐峯と難兄難弟の人であると見えるが、惜いかな其の名を逸して傳はらない、風外老人は此の本則を評して是れは歴々の大家の出會の仕損ないを擧げたので、是れが亦た雪竇が人の爲めに深切な所であると言はれてある、此時に桐峯は深山に庵を

結んで居たのであるから、這裏忽ち大蟲に逢ふ時又作麼生このやうな山の中で若しも虎が出て来たならば何うなさると庵主の脚下を點檢しかけた、着語に作家影を弄する漢、此の僧も作家らしくはあるが影を弄するまでのことで、確かに虎を手に入れて居りはせまい、草窠裡の一箇半箇、イヤ一箇半箇の虎が無いでは無いが、草の中に居るまでのことで人に咬みつくほどの働きはあるまい、庵主便ち虎聲を作す、此の庵主は虎に逢ふたら何うするぞと云ふ間に對して、自分がハヤ其の虎になつてしまふた、着語に將錯就錯虎を以て問ふたに虎を以て答へたは、双方ともに錯まりに錯まりよ、却て爪牙ありイヤ聲ばかりでは無く爪も牙もありそうだと冷かす、同生同死まことに好いお相手ぞと兩人を揶揄する、言を承けては須く宗を會すべし此れは石頭大師の參同契の語で、何事にもせよ人の一言を聞き一行を見たならば、直に本分の立ち場から之に處せんければならぬぞと言はれたのである、然るに今此の僧が大蟲に逢ふたら何うすると云ふに、本分の宗旨を以て之を接せず、虎聲を作すなどは甚だつまらぬぞと抑へる、然しコレは庵主に深き謀略あつての事に相違ない、僧便ち怕る、勢ひを作す、此の僧コ、の働きやう一つに依つては、庵主の虎を打ち殺すか又は却て其虎に咬み殺されるかと云ふ一つに一つの場合であるが、此僧も中々の作家であるから、機を見て怕れる勢ひを示したのは、これも深き謀略のあつてのことである、着語に兩個泥團を弄する、漢イヤハヤ主客ともに子供の戯れのやうだぞ、イヤさうでは無い機を見て作したのであると弄し、似ることは即ち似たり、是なることは則ち未だ是ならずと更に抑へた、庵主呵々大笑サスガの庵主は僧の怕る、眞似する陥井には落ちぬ、一體に此の庵主は能く笑ふ癖のあつた人と見えて、傳燈の庵主の傳に、此の

本則の話の外にモウ二則のせてあるが、孰れも皆結局は呵々大笑とある、師匠の臨濟は轅もすれば大喝一聲で驚かしたと云ふが、桐峰は其の大喝を大笑に轉用したものと見える、着語に猶ほ些子に較れり、直に一棒を與へれば好いに呵々大笑ぐらゐでは何うも十分とは言へない、然し笑中に刀あり中々油斷のならぬ笑ひやうではある、亦た能く放ち能く收む、只この一笑その中に許したやうで許さぬ所がある、僧も中々の作家であるから這の老賊と罵しつた、其の呵々大笑に油斷をせぬぞと言ふアンバイ、着語に也た須から識破すべし、實に此の呵々大笑に賊機のあることを識破せんければならぬ、然るに敗也這の老賊と罵しつただけでは失策よ、ナゼ直に一掌を與へて思ひきり打たぬか、兩箇都べて放行、桐峰も此僧も只放行することばかり知つて把住することを知らぬ、ナゼ十分に把住して天下人の舌頭をも坐斷せしめぬぞと圓悟が齒痒がるのである、庵主云く老僧を爭奈せん、這の老賊などと言ふたからても、此の桐峰を何うもするこゝとが出来まいかと冷語した、圓悟は劈耳に便ち掌せん、若し我ならば、直に一掌ビシヤリと打つてやるに、惜むべし放過することを、コ、で許すべき所では無いに、雪上に霜を加ふること又一重、前々も許すべからざる所を許して置いて又更に許すとは何事ぞと抑へる、僧休し去る、ソコで僧は更に何とか此上の動きでもあるかと思ふたに、這の老賊と罵しつたまでのことで問答をやめてしまふた、これは桐峰を置き去りにしたやうなわけであるから、桐峰も甚だ手もち無沙汰ではあるが、結局五ひに弓を引きしぼつたばかりで切て放さないぐあひ、誠に手ぬるい機會である、着語に恁麼にし去るモウそれツきりか、二俱に不了、どちらもどちらだ、蒼天蒼天イヤハヤ悲しい始末よと歎く、遂に雪寶は之に裁判宣告を下して云く是は

則ち是なり兩人ともに立派な作家の衲僧には相違ない、けれども兩箇の惡賊兩人ともに相手を生捕にしよと云ふ惡辣の手段をめぐらしながら、只耳を掩ふて鈴を偷むことを解す、怕るゝ姿をして見せたり又は呵々大笑したりしたのは、皆相手の隙を窺ふの手段に過ぎぬであるのに、結局それが何の役にも立たずに休し去り放ちやるとは、何たる痴鈍な立合ぞと云ふ雪寶の點檢である、着語に言猶ほ耳に在り、彼の兩人の言ひやうが實に耳を掩ふて鈴を偷むやうであつたことは雪寶の聞いた通りに我も聞き覚えて居ると言ふ其れだから到頭他の雪寶の點檢に遭ふたのである、且く道へ當時作麼生か點檢を免れ得べき、これは學人に向つての一撈で、此時に彼の兩人が何うか働いてあつたならば斯のやうな雪寶の點檢を受けないことが出来たであつたらうか、其處を能く審細に參究して見るが好い、然し其處のところは天下の衲僧も到らざらん、中々誰でも雪寶のやうには點檢し得られまいとの稱讚である。

頌見之不取是千思之千里悔不好箇斑斑閑黎

爪牙未備待爪君不見猶較大丈夫見也無

落落聲光皆振地些子捋虎鬚忽然

收虎尾分捋虎鬚忽然

轉身吐氣喝打何

之を見て取らざれば、之を思ふこと千里、此の二句で此の公案を頌了つてある、古諺にも天の與ふる所を取らざれば却て天の禍ひを受けると云ふ、彼の僧が怖るゝ勢ひを作した時に、桐峰がスカササ咬み殺してしまへば好いに、呵々大笑で放過する、又老僧を争奈せんなど、言ふて居る時にガブリと咬みつくべきを却て休し去る、皆これ天の與ふる所を知らぬのである、已に取るべきものを取らぬのであるから、後に悔ひて臍を噛むとも及ぶべきでは無い、只々之を思ふこと千里、この目的を遠く離れてから何程思ふても何の効があらうぞ、着語に蹉過了也と言ひ、已に是れ千里萬里と言ふ、語意は皆能く解る、悔らくは當初を慎まざることをと言ひ蒼天蒼天と言ふも辯を待たぬであらう、好箇の斑々、爪牙未だ備はらず、桐峰も彼の僧も毛色を見れば確に立派な虎に相違ないけれども、惜いことには未だ爪も牙も備つて居らぬ、着語に鬪黎自領出去、これは圓悟が雪竇に向つて好箇の斑々と云ふのは、お前自分のことであらうとからかひ、争奈せん未だ用ることを解せざることを在りと言ひ、又只恐らくは用處不明ならんと言ふ皆爪牙に掛けて設ひ備はつて居ても用に立たぬと抑へ、況や未だ備はらぬので何とも致しかたが無い、いづれ爪牙の備はらんを待て、備に向つて道はん、モツと十分に機鋒が進んでからで無くしてはお話にならぬと抑へた、君見手や、とコレから百丈と黄檗との故事を引いて確かに爪牙の備はつた虎の咬み合ふ様子を示す、大雄山下に忽ち相逢ふ大雄山といふのは即ち大智懷海禪師の住せられた處で、一名を百丈山とも曰ふのである、或る時その百丈の弟子の黄檗希運禪師が餘處から歸つて來たのを見て、百丈が什麼處から來たと問ふた、黄檗は山下に鹿子を採ら來ると正直に答へる、百丈は更に逼て大蟲を見るや、山の中に虎が居りはしなかつた

かと問ふ、黄檗は直に虎の吼える聲をして自ら虎になつてしまふた、百丈すかさず持て居た斧を振りあげて研る勢ひをする、其の手の下をくゞつて黄檗は直に百丈を捕らへ、ピシヤリと手で一つ打ちなぐつた、其晩に百丈禪師は上堂して大衆に對し、大雄山下に一虎あり汝等諸人出入切に須く好く看るべし、老僧今日親く一口に遭ふと言ふて黄檗の機鋒を讚歎せられたことがある、それを今引いて來て本統に爪牙の備はつた虎であれば斯ういふ働きが無ければならぬものと云ふ證據にして、そして本期の欠點を明かに示されたのである、着語に條あれば條を攀ぢ條なければ例を攀づ、これは誠に好い例證ぞと賛成した、落々たる聲光皆地に振ふと百丈黄檗父子の機鋒、一言一句一舉一動、皆間に髪を容れざる様子を讚歎したのである、落々は字書に廣大の貌ともあつて、今は虎の吼る聲も其の眼の光も、實に恐ろしい勢ひであることを形容したのである、着語に這の大蟲、恁麼にし去る、黄檗といふ虎は前の本期の虎とは大に様子が違ふ、けれども猶ほ些子に較れり、本統に此の猛虎が荒れ出すことになれば中々斯んなことでは無い、幾箇の男兒か是れ丈夫、百丈黄檗の如き大丈夫は容易に得難いと前を承けて、且つ更に次の句を喚び出すのである、大丈夫見るや也た無や、眞箇大丈夫の漢であらうならば此の虎の働きが能く見えなければならぬはずであるぞと云ふのである、更に瀟山靈祐禪師と仰山慧寂禪師との父子の問答を引いて其の證據にしたのである、着語に老婆心切重ね〜いかにも御丁寧なことではある、若し眼を開けば同生同死せん、誰にもせよ眞實に宗眼が開けさへすれば、百丈とも黄檗とも手を携へて往くことが出来るぞと學人を警醒し、然し雪竇は能く筆まめに色々なことを書き立て、葛藤を打する人よと抑へる、虎尾を收め虎鬚を持つと、此れが

即ち、瀧山と仰山との問答を一句に纏めたのである、其れは或時瀧山が仰山に向つて、彼の黄檗の虎の話を
 お前は何う思ふかと問はれた、然るに仰山は和尚の尊意はと問ひ返した、仍ち瀧山は百丈當時一斧に黄檗
 の虎を斫り殺してしまふべきはすであるに、ナゼそれを稱讃して老僧親しく一口に遭ふなどと親の口から
 子供の手柄話などをしたものであらうぞと、これが瀧山の仰山に對する大慈大悲の勘檢である、其時に仰
 山はイヤそれはソウで御座らぬ、百丈は唯虎頭に騎るのみならず亦た虎尾を收むることを解す、これは始
 めもあれば終りもあると云ふ意味で、若し唯一斧に斫り殺してしまふたと云ふだけでは其話が完全になら
 ない、更に活かして働かせないので、殺活自在の機用と云ふものであると言ふのである、そこで瀧山が之
 を印可して寂子甚だ嶮崖の句ありと褒めたと言ふ話である、仰山の名が慧寂であるから寂子と云ふた、此
 の因縁も亦た彼の百丈黄檗の問答と同じく、始めもあれば終りもあり虎頭に騎て虎尾を收めたる機鋒を見
 るべきである、着語に忽然として突出せば如何が收めん、此の虎は何時何處へ出るか分らんが若し突然に
 此處へ出てきたならば諸人どうする、其の始末が直につくほどでさへあれば天下の衲僧を收めて這裡に在
 り、誰が出て来ても怖るゝ所は無、忽ち箇の出て来ることあらば便ち一撈を與へん若し收むること無く
 んば、偏に三十棒を放す、此の二つの着語は無くとも好からうと思ふ、偏をして身を轉じ氣を吐かしむ雪竇
 が是の如くに葛藤を打して老婆心切なるも、畢竟皆學人をして身を轉じ氣を吐かしめんとての慈悲の手段
 ぞ、然るに何をグズグズしてゐると聲を勵まして大喝一聲、まだ眼がさめぬか、打つて云く何ぞ這の老賊
 と道はざる、誠に齒がゆくて堪らぬぞと言ふたやうなアンバイ。

第八十六則 雲門有光明在

垂示 把定世界。不漏絲毫。截斷衆流。不存涓滴。開口便錯。
 擬議。即差。且道。作麼生。是透關底眼。試道看。

世界を把定しては絲毫をも漏さずと、作家の衲僧が宇宙萬象を掌中に握つたからには、一絲毫ばかりも放
 過して自由に働かせざるぞと言ふことは無い、サテ又衆流を截斷しては涓滴を存せずと、前は客觀上から
 言ひコレは主觀上の方から言ふので、宇宙間にあらゆる千差萬別の事物、謂ゆる一切諸法に對して、吾人
 の心が八萬四千の塵勞と種々様々に動きはたらく、それを悉く定止して無我無念離想絶觀の處に安住した
 時には、一粟だけの心念も起らぬ、此の立ち場に至りては固より言語道斷であるに依つて口を開けば便ち
 錯まる、即ち前々則に於て文殊菩薩が無言無說無示無識と言ふたのも、ハヤさう言ふただけ第二頭に落ち
 ると云ふたやうなもの、固より心行處滅であるに依つて、擬議すれば即ち差ふ、擬議といふは心の中に彼
 れか此れかと思ひめぐらすことである、少しでも其のやうなことであつたならば、ハヤ本地の風光を夢に
 も見ることが出来ぬ、且道作麼生か是れ透關底の眼、謂ゆる絲毫を漏さず涓滴を存せず、俗に謂ゆる
 風のほいる隙間も無い所の關門を、自由自在に透りぬけるほどの見識を具へたものであつたならば、都べ
 ての言語も動作も皆大光明を放つことになるのであるが、其處は何うしたものぞ試みに道へ看ん、何とか

其の立ち場に立つて一語を下して見ろと言ふて本則を提起する。

本則 舉雲門垂語云。人人盡有光明在桶黒漆。看時不見暗昏昏看時。作麼生是諸人光明山是山水是水。自代云。厨庫三門漆桶裏洗黒汁。

老婆心切 又云好事不如無自知較二半。
葛藤作汁麼 猶較真子

雲門大師が或時門下の大衆に對して垂語して云く人々盡く光明の在るあり實に人々各自本來具足してある所の大機大用は、佛に在つても増さず衆生に在つても減せず、元來不生のものであるから減すると云ふことも無く、元來無垢のものであるから淨まると云ふことも無い、況んや善惡だの邪正だの是非曲直だの迷悟苦樂だのと云ふやうなことに涉つたものではない、大小長短の形を離れ、黃青赤白の色をも離れたものである、然らば如何なるものであらうぞ、圓悟は黒漆桶であるといふ風外老人は光明に色々あるぞ、明るい光明も眞黒な光明も、長い光明も短かい光明も、四角な光明も丸い光明もある、一切習ひ覺えて居る知解分別を西の海へさらりと放擲して看よと言はれてある、雲門大師は更に語を繼いで看る時見えず暗昏昏と言はれた、此の光明は看やうとしては見えない、即ち垂示に謂ゆる擬議すれば則ち差ふのである、着語にも看る時は瞎すとある、心眼瞎し盡さんければ此の大光明は見えない、作麼生か是れ諸人の光明、自分の呼吸は自分の鼻孔から通じなければならぬのであるから、人々各自に實參實究して何とか言ふて見る

との一擲である、着語に山は是れ山、水は是れ水、諸人の光明と云ふたからとて、何も別に珍らしい者ではない、山は山のまゝに水は水のまゝに、鴉はカア／＼で雀はチュ／＼よ、漆桶裡に黒汁を洗ふ、黒漆桶と云ふことは無分曉といふ意味の俗語であるが、作麼生か是れ諸人の光明といふ一擲で、いとど分らないものが愈々分らなくなつたと云ふ、元來これは分るべきはすのもので無いからである、雲門大師平生二十二年間つねに此の垂語を以て門下參學の徒を勘檢せられたけれども、一人として大師の機に契ふたものが無い、仍て香林の遠といふ人が大師に向つて、何うぞ吾々に代つて、一語をお示しにあづかりたいと願ふた、そこで大師が自ら代つて云く厨庫三門、厨庫といふは臺所のこと、日本の寺々では庫裡と云ふて居る、三門といふことに就ては色々な説があるけれども、七堂伽藍とでも云ふやうな大建築の寺には、惣門だの中門だの樓門だのといふ門が幾つもある中で、第三の門と見て置いたら好からう、つまり人々各自朝な夕な見て居る所の厨庫や三門、それが諸人の光明よと言はれたのであるが、圓悟が之を咎めて老婆心切、あまりに落草に過ぎはせぬかと氣づかふアンバイ、葛藤を打して什麼をか作さん、恐らくは厨庫や三門に取りついて自由のきかぬ者が出來やうぞと誡める、そこで雲門も亦た更に機鋒を一轉して又曰く好事も無きに加かず、厨庫三門にせよ山河大地にせよ、其他如何なる向上の手段にせよ幽玄なる語句にせよ、都べて無きに如くは無いと一切剿絶し盡してしまはれた、着語に自ら一半を較るを知ると云ふは、雲門が前の厨庫三門と言ふたのが甚だ不十分であると云ふことに、自分から氣がついたに依つて、更に再び此の代語があつたのであると云ふ意味、猶ほ些子に較れり、再び代語して前語の痕跡を打ち消されたけれど

も、其れもヤハリ未だ十分ではないと、謂ゆる黒漆コクシツの崑崙コンロンを夜裡ヤリに走らしめてしまふた。

頌 自照列孤明森羅萬象爲君通一線何止一線十日並照

花謝樹無影打葛藤有什麼了期看時誰不見摸壁見不可總扶

不見兩頭俱坐倒騎牛兮入佛殿中三門合掌

會慶○半夜日頭
出日○午打三更

自照孤明を列すといふは、人々各々自己の光明が一切萬物を照して、寝ても起ても昧クラます所は無ないのであるが、それを己れと己れに知らずに居るから、雲門大師が厨庫だの三門だのと並べて見せられたのである、元來他人の力を假るもので無いから自照である、絶待であるから孤明である、着語に森羅萬象、イヤ厨庫三門のみでは無いぞ、山も河も木も草も、森羅萬象皆悉く日照孤明の光焰ならぬものは無い、賓主交參、森羅萬象相互ひに光と光とが融合する有様、鼻孔を裂轉す、それ其の光明が諸人の鼻の孔を突き透して居るに、それが見えぬかと云ふたアンバイ、瞎漢什麼をか作さん盲目共は何ともして見ようが無い、君が爲めに一線を通ず、其の盲目共に見せやうとて雲門が厨庫だの三門だのと一線の道を開いて見せられたのぞ、着語に何ぞ一線のみならんや十日並び照すやうに光り輝カやいて居ると揚げ、更にイヤ一線を放つことは即ち得たり、ヤツト僅に一線だけのことよ、到底大光明を十分に示すことの出来べきでは無いと抑へ

る、花謝して樹に影なしとは花は散つてしまふて何の色香イロカも無くなつた上に、日が暮れてしまふて其の樹の影も見えなくなつた、斯う言へばソレは光明の反對で、即ち暗黒といふことであらうと思ふものが多からうけれども、元來自照孤明の光は、世の謂ゆる明暗を超絶したものであるから、或時は明煌々と輝カやくこともあれば、又或時は昏昏々と照すこともある、着語に葛藤を打せば什麼の了期かあらん、モウ本則の頌は既に済んでしまふたに、さういつまでも色々なことを言ふては限りが無からうぞと、これは雪寶を抑へるやうに言ふて、其の文才の縦横なる所を稱揚するのである、麼の處に向てか摸索せん、已に花は謝し樹に影が無くなつてはドウそれを探りあてられやうぞ、其の眞暗さは黒漆桶に黒汁を盛つたやうである、看る時に誰か見ざらん、一體に明るい所だけ見えるものと思ふて居るのは凡夫の情量といふものである、眞暗な所が眞暗に見えるのもヤハリ見えるのでは無いか、明に遭ふては明に任せ暗に遭ふては暗に任せる、それが即ち明暗ともに見るといふものであるに、誰がソレを見えないと言ふのぞと云ふ、着語に、瞎、イヤ圓悟は見る用が無いから見ない、總に扶籬摸壁すべからず何も扶籬摸壁と此處彼處と探りまはるには及ばぬ、再瞎三瞎どこまでも圓悟は盲目三昧ぢや、これが即ち圓悟の見かたである、見不見、これは石頭大師が參同契に「明中に當りて暗あり暗相を以て遭ふこと勿れ、暗中に當りて明あり明相を以て覩ること勿れ」と言はれた如く、明暗を超脱すれば見と不見とに拘はるべきは無い、これは見不見に限つたことでは無い、知不知とも見るが好い、悟不悟とも見るが好い、成佛不成佛とも見るが好い、都べて兩々双々對待の處を超脱するのみならず、其の對待を超脱したと云ふ處にも落ちついては居らぬ、謂

ゆる生死にも住せず涅槃にも滞ふらない立場の話である、着語に兩頭俱に坐斷すといふも其事で、更に膳とある、愈々盲目三昧ぞと言ふ、然らば其の見不見の景況はドンなであるかと云ふに、倒まに牛に騎りて佛殿に入る、眞黒な牛の背中へ後向に騎つて眞暗な佛殿の中へ這入つて往く、雲門は厨庫三門と言ふたが、雪竇は更に其の厨庫も三門も没却して、更に斯う眞黒にしてしまふた、圓悟が之を擲擲して三門に中りて合掌す後向に牛に騎つて佛殿へ這入たならば、正面に三門を拜むやうになるであらうぞと言ひ、更に我に話頭を還へし來れ何うも雪竇は手緩い、サア其の公案を圓悟に渡せ、我ならば斯うであるぞと打て云く什麼の處に向つてか去る、其の牛に騎つた奴は何處へ往つた、其の行衛は知れまいと益々没蹤跡にしてしまふた、雪竇也た只鬼窟裡に向て活計を作す、雪竇が斯のやうな事を言ふのも、更に本分の地から見る時には、謂ゆる好事も無きに如かずで、畢竟鬼窟裡の活計に過ぎぬと抑へ、還て會すやと學人に一撈を與へ半夜日頭出で日午に三更を打す、夜半かと思へば曉天であり、眞晝中かと思へば午後十二時の時計が鳴る、實に明とも暗とも明暗融合とも何とも彼とも名のつけやうの無い有様、これが圓悟の見不見であるが、亦た是れ好事も無きに如かずかナ。

第八十七則 雲門藥病相治

垂示 明眼漢沒窠白。有時孤峯頂上草漫漫。有時鬧市裏

頭赤灑灑。忽若忿怒那吒。現三頭六臂。忽若日面月面。放
普攝慈光。於一塵現一切身。爲隨類人和泥合水。忽若撥
着向上竅佛眼也。覷不着。設使千聖出頭來也。須倒退三
千里。還有同得同證者麼。試舉看。

此の垂示も、相變らず作家の宗師が把住放行自由自在に働らく機合を示したので、明眼の漢には窠白なし窠白なしといふは引込んで隠れて居るやうな所が無いと云ふこと、又こゝと片寄つて居る所が無いと云ふことである、とかく學者は學理學説が窠白となり識者は其の識見が窠白となり、宗教家は其の宗義が窠白となり、何處かに片寄て自ら束縛して居るのが多い、それでは眞の明眼の漢とは言はれない、然るに今眞の明眼の漢は有時は孤峰頂上に草漫々、孤峰頂上は向上本分の地で、大智慧光明赫々たる自家立脚の處である、例へば釋尊の華嚴經のやうなもので、他人が聞いては聲の如く啞の如く、何とも手のつけやうが無い、然るに其の孤峰頂上其儘が直に草漫々、草漫々といふは大慈悲を以て衆生を濟度する姿、釋尊の阿含經の如く百萬の軍勢を叱咤する老將軍が愛孫の遊戯のお相手して居るやうなものである、さうかと思へば又今度は其の衆生濟度のために鬧市裡頭の煩惱海中に混じて説法布教の婆々談義をして居るから、近づき易く馴れ易いかといふに泥裡に棘あり笑中に刀ありと云ふやうなアンパイで、忽ち赤灑々に五體寸絲を繫

けず本分の風光を丸はだかにして大喝痛棒間に髪を容れず、天下人の舌頭を坐断せしむるの機鋒を全提することもある、更に其の様子を言ふて見れば忽ちに若し忿怒の那叱三頭六臂を現す、一體に佛法とさへ云へば慈悲忍辱の優しい顔ばかりして居るやうに思ふのであるが、勝鬘經に折伏と攝受との二門を開かれてある如く、其の折伏の場合に於ては刀仗を執持し乃至斬首するともあつて菩薩慈悲の方便が不動明王の姿を現するばかりでは無く、普門品には夜叉乾達婆阿修羅迦樓羅の身を現するともある、今此の那吒といふのも其の阿修羅の一類で、那吒を譯すれば禿頂となるそうであるが、頭が三つ腕が六本あつて、非常に怖ろしい形のものであると云ふ、さうかと思へば忽ち若し日月面普攝慈光を放つと此方は優しい姿、日面と云ひ月面と云ふは、皆菩薩の圓滿清淨なる面貌、一塵に於て一切身を現じ隨類人となりて和泥合水す、一塵といふは一微塵の義にも見るべく、又は一塵刹の義にも見られる、一塵刹ならば非常に廣大なる世界の事になり、一微塵ならば甚だ細小なる塵埃の事になるが、今は執れにしても一切身を現すといふのが主要で、彼の觀世音菩薩の三十二應身を現じて泥に和し水に合し、如何に醜陋なることをも厭はずに、只々衆生を悲愍護念することもある、さうかと思へば又忽ちに若し向上の竅を撥着すれば佛眼も覷不着、竅は穴といふ字で撥着は開くの意味であるから、若しも納僧本分の一門を開いて把住もせず、放行もせず彼の維摩居士の黙良久するが如き場合になつては、設ひ諸佛の五眼を以ても之を窺ふことは出来ぬ、千聖出で来るも也た須く倒退三千里なるべし、謂ゆる向上の一路は千聖不傳であつて、人々の呼吸は人々の鼻孔より通ずるものであるから、決して他人の窺測すべきことでは無い、還て同得同證の者ありや、其

の境界に到り得た人は即ち本則の雲門大師の如き人であるが、其れと同様の境界に到り得た者があるかなと言つて試みに擧す看よ。

本則 擧雲門示衆云。藥病相治。不可得。盡大地是藥。

那箇是自己。甜瓜微帶甜。那裏得這消息來。

雲門衆に示して云く、藥病相治す、佛の說法は應病與藥であると云ふことは、常に誰も言ふことで、其の典據は心地觀經にあつたと思ふけれども、此の事に就て委しく説いた言葉が圓覺經の集解にある、それは「人の病あるが如き必ず諸藥を服す、藥到りて病除く、藥も亦た捨つべし、或は人あり藥を以て能く病を治す、故に執じて捨てざれば、藥反つて病となる、豈疾病は醫し易く藥病は癒え難きを知らんや」とある、今此の本則の示衆もヤハリ其の意味で衆生に煩惱の病があるから佛法の藥を以て之を療治するのであるが、今度は其の佛法に取り着かれて居る病氣が中々重いに依つて、更に其の佛病祖病を療治する、そこで全く、病が無くなれば藥も要らぬ、藥も病も共に忘れてしまふた時には何うなる、雲門は盡大地是れ藥、即ち宇宙萬象皆只一相平等の藥になつたと言はれたが、其の實は盡大地これが藥とも病とも名くべきでは無いけれども、雲門は此次の那箇が是れ自己と云ふことを一撈しやうと云ふので、強て且らく盡大地是れ藥と言はれたまでのことである、要する所は那箇が是れ自己、一體に何が自己である何が我である、盡大地是れ藥と言ふべきならば又盡大地是れ病とも言はねばならぬ、昔し文殊菩薩が善財童子に命じて世界

中に有らゆる物の中から、決して薬にならないと云ふ品があつたならば探て来いと言はれた、乃ち善財は世界中を探して薬にならない品を尋ねたけれども遂に見當らない、これこそ毒にばかりなつて決して薬にはなるまいと思ふても、又何かの薬になると云ふわけで、到頭文殊の處へ歸つて決して薬にならないと云ふ品は有りませぬと復命した、文殊は更に然らば今度は是れは必ず薬であると定つたものを持つて来いと云ひつけた、其時に善財は或る一本の草を採つて文殊に渡した、文殊が其れを拈起して衆に示し、此薬は亦た能く人を殺し亦た能く人を活かすと云ふたと云ふことが、圓悟の評唱の中にも引いてあり、誰も常に言ふことであるが、これは誠に面白い話で、凡そ宇宙間のあらゆる物が事から、薬として見れば薬ならざるものなく、毒として見れば毒ならざるものは無い、畢竟、毒の薬の疾病の治療のと云ふて居るのは、皆悉く二見對待の妄想であるから、二見を離れ對待を絶し、尙ほ其の立ち場にも滞ふらずに、病來らば病に隨がつて之に處し、薬來らば薬に任せて之に應じ、任運自在に働らくことが出来てこそ、眞に盡大地是れ自己と云ふ時節にも遭ふのである、着語に一合相不可得己に是れ病も薬も共に無いとすれば、薬とも病とも二つに見るべきものが無いに依つて、一合相である、己に一合相であつて見れば之を病人とも健康者とも名くべきでは無い、佛だの衆生だの、迷だの悟だのと云ふも、皆二合相の妄想で、今は其のやうな名さへも亦た不可得ぞ、けれども苦瓠は根に連つて苦し唐辛は根も葉も花も實も皆辛いやうなもので、薬の時は盡大地是れ薬よ、一邊に擺向す薬も病も一つにして更に盡大地是れ薬と片付けたナ、甜瓜は蒂に徹して甜し猫は何處の猫もニャー〜と鳴くやうなもので、自己の時は盡大地是れ自己よ、自己の外に薬を求むるに

も及ばねば病を除くにも及ばぬ、那裡より這の消息を得來る盡大地是れ薬となりきつた時に、更に他の見るべきものは無いはずである、然るに今那箇か是れ自己と云ふやうな消息は何處から持つて御座つたと、雲門に向つたやうに言ふて學人への一拶である、實に此の公案一則が本統に信解だけでも出来れば、問法參禪の能事おもひ半に過るのである。

頌 盡大地是薬 教誰辨的○撒沙 古今何太錯 言中有響○一閉門不

造車 大小雪寶爲衆 錫力○禍出私門○坦蕩不掛 通途 自家廓 脚下便入草○上

來不妨 錯錯 雙劍倚空飛 ○鼻孔遼天亦穿却 云穿却了也

盡大地是れ薬と例の如く本則の要點を第一句に置いた、一體に何を呼んで盡大地と云ひ何を呼んで薬と云ふのであらうか、若し雲門の言葉につきまはつて居たならば千里萬里の蹉過となるであらう、着語に誰を以て的を辨せしめん已に是れ盡大地只薬の外に何もないのでは無いか、然るに誰に此の語の端的を辨じさせやうと云ふのぞ、他語を以て言へば盡大地是れ眼と云ふ時に何を見るのであるかと言ふのである沙を撒じ土を撒す畢竟雲門が斯のやうなことを言ふて人に眼つぶしを食せるのよと言ひ、更に高處に架し著せよ圓悟は其のやうな薬に用は無いから架の上へでもあげて置けと言ふ、古今何ぞ太だ錯る、第一に雲門が斯のやうなことを言ふたのが錯りの本で、其後此の公案に參する者は、概ね雲門の語下に死在して更に錯ま

る、これは一體に何うしたわけかと言ふ、着語に言中に響きあり、此の雪竇の何ぞ太だ錯まると云ふ一言は餘程注意して見ねばならば、一體に人は初めから十全健康なはずのもので、病だの薬だのと云ふ必要の無いわけのものである、然るに我は凡夫である迷の病人であるに依つて、修行の藥を服して悟りの全快を得ねばならぬと思ふたのが、抑も大間違ひの大本で、それを三世の諸佛だの歴代の祖師だのと云ふ人たちが、錯りに錯りを重ね來つたのであるぞよと、眞に本分の立ち場から古今何ぞ太だ錯ると言ふたのである、一筆に勾下す只此の一句で雲門は更なり、千佛萬祖のすべての言句をも皆打ち消してしまふた、圓悟は更に、咄と言ふて其の雪竇の斯う云ふたのをも咄散した、門を閉ぢて車を造らずコレは莊子やらにあるのを文選にもおせてある、門を閉ぢて車を造るも門を出づれば轍に合すと云ふ語を引くり返して使ふたのである、門を閉ぢて車を造る、即ち車を造る職人が一々道路の車轍に寸法を合せて造るのでは無い、家中で外を見ずに造つた車であるけれども、元來天下の車は撤を同じうすとあつて、其寸法に定規があるから其の寸法通りに造つた車は何時門外へ持ち出しても挽いても推してもチャンと道路の車轍に寸分も違はずに合ふものぞと云ふことである、それを今は學人の心の中で色々な道だの法だの信だの行だのと功を積み徳を累ね、其の修行の力に依て悟りを開くやうに思ふて居るのが抑も大間違ひの根本であるから、門を閉ぢて車を造らず、願も何も何にも力を費さぬと云ふのである、着語に大小の雪竇衆の爲めに力を竭す大層に骨を折つて御深切な婆々談義をしなさるナと冷かした、禍ひは私門より出づ、其のやうに説き過ぎては後悔することにならうぞと抑へる、坩蕩として一絲毫をも掛けず門を閉ぢて車を造らず、修行も悟りも

無いと云ふほど大平無事なことは無い、丸はだかて寢て居るやうなものよ、然るに阿誰が閑工夫ある餘計なこと心配して信解だの行證だのと騒ぐに及ばぬ、若しもソレを錯りて修行とか悟とか騒ぐ者があるならば、それは皆鬼窟裡に向て活計を作すと云ふものである、途に通ずれば自から寥廓、元來車に乗らうと云ふから車を造るのであり、車を造るから轍に合ふとか合はぬとか面倒も起るのである、三祖大師の言はれた通り、至道は無難、天下の大道は帝王も通れば庶人も通る、牛も通れば馬も通る、何の世話も入らぬものであるから自づから寥廓で何の妨げも無い、自由自在と言ふ、寥廓は廓然といふも同じことで、萬里片雲を絶したる姿である、着語に脚下便ち草に入る、雪竇の老婆談義ます／＼落草に過るぞと抑へる、馬に上て路を見る高い所から低い所を見ると云ふことで、通途寥廓の形容である、手に信せ拈じ來りて妨げず奇特なることを、これは雪竇の口に任せ筆に任せて自由自在に説き去る様子を讚歎と見える、然るに雪竇は錯々と一轉した、イヤ今まで車を造るとか造らないとか、寥廓だとか不寥廓だとか説き立てたのは、甚だ雪竇自分の錯誤であつたと自ら蹤跡を打ち消した、着語に双劍空に倚て、飛ぶヤア此の錯々と云へる双劍で都べて截斷し盡したる勢ひ、怖ろしい有様ぞ一箭に双鷗を落す、前の着語と同じ意味で、只其の截斷の愉快さを語を換えて言ふたまでである、サア斯うなつて來ては鼻孔達天も亦た穿却す、如何ほど識見が高く鼻が天を支へるほどの衲僧でも、皆其の鼻づらを突き透して一言も言はせぬぞと、謂ゆる孤峯頂上に單身獨坐してしまふた、着語に頭落ちぬ、イヤ鼻づらばかりでは無い、雲門は更なり千佛萬祖の頭も皆斬り落されてしまふた、打て云く穿却了也、これは圓悟が更に雪竇の鼻孔をも穿却したのである。

第八十八則 玄沙接物利生

垂示門庭施設。且恁麼破二作三。入理深談也。須是七穿八穴。當機敲點。擊碎金鎖玄關。據令而行。直得掃蹤滅跡。且道請訛在什麼處。具頂門眼者。請試舉看。

門庭の施設といふは、人に師たる善知識が、其の門下の學人を接化するに就ての用意方便といふこと、それが且く恁麼に二を破して三と作す、此の二を破して三と作すと云ふことに就て古人に色々の説もあるが、要する所は定則なく自由自在に働くと云ふ意味で、方を轉じて圓と作すとも見るべく有を破つて無と作すとも見るが好い、乃至微塵を破つて大經卷を出だすこともあれば、須彌山を芥子の中に納れることもあるであらう、入理の深談也た須く是れ七穿八穴なるべし、道理の敲底を探つて其深意を談論するに至りても七穿八穴と自由自在でなければならぬ、七穿八穴といふことも當時の俗語で之を日本の俗語で言へば煮て食はうとも焼いて食はうともと云ふたやうな事と見える、サテ又當機敲點とある、機の字は例の機鋒とか玄機とかいふ時とは少し違ふて、機根の機ノの字で、今は學人のことである、即ち門下の學人を接するに當りては、敲と問ひ點と答へる、其の働きは金鎖玄關を擊碎す金鎖は黄金の枷鎖といふこと、凡そ鐵鎖で繋がれ

て居る者は、動物園の虎か熊でなければ狂躁性の精神病者、または重罪犯の囚徒であるが、昔々お互ひが八萬四千の煩惱のために束縛されて、自由の利かない有様は、殆んど彼の鐵鎖に繋がれて居るものと同様である、然るに其の鐵鎖の煩惱妄想は修行の力を以て解脱することが出来易いけれども、更に其の修行の力を憑み、佛法祖道に取りついて居る病、即ち前則の謂ゆる藥が反つて病となつたのは中々容易に解脱することが出来ない、それを今は金鎖と謂ふたのである、眞に佛法を修行する者の尤も注意せんければならぬ所ぞ、又玄關といふことも其れと同じ意味で、昔も今も軍事上には關門が必要で、容易に人を通行させぬのであるが、其の軍事上の關所は、大砲小銃の力を以ても打ち破ることは出来やうが、幽玄高尚なる悟りの見識に白から縛られて、それより先へ進むことも退くことも出来ないのを即ち玄關と謂ふ、玄は黒いと云ふ字で、物の文彩アヤの分らぬ意味であるのが、一轉して宇宙の眞理實相が不可思議であると云ふことに使はれ、老子が頻りに此の字を用ひて玄之又玄衆妙之門など言ふた所から、佛教でも此字を以て最高の道理を言ひ詮はすやうになつたのである、乃で昔し誰か禪宗の坊さんが此の玄關と云ふ二字を額に書いて寺の入口へ懸けて置いた、サア此處は容易に通さぬぞと云ふ意味を示したのである、それを其寺へ出入する人たちが、彼の玄關といふ額の懸けてある處と云ふ意味から、遂に寺の入口のことを玄關と云ふのを、後には在家の表口までも玄關と通稱することになつたものと見える、偕其の悟りの藥も悟りの關所も擊碎して、百尺竿頭更に一步を進めさせ、令に據て行す自分の立ち場から一切諸法を悉く喝散して直に得たの蹤を掃ひ跡を滅する事を、謂ゆる千佛萬祖も親ふことの出来ぬ處に到らせる、且く道へ訛請什麼の處に

か。在。と。學。人。に。一。撈。を。下。し。て。前。に。擧。げ。た。や。う。な。宗。師。の。作。略。の。尤。も。緊。要。な。る。點。は。何。處。に。在。る。ぞ。と。言。ひ。、
頂。門。の。眼。を。具。す。る。者。は。請。ふ。試。み。に。擧。す。看。よ。と。本。則。を。提。起。す。る。

本則 擧玄沙示衆云。諸方老宿。盡道接物利生。隨分開箇鋪席

忽遇三種病人來作麼生接。打草只要蛇驚。山僧直得目。管取倒退三千里。患盲者拈

鍵豎拂他又不見。利生的瞎。未必要盲。患聾者語言三昧他又不

聞。端的聾。是那箇未聞在。患啞者教伊說又說不得。物的啞。未必要啞。

且作麼生接。若接此人不得佛法無靈驗。僧拱手歸降。未是那箇。

僧請益雲門。云汝禮拜着。僧禮拜起。已接了也。僧禮拜着。僧禮拜起。

雲門以拄杖揜僧退後。門云汝不是患盲。僧禮拜起。道僧也。折拄杖子也。

復喚近前來。僧近前。門云汝不是患聾。僧禮拜起。復喚近前來。僧近前。

門乃云還會麼。僧云不會。門云汝不是患啞。僧於此有省。莫道這僧。好莫道這僧。好莫道這僧。好莫道這僧。

玄沙案に示して云く、玄沙と云ふは福州玄沙山の宗一大師のことと諱を師備と曰はれ、雪峯義存禪師の法嗣である、或時、大衆に示して云はれるには誰方の老宿盡く道ふ物を接し生を利すと、コ、で物と云ひ生と云ふは皆參禪學道の人のことである、着語に分、隨、箇、鋪、席、を、開、く、諸、方、の、知、識、た、ち、が、ソ、レ、ノ、相、應、な見世を開いて佛法禪道の商賣をして居る、それが皆家の豊儉に隨て、峻峻孤危な機鋒の接化もあれば和混合水繞路落紳の提撕もある、忽ち三種の病人の來るに遇はば作麼生か接せん、三種の病人と云ふは次に列擧する所の盲と聾と啞との三病を兼ねた者のことである、着語に草を打つは只她を驚かさんことを要す、此の諸方老宿云々と玄沙が言ふ聲を聞いたならば、其の諸方の知識だちも自ら警醒開發されることであらう山僧は直に得たり目眩し口呿するを、イヤ斯やうな問題に出あふては圓悟も閉口ぢや、倒退三千里なることを管取せよ、斯やうな場合には後退りするのが一番に得策よと、これが即ち圓悟が三種病人を接するの手段を暗に洩らしたのであると見える、患盲の者は拈鍵豎拂も他又見え、鍵のことは前にもあつたが禪林に於て大衆に何か報告することなどのある時に打ち鳴らす所のもので、八角に削つた短い柱を下に置き、更に小さい八角の杵の柄の無いやうなものを以て之を打つ、其の杵のやうなものゝことを鍵といふのである、或る場合に於ては師家が其の鍵を振りあげて見せるやうなことをすることもあるソレが即ち拈鍵である、又拂は拂子で本名は麈尾である、或る場合に於ては師家が其の拂子を立て、見せるやうなことをすることもある、それが即ち豎拂である、學人の目が見えれば其の拈鍵や豎拂を見て悟ることもあるであらうが、患盲即ち盲目であつては致しかたがあるまい、着語に端的瞎とある、其の一微塵ばかりも眼に

遮ざるもの、無い所が直に本分の立ち場である、それでこそ大は絶対無限の本体をも、細は顕微鏡の及ばざる所までも歴々分明に見透すことが出来るであらう、是れ則ち接物利生、其の何も見ない所に到らせるのが即ち衆生済度よ、然るに未だ盲せざるに在り、とかくに何かが見えて困るのちやと言ふ、患聾の者は語言三昧も他又聞かず、前に言ふたやうな盲目であつても、耳さへ聞ゆれば佛祖の言教を聞くは申すまでも無く、香嚴禪師の如く筈の先にかゝつて飛んだ瓦片が竹藪の竹へカチリと當つた聲が聞えて悟つたものであるが、盲目の上に患聾ときては、如何に臨済の一喝でも何の感じもあるまい、それは何うして接するぞと云ふのである、着語に端的聾それは本統の聾であらう、本統の聾ならば一切の音聲が耳に住まらぬに依つて、一切の音聲を自由に聞くことが出来る、それが取りも直さず眞箇の觀世音菩薩である是れ則ち接物利生其の何も聞かない所に到らせるのが眞實の衆生済度よ、未だ必ずしも聾せざるに在り是れ那箇か未だ聞かざること、在り、本統に徹底聾ならば好いが、折々何か聞えはせぬか、偕已に是れ盲であり又聾である上に更に患聾の者は伊をして又説しむること得ず、設ひ如何なる方便をめぐらして悟らせて見ても、其の知見を言句に言ひあらはさせて勘檢することも出来ねば印可することも出来まい、着語に端的聾それが本統の無言無説無示無識にして、諸の問答を離れた所、イヤ維摩居士の一點も此處であるぞ、是れ則ち接物利生これこそ衆生済度の効もあると云ふものよ、然るに或は未だ必しも聾ならざるに在り是れ那箇の未だ説かざると在り、稍もすれば左や右と言説を弄したがるので困る、且く作麼生か接せん若し此人を接すること得ずんば佛法に靈驗なからんと盲聾兼帶の畸形兒を見せものに出しての玄沙の拶問であるが、そ

れであるから永嘉大師は機關木人を喚取して問へとも言ひ、洞山大師は木人まさに歌ひ石女たつて舞ふとも言はれたのである、木造の人形や石像の女は是れ盲か是れ聾か、一體に佛法を眼から入つたり耳から入つたり口から出したりするものと思ふて居るから、斯のやうに擲掬れるのである、ナニ此人を接し得なければ佛法に靈驗が無いと云ふか、何時誰が佛法に靈驗を求めると言ふたぞ、眞に靈驗が無いならばソレで大安心である、火が物を焼くのが何の靈驗である、水が物を濡らすのが何の靈驗である、元來其の様なものあるべきでは無い、そこで圓悟は此の無靈驗と云ふ下へ誠なるかな是の言やと賛成を表した、愈々さうなりさへすれば山僧も手を拱して歸降せん決して何の異議も申し立てまい、コレでこそ已に接し了れり本統の衆生済度が出来あがつたと言ふものちやと言ひつゝ、便ち打つと上來玄沙の示衆を一撃に剿絶してしまふた、然るに其後一人の僧が此の玄沙の語を以て雲門に請益す請益と云ふは論語に益を請ふとあるときにも、已に幾分かある上に更に増してもらふ意味であるが、今は其れを學問研究の上に應用したので、已に幾分かは參究してある上に、更に先輩の指導を受けることを禪宗では請益と謂ふのである、着語に也た諸方の共に知らんことを要す元來玄沙が諸方の知識に對して此の垂示があつたのであるから、雲門に限らず諸方の知識たちに博く知らせて置くが好い、着しかも雲門の處へ持つて往つたのは大當りちやと擲掬する、雲門云く汝禮拜着、雲門大師突如其の僧に向つて禮拜しろと命ぜられた、着語に風行けば草偃す、雲門の命令に背くものはあるまい、咄けれども他人の命にばかり従ふて居ると云ふは何事ぞと咄却した、僧禮拜して起つ、此の僧まことに正直從順である、着語に這の僧は拄杖子を拗折せり己れの本分を失

ふて他人の命令に唯々諸々して居る、雲門拄杖を以て搥く、僧が禮拜了つて起つた所をいきなり拄杖で撞かうとした僧退後す。僧はヒラリと身を退いて後へさがつた門云く汝は患盲にあらずハ、ア貴公は拄杖で撞かれそうであると云ふのが見える様子である、それでは盲目で無い、玄沙が盲目にしてしまふたのを雲門が口を開けると見える、着語に端的、瞎これは本統の盲目らしい、イヤ這僧と患盲と道ふこと莫くんば好し能く何か見える様子であるぞ、到底見不見の間に於て商量すべきことでは無い、雲門は更に復た近前來と喚ぶ、モツと近く寄れと云ふ、僧また正直に近前して雲門の傍へ往つた、着語に第二杓の惡水、前の拄杖で搥いたも惡辣の手段であるが、此の近前來は更に火に油をそそぎかけたやうなものである、觀音來也近前せよと言へば近前する、其耳の能く聞えることは耳根圓通の觀音が一切の音聲を觀すると云ふのと同じ様であるぞと冷かす、當時好し一喝を興ふるに此時に此の僧が直に雲門に向つて一大喝を興へてあつたならば、雲門の伏案を打ち破ることが出来たものをと齒がゆがる、門云汝は患盲にあらず近前せよと言へば近前するからには患盲では無いさうな、と亦た耳を開かせた、着語に端的、患盲イヤ此れが本統の患盲、這の僧を患盲と道ふこと莫くんば好し、能く何か聞える様子である、到底聞不聞の間に於て商量すべきことでは無い門乃ち云く還て會すや何うちや合點がいつたか、着語に何ぞ本分の草料を興へざる、餘りに雲門は落草に過ぎると抑へる、當時好し聲を作すと莫きに、此れは次の句にかゝるので、此僧が黙して居ればよいがと言ふたアンバイ、然るに僧云く不會イヤ頓と合點がゆきませんと聲を出した、着語に兩重の公案、不會と言はんでも不會なことは分つて居るに、又不會と言ふ、重ね／＼に丁寧な不會である蒼天蒼

天まことに氣の毒な次第であると悔みを言ふ、門云く汝は患盲にあらず會すやと問へば不會と答へるのを見れば、貴公は啞で無いな、玄沙が啞にしたのを雲門が口を利かせた、着語に端的、啞ソレが本統の啞よ、口吧々地中能く饒舌るよ、這の僧を患啞と道ふこと莫くんば好し、結局これは説不説の間に於て商量すべきことでは無い、僧此に於て省あり此の僧サガ多年工夫し來つた効があつて、此で見不聞不説不説の眞意義が稍や合點いつた様子である、省は省悟で未だ大悟徹底とまでは往かないでも、大に警發する所のあるアンバイ、圓悟は賊過後の張弓、今さら遅いぞ、食事は疾うに濟んでしまふたに什麼の碗をか討ねんと抑へた、此の公案の提唱に於て、風外老師は面白い話をして置かれた、老師の師匠の玄機禪師がまだ行脚して歩いてゐた頃、或る知識が禪師に言はれるには、並大抵の者は何うなりともして濟度することが出来るけれども、若し發狂人が出てきたならば尊禪は之れを何うして接化するぞと言ひながら、ハヤ其の知識が全く發狂人のやうになつて見せた、其の時に玄機禪師はスカさずに何時までも其うやつて御座れとやつてのけた、これにはサスの知識どのも困つたであらうと云ふ話である、サアお互ひに此で一つ働いて見なければならぬが、何うしたものであらうぞ。

頌 盲聾瘖啞 杏絶機宜 天上

天下 堪笑堪悲 離婁不辨正色

師曠豈識玄絲 爭如獨坐虛窓下

計上○一時葉落花開自有時即今日也從朝至暮明日也從朝至暮復云還會也無孔鐵鎚

盲聾瘖啞、これ實に不可思議不可説の境界、實相無相微妙法門の體である、或時は法性眞如とも名けられ、或ひは涅槃妙心とも稱し、時として久遠實成の釋迦牟尼佛とも曰ひ、時として清淨法身の阿彌陀佛とも曰ふ、皆この眞盲眞聾眞啞の異名である、雪竇先づ其の尊號をこゝに掲げ出して、諸人に禮拜させる、着語に已に言前に在り、言はずとも知れたことよ、三、窻俱に明かなり、眼も耳も口も本來明了なものである、それを雪竇が盲聾瘖啞など、言ひ出したのに欺むかれまいぞ、と語下に死在せしめぬ手段、元來眼耳は眼耳で口舌は口舌であるものを、雪竇は盲聾瘖啞と一つに丸めてしまふた、恠しいことぞと益々疑團を起させて工夫を扶ける、杳として機宜を絶す、未だ發せざるを機と謂ひ發して能く理に合ふを宜と謂ふとも云ふから、都べて思量分別を超過し、言語伎倆に涉らぬ姿を機宜を絶すと言ふたのである、着語に什麼の處に向つてか摸索せん杳として機宜を絶すとあるからには、何として探して見やうも無い、還て計較を做し得てんや何うしたならば其の盲聾瘖啞の様子を探ることが出来やうぞ、什麼の交渉かあらんかと手の着けやうが無い、此の後の二つの着語は前の向什麼處摸索の注釋に過ぎぬから無くとも好いと思ふ、天上天下、笑ふに堪えたり悲しむに堪えたり、人々各自眞の盲聾瘖啞ならざる者は無く本來不可思議不可説の境界であるにも拘はらず、それを眼も見えれば耳も聞える口も利けるやうに思ふて居るのがアラ笑止や、實

に笑ふべきである、又人々各自に其の境界でありながらソレを目から知らずに居るとは悲しむべきでは無いか、着語に正理自由雪竇の言ふ所は實に正理であつて、其の言ひやうも亦た自由なものぢやと褒め、天上天下誰も皆同じことであるから、我も亦た恠麼、汝も亦た恠麼、眞盲眞聾眞啞ならぬ者は無い、箇の什麼をか笑ひ箇の什麼をか悲しむ何も笑ふことも無ければ悲しむことも無いでは無いか、それを笑つたり悲しんだりしては、半明半暗で又二邊に落ちやうぞと雪竇に當るやうにして學人への注意である、それに就いて思ひ出したことがあると云ふので、離婁も正色を辨ぜず、離朱は黃帝の時の人であるとも云ひ、離婁は孟子の門人であるとも云ふ、此兩人を同じ人のやうにも云ひ全く別人のやうにも云ふ、いづれにしても非常に眼力の強い人で、毫末を百歩の外に察ると云ふ評判の人である、世間の肉眼は其れ程の人であつても、眞盲の境たる本地の風光を見ることが出来まい、實は元來見るべきもので無いからである、着語に瞎漢それは誠に立派な盲人ぢや巧匠は蹤を留めず上手な大工の削つた柱には手斧や鑿の痕は見えないやうに、青黄とか赤白とか其色を留めないのが、眞の見かたである、それが即ち其端向瞎眞の盲目と謂ふものである、師曠豈玄絲を識らんや、師曠は周の世の人で晋の平公の時の樂太師、即ち音樂を掌どる官人である、音律を善くし鬼神を致すとあつて、非常に耳の力の強い人で、山を隔て、蟻の鬪ふ音を聞きわけたと云ひ、琴を鳴らして軍の勝敗を占考ふたと云ふやうな説もある、それほどの耳であつても、五音六律の外に超絶したる眞如法性の妙音をば聞くことが出来ぬ、それは眞聾の人に始めて始めて聞き得るのである、着語に聾漢本統に玄絲が聞えぬならば其れは立派な聾である、大功は賞を立てず本統に聞く耳は音聲の外

にある、其れが即ち端的、聾で眞聾と謂ふものぞ、争でか如かん虚窓の下に獨坐して一體に見やうとしたり聞かうとしたりするから眞盲眞聾の境界に達せられぬのである、それよりは虚窓の下に獨坐して何を見やうでも無く何を聞かうでも無い、眞に太平無事の人となり了る、此時天地日月山川草木有情非情同時に此の虚窓の下の風光となつて来る、着語に須く是れ、恁麼にして始めて得べし、其の太平無事の處に往かなくては到底本統の話にはならぬと賛成し、然し小人閑居して不善を作すと云ふこともあるが、虚窓の下に獨坐して居て鬼窟裡に向つて活計を作すこと、莫れ却つて思量分別に涉つてはならぬぞと太平無事の境に安住する者を叱る、時に漆桶を打破す雪竇が只此一句を以て従上の諸語を一時に打破したのである、其れを誤り會してはならぬぞとの警誡である、サテ其の虚窓下の風景如何と云ふに葉落ち花開く自から時あり秋になれば千林紅葉を飛ばし、春になれば百花爛熳として無始劫以來其時を違つたことは無い、これに何の思量分別のさしはさみやうがあらうぞ、之を即ち本地の風光とも本來の面目とも謂ふのである、着語に即今什麼の時節吾人の朝な夕な寝たり起きたり食たり衣たりコレは一體に何の時節であるや、春か秋か將た過去か未來か、切に無事の會を作すことを得ざれば日々夜々の行事に無功用の大道を履踐する、決して小人閑居の類では無いぞ、一體に虚窓の下に獨坐すると云ふ語下に附きまはるから誤るのである、農夫ならば田圃の間に奔走すと云ふべく、商賈ならば牙籌の下に運爲すと見るべきである、乃ち今日も也た朝より暮に至り明日も也た朝より暮に至る、其の日々夜々の行事其儘に蓋天盖地になるのである、復た云くと云ふは記者の詞で、還て會すや也た無や雪竇いかにも慈悲深重の至りである、萬一にも無事甲裡に死在しはせぬかと

心配せられて、更に語氣を一轉して何うちや合點がいつたかと言ふ、圓悟は重説偈言モウ十分であると言ふ、重説偈言といふとは、多くの經文に大抵あるので、佛が最初に道理や訓誡を説かれた後に、更に重ねて此議を宣べんと欲して而も偈を説いて曰くとあつて、それから前に説かれた道理もしくは訓誡、または譬喩等を更に四言又は五七言などの詩を以て再説せられることである、無孔の鐵鎚、モハヤ雪竇の言説も此に至りて理盡き詞究まつたに依つて、諸人面前へ一個の無孔の鐵鎚を擲け出された、孔があれば柄をつけて薪でも破るのであるが、孔がなくては手のつけやうが無い、これが即ち眞盲眞聾を兼ねたる不見不聞不説如來の御尊像と拜みたまつるべきものと見える、圓悟は自領出去其のやうな物に用は無、雪竇自分で持つて往くが好いと云ふ惜しむべし、放過することを、何うも雪竇は才に任せて説き過ぎる悪い癖ぞと抑へ、便ち打つと圓悟自家の特色を出たして剿絶してしまふた。

第八十九則 雲巖問道吾手眼

垂示 通身是眼見不到。通身是耳聞不及。通身是口說不着。通身是心鑒不出。通身即且止。忽若無眼作麼生見。無耳作麼生聞。無口作麼生說。無心作麼生鑒。若向箇裏撥

轉得^レ一線道^ヲ便與^ニ古佛同參^ス。參則^ハ且止^ス。且道參^ニ箇什麼人^ニ。

此の垂示と前の垂示とが互ひに入り替つたので、これが即ち前則の垂示であると云ふ説もある、或はさうかも知れぬが、一體に前則と此則とは相聯絡したやうな所の意味があるのであるから、どちらでも好からうと思ふ、通身^ニ是れ眼^ニにして見る^{こと}に到^らず、通身^ニは俗^ニに謂^ふ身軀^ニ、すなはち天窓^ノのギリ／＼から足の爪先まで、どこも彼處^も皆眼^睛であるとするれば、常に謂^ふ所の眉下に、双々横に切れて居る眼ばかりに於て、見るとか見ぬとか云ふ話とは全く程度が違ふのであるから、即ち見不到である、通身^ニ是れ眼^ニにして聞く^{こと}に及ばず、これも前と同じ意味で兩頬に傍^りて居る耳ばかりを耳として、其の耳の鼓膜に響くものばかりを聲として居るのは大に違ふて、身軀^ニが耳であるとした時には、世の謂ゆる聞くの聞かぬのと云ふ話をば超絶したのであるから聞不及である、通身^ニ是れ口^ニにして説^き着^せず凡そ説法とか演説とか云へば口舌のみのことのやうに思ふて居るのは、全く凡夫の情量に過ぎぬのである、能く身に於て説く之を身業説法と謂^ふ、只其人の容貌風采を見たばかりであつて、ハヤ十數年の講話を聞いたにも勝るほどの感化を受けることがある、又は其の容貌風采には感化を受けなくても何となく其人にあこがれて極めて親しき薫陶^ヲを受けることもある、それを意業説法と謂^ふ、これは唯お互ひ人類の間ばかりでは無い、天地自然の景象に於ても其の通りであるとすれば、通身^ニは口のみでは無い法界^ニも謂^ふべきである、前の眼と云ひ耳と云ふも準じて知るが好い、通身^ニ是れ心^ニにして鑒^み出^さず、通常に心と云へば、五官が五境に觸れて

感覺を起す、それを意根すなはち腦裡に攝合して思量分別を生ずる、之を六識と云ひ更に進んで七識だの八識だのと云ふ説もあるけれども、今は其の六根六識に拘はらず、身軀^ニが心であるとすれば鑒不出で、鑒は照鑒または鑒察の鑒の字で、それは憎いとかコレは可愛いとか乃至五欲七情喜怒哀樂の發動である、今はソレ以外の心の働きであるから鑒不出ぢや、要する所は不見の見と不聞の聞と不説の説と不思議の思量とを提起したのである、そこで更に一轉して通身^ニは即ち且^止くと前を掃ふた、とかく通身と云へばハヤ其の通身と云ふ言葉を逐ひ廻るのが凡情の通癖であるから、先づソレを打ち掃ふて置いて、忽ち若し眼なくんば作麼生か見ん耳なくんば作麼生か聞かん口なくんば什麼生か説かん心なくんば什麼生か鑒せん、即ち見聞覺知思量分別を離れてドウ生活したものであらうぞ、若し箇裡に向て一線道を撥轉し得ば便ち古佛と同參たらん、コ、が誠に肝要な所である、謂ゆる百尺竿頭更に一步を進めねばならぬ所である、然るに輒もすれば彼の六根を閉塞して、見聞覺知を超絶した處にばかり腰を据えたがるに依つて、佛法は消極的であるとか厭世主義であるとか、枯木死灰の境に眠るのであるとか妄評されるのである、乃ち箇裡に向つて一線道を撥轉し、百尺竿頭更に一步を進めると云ふは、猛然として退身三步、五濁惡世の家郷に立ち還りて、五欲六塵の間に活潑々地の働きを爲さねばならぬのである、ソウあつてこそ古佛と同參し得て、釋迦も彌陀も好伴となるのである、見よ古佛の彌陀は五劫の思惟に非載永劫の修行をしたと云ひ、釋迦は娑婆往來八千返と云ふ、枯木死灰裡に安眠して居たことは片時も無かつた、圓悟は更に又一轉して參は則ち且^止くと、古佛はとにかく現に今日く道へ箇の什麼人にか參せん、誰を手近き手本にしたもの

であらうぞと本則を引き出した。

本則 舉雲巖問道吾大悲菩薩用許多手眼作什麼當時好

草料○備尋常走上走下 吾云。如人夜半背手摸枕头何不用本分草料

作什麼○團黎問作什麼 巖云我會也將錯就錯○未免傷鋒犯手 吾云。汝作麼生會何勞更問○

好與巖云○ 遍身是手眼有什麼交涉○鬼窟裏 吾云。道即太煞道只一抄○

道得八成同坑無異○土○奴兒 巖云。師兄作麼生取人處分○爭得 吾云。

通身是手眼頭○不出斗○換却○備眼○移却○舌

雲巖、道吾に問ふ、雲巖のことは前の第七十二則の處にあつた通り、始め百丈に參じて後に法を藥山惟儼禪師に嗣ぎ、其門下に洞山大師を出だして曹洞一宗の義祖となられた人である、道吾と云ふは潭州道吾山の圓智禪師と申して、雲巖と同じく藥山の法嗣である、一體此の公案に就いては、問ふた人と問はれた人と顛倒して居るので、其實は道吾が雲巖に問ふたのであると云ふことであるが、今はソウ云ふ史的研究に必要はないから、本集に載せられてあるまゝで好いのである、大悲菩薩許多の手眼を用ひて什麼をか作す、大悲菩薩と云ふは觀世音のこと、觀世音菩薩には色々なる姿がある、其中に今は謂ゆる千手觀音の

ことである、千手ばかりでは無くて千眼あると云ふので、千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經と云ふ經文がある、其中の陀羅尼だけは禪宗の人が朝な夕なに讀んで居る、例のナムカラタンノ、トラヤヤー、ナムオリヤ、ポロキチー、シフラヤー、フチサトボヤー、モコサトボヤーなど、讀むのがそれである、又此の千手千眼のことを知らうと思ふたら、楞嚴經の卷六も見るが宜しい、即ち此の觀世音菩薩は、其の通りに手が千本あつて眼も千個あると云ふが、それは何の用に立つのであるかと云ふのが此の問の語意である、着語に當時好し本分の草料を興ふるに、圓悟であつたならば此時にドシンと打つてやるのであるに、備尋常走上走下什麼をか作す、吾人各自朝な夕な寝たり起たりして居るのはドウしたものぞ、其れが即ち千手千眼の作用であると云ふことが分らないかと云ふアンバイ、團黎問ふて什麼をか作す、一體に貴公其のやうなことを人に問ふて何うするのぢや私の眼が何處について居るか他人に問ふやうなものぞと抑へる、吾云く人の夜半に背手にして枕子を摸るが如し其れは恰かも夜半に黒闇の處で而も背手で枕を摸るとき、決して摸りそこなひの無いやうなものよと、誠に老婆心切なる答である、團語は例の如く何ぞ本分の草料を用ひざる、打ちなぐつてやれば好いにと云ふ、一盲衆首を引く、このやうな婆々談義をするから多くの人を誤るので叱る、巖云く我れ會せりハ、ア其れで合點がゆきました、着語に將錯就錯、婆々談義を聞いて合點が往つたなどと云ふソレが即ち錯を將て錯に就くと云ふものぞ、元來會だの不會だのと云ふことのあるべきでは無いに、一船の人を賺殺す、乗り合ひ一同の迷惑になる、同坑に異士なし、雲巖も道吾も同じ藥山の弟子であるから全く同じ考である、けれども未だ免かれず鋒を傷り手を犯

すことを斯う道理を説き過ぎては十分の眞際に疵がつくぞと抑へる、吾云く汝作麼生か會す、何う合點したと追ひかけて撻着する、圓悟は何ぞ更に問ふを勞せん、何も問ひ返すほどの價値はあるまい、けれども也だ問過せんことを要す、或ひは其の必用があるかも知れぬ、好し一撻を與へて能く勘査するが好からうと揚げたり下げたりする、巖云く徧身是れ千眼身軀體が手であり眼であると言ふ、圓悟は何處までも抑へ什麼の交渉があらんと云ひ鬼窟裡に活計を作すと云ひ、泥裏に上塊を洗ふ甚だ活機が無くて面白くないと罵しる、吾云く道ふことは即ち太無道ふ只八成を道ひ得たり道理は聞えてあるけれども何うも未だ十分とは言へない、着語に同坑に異土なし、幾度言ふても同じことよ、奴は婢を見て慇懃權助がお三にお世辭を言ふやうなもの、又癩兒伴を牽く畸形兒の道づれのやうで、雲巖に道吾まことに能く同道唱和が出来、巖云く師兄作麼生この師兄といふことは禪宗では法の兄弟に皆師の字をつけて法兄を師兄と云ひ、法弟を師弟と云ひ、又弟子が師匠に對して自分のことを小師と云ふ、世間に言はぬことであるから序に申して置く、雲巖は道吾よりも年長であつたから、道吾が雲巖のことを師兄と云ひ、雲巖は道吾のことを師弟と云ふたのであつたさうであるが、此の公案は最初から雲巖と道吾を取り違へてあるから、雲巖が道吾のことを師兄と呼んだやうになつて居る、一體に此の碧巖集といふものはソウ云ふやうな歴史のことや、又は普通の教理に係つたことなどは、最初から眼中に置いて居ないのであるから、これには限らず往々其の邊の誤りはあるらしい、それを華嚴宗の鳳潭師などは附け込み所であると云ふやうなアンバイで、頻りに鐵壁雲片で攻撃する、其のお蔭で其の邊の校正をしてもらふたのも亦た有り難いわけではある、着語に

人の處分を取らば争てか得ん師兄の意見を問ふて己れの悟りにするわけには往くまい、けれども師兄が我に向つて只八成であるなどと言ふからには也た好し一撻を與ふるに黙つても居れまい、吾云く通身是れ手眼。これは徧身と云ふたのを通身と言ひ換えただけのことであるが、強て注釋を下して徧身と云へば皮膚上の事になり、通身と云へば骨髓までも含むなどと言ふ説もあるが、それは皆言句に滯ふると云ふもので、畢竟今の問答は言句の上にあるのでは無い、同じ言句であつても其の時の機合一つで、千里萬里の差異となるのであるから、前に其の話を聞いた時には頓と合點の往かなかつたことでも、後には其の語に依て豁然大悟することもあるのである、着語に鰕跳れども斗を出でず斗の中へ小鰕を入れるとピン／＼と跳りはねるけれども到底斗外へ飛び出すことは出来ないも同様、師弟に替つて徧身を通身と言ふて見てもヤハリ同じことよ、寧ろ此時に全く同じ語を以てヤハリ徧身是手眼と言ふてあつたならば、後學の理窟を免がれしめてあつたかも知れぬが、亦た其の語の一字かはつた爲めに一疑團を引く材料ともなつて、功夫參究の力を得させる邊もあらう、畢竟は徧の眼睛を換却し舌頭を移却す、要はこゝに在るのである、徧身と云へば徧身に滯ふり通身と云へば通身に滯ふる、そこでソレを轉却せしむるのが接化の尤も肝要とする手段である、還て十成を得てんや也た未だしや、他を替めて只八成と言ふたのであつたが、これが十成と云ふのであるかと撻着した、結局は八の十といふ數量に涉るべきことでは無い、只々參を喚て爺と作したのみのことよ、爹も爺も同じく父を呼ぶの稱である、カ、さんと云ふもオツカと云ふもオカーサマと云ふも同じく母親のことよと、兩人の間に優劣勝敗を認めないのである。

頤 徧身是是四肢八節○未二通身是頂門上有平邊○點拈來猶較猶在窠窟裏○點十萬里
何止放過則不可十萬里 展翅是納僧極處鵬騰六合雲些子境界○點搏風鼓蕩將四溟水些子
塵埃○將謂天下是何埃壒○過兮忽生重○拈却著那裏○那箇毫釐○兮未了也○吹散
止別○君不見○網珠垂○範影重重○棒○

此の頤は、觀世音の大悲を主として頤せられた、雲巖の徧身是れ手眼と言ふたものは、彼の九萬里に翫うつと云ふ所の大鵬が翅を展べて崩騰す六合の雲と云ふ勢ひで、天地四方の雲も霞も一羽ばたきに攪き散らすやうなものであると大に稱揚を極められた、圓悟は些子の境界、そればかりの事かと抑へ、將に謂へり奇特とモツと何ぞ豪いことがあるかと思ふたにと言ひつゝ更に點と點破して打ち消してしまふた、又道吾が通身是れ手眼と言ふことは、譬へば其の大鵬が風に搏つて鼓蕩す四溟の水四大海の水を一時に動搖させる力があるやうなものぢや、圓悟は同じく些子の塵埃、何のソレばかりと抑へ、將に謂へり天下の人寶を如何ともせざらんと想ふた効も無く、サテ／＼つまらぬと罵しり、更に過イヤハヤ大層な行き違ひであつた、ナゼ斯う抑へ罵するかと云ふに、次に謂ふ所の大悲の功德を廣大ならしめんが爲めの抑揚である、即ち雪竇自から前の二句を打ち消して是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず、彼の大鵬の六合四溟を動かすは廣大なやうなものではあるが、之を大悲菩薩の千手千眼に比べて見れば、一點の塵埃がチラ／＼と虚空に飛ぶやうなものであるぞ、着語に重ねて禪人の爲めに注脚を下す、雪竇あまりに講釋が過ぎる、其のやうに言はんでも好いに斬と其の注脚を截りすてしまへ、其の塵埃を拈却し來つて那裡にか著けん何處へやるつもりぢや、那箇の毫釐ぞ未だ止まざる、毫釐は極めて微細なる形容、今は即ち徧身とか通身とか言ふのを大悲の願海に比ぶれば眞に微細のことであるに、何時までも其れに住著して居たならば、決して大悲の手眼を見ることが出來ぬに依つて、其れを離れよ捨てよと警誡するために、何ぞ未だ止まざると叱る意である、着語に別々何うも雪竇の機鋒は亦た格別であると讚歎し、イヤモウ此の二句で何も皆吹き散し了れり截すべて斷滅してしまふ

づ之を譬へて見やうならば、雲巖の徧身是れ手眼と言ふたのは、彼の九萬里に翫うつと云ふ所の大鵬が翅を展べて崩騰す六合の雲と云ふ勢ひで、天地四方の雲も霞も一羽ばたきに攪き散らすやうなものであると大に稱揚を極められた、圓悟は些子の境界、そればかりの事かと抑へ、將に謂へり奇特とモツと何ぞ豪いことがあるかと思ふたにと言ひつゝ更に點と點破して打ち消してしまふた、又道吾が通身是れ手眼と言ふことは、譬へば其の大鵬が風に搏つて鼓蕩す四溟の水四大海の水を一時に動搖させる力があるやうなものぢや、圓悟は同じく些子の塵埃、何のソレばかりと抑へ、將に謂へり天下の人寶を如何ともせざらんと想ふた効も無く、サテ／＼つまらぬと罵しり、更に過イヤハヤ大層な行き違ひであつた、ナゼ斯う抑へ罵するかと云ふに、次に謂ふ所の大悲の功德を廣大ならしめんが爲めの抑揚である、即ち雪竇自から前の二句を打ち消して是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず、彼の大鵬の六合四溟を動かすは廣大なやうなものではあるが、之を大悲菩薩の千手千眼に比べて見れば、一點の塵埃がチラ／＼と虚空に飛ぶやうなものであるぞ、着語に重ねて禪人の爲めに注脚を下す、雪竇あまりに講釋が過ぎる、其のやうに言はんでも好いに斬と其の注脚を截りすてしまへ、其の塵埃を拈却し來つて那裡にか著けん何處へやるつもりぢや、那箇の毫釐ぞ未だ止まざる、毫釐は極めて微細なる形容、今は即ち徧身とか通身とか言ふのを大悲の願海に比ぶれば眞に微細のことであるに、何時までも其れに住著して居たならば、決して大悲の手眼を見ることが出來ぬに依つて、其れを離れよ捨てよと警誡するために、何ぞ未だ止まざると叱る意である、着語に別々何うも雪竇の機鋒は亦た格別であると讚歎し、イヤモウ此の二句で何も皆吹き散し了れり截すべて斷滅してしまふ

た、サア斯うなつてきては愈々大悲願海の風光を示さなければならぬことに成つたに依て、君見ずや網球垂範影重々と華嚴經の入法界品を引き出してきた、網球と云ふことを委く話せば大層面倒なことにもなるが、極めて俗に極めて略して言へば、天上界の帝釋天の居らるゝ善法堂と云ふ所の前に、摩尼珠といふ玉を繫いだ網が懸けてある、其玉が幾千百と云ふ限りもなく多くあるのが、互に光と光とが照り合ひ、影と影とが映り合ふ有様、一つの玉の中に百千の玉を含み、百千の玉が一つの玉に収まる、交映重々主伴無盡で美しいとも奇麗とも言ひやうの無い光景、ソレを此十方法界に有りとも有らゆる一切衆生一切諸法の互ひに圓融交參して、一つが百千萬億で百千萬億が一つであり、百千萬億とも一つとも言ふに言はれぬ作用に譬へたのである、垂範といふは其の網珠の垂れ下れる姿、サア斯うなつてきては、通身の徧身のといふ一個人の話では無い、十方法界を全提して始めて大悲の幾分を言ひ詮はしたのである、圓悟は例の如く之をも抑へて大小大の雪竇遺箇の去就を作す、雪竇とも言はれる者が其のやうな譬喩などを引き出してくるとは、何といふ取り亂しやうかと罵しる、可惜許舊に依て、葛藤を打す左右に雪竇は文才に任せて色々なことを言ふて人を惑はせる悪い癖と抑へる、棒頭の手眼何よりか起る、彼の徳山禪師の如き、人を接すれば直に棒を振つて打着したと云ふ、其の峻峻孤危なる機鋒の如きは畢竟何處から起つたのであらうぞ、皆只此の廣大圓滿なる大悲の手眼が、時として棒ともなり喝ともなり、乃至拈鉈堅拂、種々百端の活動をするのでは無いかと云ふ、其れは何も禪僧の棒喝に限つたことで無い、農夫の鋤鎌も商人の十呂盤も、乃至帽子をかぶるも草鞋をはくも、皆此の大悲の千手千眼に外ならぬのであるが、如何にせん寸毫も人情を加へ分

別に落つれば皆千里萬里の隔たりとなるのである、着語に先づ咄と叱りつけて、更に賊過後の張弓、最初から其の棒を持ち出せば好いに、今頃になつて何の用に立つと罵しる、偏を放すことを得ず、雪竇貴公の罪は輕くないぞよ、然し盡大地の人氣を出だす處なからん、斯う棒頭の手眼何よりか起ると問はれては誰でも答へは出来まい、放得すれば又須く棒を喫すべし、けれども若し雪竇が此處で手緩いことをして居たならば、自から其の棒を喫することになるであらう、サア圓悟は斯うちやと便ち打つて云く且く道へ山僧底が是か雪竇底が是か、此の着語は次の句の下に在るべきであることと云ふことである、即ち雪竇は愈々結局に至りて咄と都べて從上の葛藤を咄破して痕迹をのこさない、そこで圓悟が便ち打つてサア何うちや雪竇の一咄と我が一棒と孰れが是か勘辨して見ると、門下後學への撻着である、此の咄の字を喝に作つた本がある、咄でも喝でも好いが、此次の三喝四喝の後作麼生とある着語から喝の方であつたかも知れぬ、即ち雪竇が一喝に喝散したが、其の喝を更に幾喝もつゞけた所で、其れから何うすると云ふのちやと此に至りては、喝と云ふも咄と云ふも亦た只賊後の張弓に過ぎぬのである。

第九十則 智門般若體

本則 舉僧問智門如何是般若體 通身無二影象 坐斷天下 門云蚌含明月 光吞萬象 即且止棒 頭正眼事 如何 僧云如何是般若用 倒退三千 曲不藏直 雪上加霜 又一重

作^二行^一門云。兔子懷胎窟^{〇〇}苦^レ瓠^レ連^レ根^レ苦^レ甜^レ瓜^レ微^レ帶^レ甜^レ〇^〇四^レ光^レ影^レ中^レ作^レ活^レ計^レ不^レ出^レ智^レ門^レ窠^レ
 磨^レ〇〇若^レ有^レ箇^レ出^レ來^レ且^レ道^レ是^レ般^レ若^レ體^レ是^レ般^レ若^レ用^レ〇〇且^レ要^レ土^レ上^レ加^レ泥^レ

他本には此の則に垂示のあるものもあるが、其の垂示は後の第九十四則の垂示と同じであつて、そして少し文句が足りない、故にコレは何かの間違ひで、第九十四則の垂示の一半が此へ混じたのであらうと云ふことである、仍て種電抄の本にも除いてあるから今もソレに従がつて垂示は除き、サテ本則に僧あり智門に問ふ、智門のことは前の第二十一則にもあつた如く、雲門大師の嫡孫であつて、此の碧巖集の頌を作つた雪竇禪師の本師である、此の間端は般若の體と用とを二つに分けたので、先づ如何なるか是れ般若の體とある、般若といふことは今さら申すまでも無いが、梵語の般若を漢譯すれば智慧であるが、支那で通常に仁義禮智などと云ふ時の智とは、字が同じでも意味の程度が違ふに依て、殊更に慧の字を加へて智慧と云ふたものである、サテ此の般若と云ふことを説明するに就ては、實相般若と觀照般若と文字般若との三つに分けて講釋するやうなこともあるが、今は其のやうに面倒なことはお預りにして置いて、約る所は吾人の心の靈光を般若と謂ふので、常に諸佛の光明と云ふのも此の般若、すなはち吾人の心の靈光のことである、此の心の靈光は不可思議にして十方法界に遍滿する、譬へば鏡の光の如きもので、無念無心にして而も明煌々たるものである、それを即ち般若の體と謂ふ、着語に通身影像なしとあるは、徹頭徹尾光明ばかりぞと云ふこと天下人の舌頭を坐斷す、般若の體は決して言語を以て説明することの出来るものではない、體を用ひて什麼をか作さん一體に般若を體だの用だのと分けて何うするぞ、若し分けられるやうなものな

らば般若であるまいと問者を抑へる、門云く蚌明月を^{〇〇}含む、此れは支那の俗語に廉州の合浦と云ふ所の蚌蛤に眞珠の多いのは、八月十五日の夜に蚌蛤が明月の精を含んで、それが眞珠になるのであると云ふことを言ふのである、それを借りてきて答話にあてたのである、蚌蛤に用は無、只その明月の光が無念無心にして照さるる所なき姿を言ふのである、故行誠上人が般若波羅蜜多といふ題で「何をかは照せるものと冬の夜の嵐のあとの月に問はばや」と詠せられたのも、全く此處の味ひと見える、着語に光の萬象を含むは且く止く棒頭正眼の事如何、と圓悟特色の棒を持ち出した、言ふころは蚌蛤が明月を含んだと云ふやうな詩的なことはお預りにして、今こゝで七尺の烏藤を振りかざしてドンと打ちなぐると云ふ端的是はウヂヤナ、それは般若の體か將た用かと、智門に向ひつゝ吾人への警誡である、曲は直を藏せず此れは智門の答の公明無私にして體の用のと云ふ度合を通りぬけて居る姿、雪上に霜を加ふ又一重、蚌蛤ならば蚌蛤で何の不足もあるまいに、明月含むなどは餘計なことよと抑へる、僧云く如何なるか是れ般若の用、吾人朝夕喫茶喫飯、屙屎放尿、起居振舞何事か亦た般若の用ならざらん、前に譬へた鏡の光が能く萬物を照して、花が來れば花のまゝに紅葉が來れば紅葉のまゝに、思量分別に涉らず歷々分明其の影を映じつゝ、厭ひもせねば欣びもせぬやうにさへ往けば、吾人の日用皆悉く般若の用の現成である、般若の用は常に利劍に譬へられ、又は大火聚に比せられる、觸るれば斬れる當れば燒ける、實に活動息む時なき功用を表したものである、そこで着語にも倒退三千里イヤモウ般若の用は恐ろしいものぞ、觸れざるに如かず逃げるに如くは無いとしゃれた、用を要して什麼をか作さん、十方法界一枚の大光明を體だの用だのと分けて何

の詮があるや抑へる、門云く「**兔子懐胎**」、これも前と同じやうな支那の俗説で、兎は八月十五夜の月に向つて口を開いて居れば、懐妊して兒を口から生むのであるから、兎は月の精であると云ふのである、今は其の兎には用は無、只其の月の光が無念無心にして一切の物を照す姿を借りて、般若の用の無礙自在なるに比べるまでのことである、問ふ方では體と用との二つに分けての問ひであるが、智門の答は、蚌と兎と相手は違ふても同じ中秋の月の光のみである、一體に月を以て法に譬ふることは佛教家の常習で、眞如の月と云ひ法性の月と云ひ心月と云ひ、其他色々に言ふけれども、尤も人口に喻炙して人の知つて居るのは**盤山道積禪師**の心月の偈である、「**心月孤圓、光含萬象、光非照境、境亦非存、光境俱亡、復是何物**」又**永嘉玄覺大師**の「**一性圓通、二切性、一法徧含、二切法、一月普現、二切水、一切水月、一月攝**」とあるのだが、尤も今の問題に親しく思はれる、然し斯の邊で知解分別したのでは、此の公案と全く没交渉である、圓悟は先づ喰と言ふた、サスガは雲門下の知識だけに、智門の機鋒は峻峻であるとほめ、苦瓠は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し、山は高く海は深いと云ふも、火は焼き水は濡らすと云ふも皆同じことで、それが即ち般若の用よ、光影中に向つて活計を作さば智門の寔窟を出で、智門が體にも用にも一貫して只月光を以て答へたからと云ふて、若しも其の光の影のと云ふ所につきまはつて居つたならば、何時までも智門の語下を脱出することが出来まいぞと學人への注意、若し箇の出で來ることあらば且く道へ是れ般若の體か是れ般若の用かと云ひ、又且く土上に泥を加へんことを要すと云ふ二語は古本に無い、風外老人は取らぬと言はれてある。

頌 一片虛凝絕 謂情

擬心即差動念即隔

人天從此見空生

須菩提好

與三十一棒

使須菩提也倒退三千里 **蚌含玄兔** **潑潑意** 也須是當人始得〇有什深意 **會與禪**

家作戰爭 干戈已息天下太平〇還會

一片虚凝謂情を絶す、と般若の體用を頌し盡された、虚は虚明の義で、吾人本心の靈光が無礙自在に物を照す有様、凝は凝寂の義で、吾人本心の靈光が常住不變にして決して動揺しない姿、謂情は謂言情識で、心で彼れの此れのと思量分別するの情、口で彼れの此れのと論辨說示するのが謂である、常には情謂と熟する字であるが、酌字の都合で謂情と云ふたものと見える、今は其の本心の靈光が虚明凝寂なる有様を思量することもならねば言説することも出来ぬ、謂ゆる不可思議不可說の境界、それが即ち般若の當體であると言ふ、着語に心を擬すれば即ち差ひ念を動すれば即ち隔つ、苟くも心を動轉すればハヤ情謂に落ちて虚凝の般若に遠くなるぞ、佛眼も也た覩れども見えず、此の虚凝にして謂情を絶したるもの諸佛も窺ふことにはならぬ、人天此れより空生を見る、元來一片虚凝の靈光は、已に謂情を絶したるものであるけれども、コ、に於て眞實に會する所ありさへすれば、或は人間もしくは天界の衆生も皆此の點に於て空生に相見することが出来るぞと言ふ、空生のお事は、前の第六則の頌で一わたり話して置いたが、釋尊十六弟子の隨一たる須菩提尊者のことで、原語の須菩提を漢譯して空生と云ふのであるやうな、

此の人が空理三昧に入つて坐禪して居るのを、帝釋タイシヤク天が花を雨ふらして供養し、尊者が能く般若を説くを讃歎すると言ふた、空生は我れ未だ曾て一字の般若を説かず、汝何をか讃歎すると言ふた時に帝釋が尊者無説にして我乃ち無聞なり、無説無聞是れ眞の般若と言ふたとある、今は其無説無聞是れ眞の般若と云ふ所を取つて、眞の般若に契カチふと云ふ意味を、故事に依つて空生を見ると言ふのである、着語に須菩提好し三十棒を興ふるに、空生を見て何にする、偏空耽寂ヘンクウタンシヤクの痴漢打つてやれと罵る、這の老漢を用ひて什麼か作さんと云ひ、設使須菩提なるも也た倒退三千里と云ふ、此の二つの着語は皆前の着語の注に過ぎぬ、無くとも好いと思ふ、蚌ヘイ玄兔ゲンを含む深々々たる意、智門の二つの茶話を一句に作りて、如何にも其の意味が深いと讃歎した、玄兔といふのは月の異名であるから、此の二字を以て月と兔とを兼ねてツレに蚌を加へたは誠に面白い句の作りかたである、着語に也た須く是れ常人にして始て得べし、其の深々たる意は決して他に憑りて語り得べきでは無い、人々各自に脚下を照顧して自知自得すべきであると云ひ、更に元來謂情を絶してあるに什麼の意かあらんと抑へた、其次に何ぞ須く更に深々たる意を用ゆべきとあるは、例の注釋的である、會て禪家に興へて戰爭を作さしむ、其の深々たる意味を自知自得させるには坐觀究理二三十年、幾たびか蒼龍窟に下るの苦辛を要するのであるぞと云ふ、着語に般若は元來安穩無事の境界、譬へば干戈已に息んで天下太平であるやうなもの、然るに何の戰爭をか要せんとの意、還つて會すやと門下に一拶して、打つて云く閻黎多少を喫し得たる、雪寶は戰爭させると云ふが、諸子はどれほど鐵砲玉を受けたかと學人の脚下を點檢する。

第九十一則 鹽官犀牛扇子

垂示 超情離見。去縛解粘。提起向上。宗乘扶豎。正法眼藏。也。須十方齊應。八面玲瓏。直到恁麼田地。且道還有同得同證。同死同生底麼。試舉看。

情○○○○を○○○○超○○○○え見○○○○を離ると云ふは、佛法修行の常であつて、廣く言へば八萬四千の煩惱、約めて言へば含瞋痴の三毒、皆只情感の千變萬化である、先づ其れを離れて感情の支配を受けないやうにせんければならぬ、又見と云ふは、廣く言へば六十二見とも云ふが約めて言へば斷見と常見である、モツと約めて言へば我見の一つであるが、都べて見るにつけ聞くにつけ、喜怒哀樂貪瞋痴慢等の情識に追ひ廻されなだけの稽古は出來ても、宇宙萬象に對して此の體性が斷無であると思ふ所の斷見か、又は其の體性が常住恒有であると思ふ所の常見か、此の二つの中の一つに片寄るものが多數である、我見と云ふ時の我の字は、當節の人の謂ふ所の靈魂の意味で、此の五尺の肉體の内に、別して靈妙なる所の魂魄が有つて、此の肉體が死んで斷滅してしまふた後にも、其の靈魂だけは常恆不滅であつて、それが地獄へでも天國へでも往くやうに思ふて居るのは、肉體に斷見を立て、精神に常見を持つて居るのであるから、それは斷常の二見兼帶の外道で

あると古人も誡められてある、左に右に凡夫の情識を超えた上に、更に此の學者の見識を離れなければならぬのである、サテ又縛を去り粘を解くと云ふは、更に其上の佛法に束縛せられ祖道に粘着して居る所の尤も高尚なる迷ひ、前には金鎖玄關とも言はれ、又病の愈えた後の藥毒に譬へられるのを、常に佛祖の粘縛とも謂ふのである、然るに此の病は中々に除き難いもので、如何なる名僧高德の人でも、佛法ほど尊いものは無いと思ふ所から、都べての他宗教は二もなく輕蔑したり、又は自分の宗旨の勝れた所を信するあまりに、他の宗派は都べての何の利益も無いやうに言ふたりする癖は容易に脱けないものである、尤も初心の者を濟度する方便として、自家の信仰を強く勧めるために、他教他宗と比較評論するやうなことがあるのは、廢立の法門と申して萬已むを得ぬ場合もあり、又他の邪見邪解に陥つて居るのを救ふために、彈呵叱責することも亦た止むを得ぬのであるが、それとコレとは程度に違ひのあることで、即ち自家の胸中には毫厘の粘縛の氣などは絶え果てゝゐて、それから後の濟度方便には如何なる處分に出でやうとも、それは却て粘縛を離れた上の働きと云ふものである、サテ其の働きよりはと云へば向上の宗乘を提起し正法眼藏を扶豎する、此の向上と云ふ言葉は近頃は世間で頻りに使ふやうであるが、從來禪宗で使つて居るのは大に程度が違ふかと思はれるから注意して置きたいものである、從前禪宗で向上と云ふのは、高尚なる目的、即ち理想に向つて進んで往くと云ふことでは無い、已に宇宙の本體を掌中に握つて自ら萬物の主宰となり、基督教などで謂ふ所の神をも奴婢として自由に逐ひ使ひ、佛教で謂ふ所の佛陀を牛馬の如くに使役する地位に立ち、謂ゆる孤峰頂上に獨坐する姿を向上宗乘と謂ふのである、これは固より提起

して人に示すべきものではない、又他人の示しを受くべきことでも無いが、今は且らく初心のために、其の幾分を或は言句または動作の上にして見せるまでのことである、正法眼藏と云ふことも常に言ふことではあるが、早く言はゞ佛の悟りと云ふことで、それを歴代の祖師が嫡々相承すると云ふので、或ひは佛心印を傳ふるとか、宗脈を承けるとか、傳燈とか、瀉瓶とか、色々と有り難そうに言ふやうなもの、其の實は天地日月山川草木宇宙萬象ありのまゝに歴々分明、悉く正法の實現ならぬものは無い、それを今は扶豎すると云ふも、畢竟吾人鈍根の學人のために已むを得ざる手段である、けれども也た須らく十方齊く應じ八面玲瓏、と如何なる場合に於て如何なる事情に出あふとも、自在無礙に而も淨裸々赤灑々、丸はだかになつて毫末ばかりも虚偽に涉らず、猶豫せず假借せず、直に恁麼の田地に到るべし、恁麼の田地といふは、即ち前の向上宗乘を提起し正法眼藏を扶豎することを指すのである、田地といふは俗に立脚の地とか、又は立ち場とでも云ふやうな意味、且く道へサア還て同得同證同死同生底ありや、道の事は三世の諸佛も歴代の祖師も、皆同じ軌道を同じ様に歩いて居ることは、昔の火も今の火も、西洋の水も、東洋の水も、必ず物を焼く必ず物を濡らすと云ふことに於て異轍のあるべきでは無いと同じやうなわけであるが、其れに就いて古人の間に適當な證據とも謂ふべきは、鹽官と投子と石霜と保福と雪竇との四大老に面白い逸話があるぞと云ふので、試みに擧す看よ。

本則 擧鹽官一日喚侍者與我將犀牛扇子來打高藤不少何

侍者云。扇子破也。可憐許○好個官云。扇子既破還我犀牛兒。消息○道什麼來。新編○和尙用犀牛兒作什麼侍者無對。果然是箇無孔投子云。不辭將出恐頭角不全。似則似爭奈兩頭三雪竇拈云。我要不全底頭角。將鐵就鐵石霜云。若還和尚即無也。道什麼雪竇拈云。犀牛兒猶在。認○泊乎錯資福畫一圓相於中書一牛字。草藥不勞拈雪竇拈云。適來爲什麼不將出。也是不辨保福云。和尚年尊。別請人好。辭地裏罵官人○雪竇拈云。可惜勞而無功

鹽官といふは、杭州鹽官の海昌院齊安國師と申して、馬祖大師の法嗣である、我が嵯峨天皇の皇后橋嘉智子の君は、此人を我が國に請待せられたのであつたが、老衰したからと云ふので、弟子の義空禪師と云ふ人を日本へ寄來された、皇后は特に檀林寺と云ふ寺を建て、其の義空に參禪の功を積まれて見性悟道の境に達せられ、檀林寺に御隱居なされたと云ふので、檀林皇后とも申しあげる、これが我が國に於て全く禪宗の始まりである、皇后の悟りのお歌として傳へられてあるのに「もろこしの山のあなたに立つ雲は此處に焼く火の烟なりけり」とあつて、法性の大海には遠近の隔てなきことを詠ぜられてある、此のお歌は空

間におよみなされたのであるけれども、其中におのづから時間の無限なることを含まれてあるから「唐山に今朝たつ雲は日の本の神代に焼きし烟なりけり」と云ふ意味にも見なければならぬのである、サテ話が横道へはいつたが、元へ戻つて、其の鹽官の齊安國師が一日侍者を喚び我がために犀牛の扇子を將ち來れと言はれた、犀牛の扇子と云ふのは、犀牛の角で骨を作つた扇子のことであるとも云ひ、又は犀牛玩月の圖の畫いてあつた扇子のことであるとも云ふ、それは何でも宜いが、鹽官は侍者の僧が寢ても起きて怠たらす參禪三昧になつて居るやら居ないやらを試むるために、突然にコレコレあの犀牛の扇子を持つてきてくれと言はれたものと見える、着語に葛藤を打すること少なからず、扇子を持ち來れなど、手緩いことを言ふて居る、それよりは何ぞ這箇の好箇消息に似かんと仰へる、這箇といふは、即ち向上宗乘の事である、然るに此の侍者の僧は茫然として居たのか又は正直一片なのか侍者云く扇子破れぬハイ彼の扇子は疾に破れてしまふて御用に立ちません、これも謂ゆる這箇を拈起して、言を扇子の破れたのに寄せたのであつたならば、多少の味ひがあつたであらうけれども、ドウも此の侍者には其れだけの識見は無かつたものと見える、着語に可惜許、ナニ扇子が破れたと言ふか其れは惜しいことをしたと冷かし、イヤ好箇の消息、本統に破れたとすれば其れも面白いと揄擲し、けれども一體に這箇の扇子が破れるものであるかナ、妙なことを聞くことよと咎めて什麼と道ふぞと一撈した、官云く扇子既に破れなば我に犀牛兒を還へし來れ、これを且らく理致を以て義解して見れば、既に其の相が破れ其の用が絶えたとしたならば、其の本體本性は何うなつた、其れを一つ穿鑿して見ると言はれたものとも見らるべく、極めて俗に言へば肉體

は死んだとした時に、其の精神は何うなるぞとも聞えるのである、着語に漏返^シ、少^シからず、餘りに慈悲が過ぎて醜いぞと抑へる、幽州は猶ほ自ら可なり最も苦きは是れ新羅、幽州は今の北京^{ペキン}の地で、新羅は今の朝鮮である、此の語は支那の當時の俗に其れは未だしもコレには困つたと云ふ意味の諺語であるそうな、即ち前の扇子を持つてこいは未だしものこと、今度の犀牛兒を還し來れとは侍者も困つたらうと冷かすのであるけれども、和尚犀牛兒を用ひて什麼か作さん、其の様なものを求める必要がないでは無いかと鹽官の機を奪ふ、侍者無對、元來茫然^{ゴシヤリ}の侍者和尚、こゝに至りて閉口してしまふた、圓悟は果然として無孔の鐵鎚、到頭何の役にも立たないと罵しり、可惜許と残念がる、風外老人は若しこれ當時鹽官の侍者であつたならば、國師が我に犀牛兒を還へし來れと言ふた途端に、何なりとも其處にあり合せた物を取つて國師にわたす、國師が其れは犀牛兒で無いと言ふたならば、和尚眼花すること勿れ、寢とぼけなさるなと言ふのであつたにと言はれた、サテ此の鹽官と侍者との問答は此れまでのことであるが、後に投子の大同禪師が、侍者に代りて謂ゆる代語を附けられた、即ち投子云く將ち出るを辭せず恐くは頭角全たからざらん、犀牛兒を持つてこいと仰せられるならば持つても参りまじやうが、若し之を持ち出したならば頭角が欠けて畸形^{カクワ}になつてしまいまじやうと云ふのである、なぜかと云ふに、今こゝで犀牛兒に譬へられるのは、謂ゆる眞如法性とも涅槃妙心とも稱せられる所の眞理であるが、それは人に持つてこいと云ふべきものでも無ければ、又た人に持つて往つてわたすべきものでも無い、それを強いて受取り受渡しすると云ふことになつたらば、それはハヤ眞理の全分では無いことになるからである、着語に似たることは似たり兩頭三面な

るを争奈せん、全いとか全くないとか言ふだけハヤ本分に疵がつく、也た是れ道理を説く、作家の衲僧のやうで無いと抑へる、更に其後に至りて雪竇禪師が、此の投子の代語に對して、雪竇拈じて云く我は全からざる底の頭角を要す、投子は頭角の全たからざらんを恐ると言ふたが、我は却て其の全たからぬ頭角が必要である、何うぞ其れを持つてきてくれと言はれたならば、更に何うするぞと投子を抑へる、一體に這箇の犀牛兒は持ち出さるべきもので無い、それを頭角全からざらんなどと言ふて人を誑らかすのが宜しくない、若しも頭角不全の犀牛兒、即ち不完全の本體と云ふものがあるならば、これを持つてきて見せると、これは中々強い掛け合ひかたである、更に投子に代りて吾々お互ひも、これに對する答をなさねばならぬまい、圓悟は何の用を作すにか堪えん、千里の馬でも骨になつては用にも立つまいと言ひ、又將錯就錯、賣り言葉に買ひ言葉と云ふ有様ぞと言ふ、又石霜慶諸禪師も之に代語を附けられた、石霜は前の八九則にあつた道吾の弟子で、門下に二十六員の龍象^{リウゾウ}を打出したる名匠である、其の石霜が彼の侍者に代りて云く若し和尚に還さば即ち無からん、人々其足の犀牛兒を何うして貴方へお渡し申すことが出來やうぞ、元來やりとりの無いものでは無いかと云ふのである、着語に什麼と道ふぞ、有るの無いのと云ふも甚だ不都合ぞと抑へる、然し此の無の一字が鼻孔^{ビョウキョウ}に撞着す、本來無一物の祖意に契ふと贊歎する、雪竇拈して云く犀牛兒猶ほ在り、其の無いと言はれたので始めて犀牛兒が今尚ほ健在であることが分つた、着語に兪^ユその犀牛兒に觸れたならば、頭角で突き殺されるであらう、危険なことよ、泊^ホんど錯で認む然かし雪竇も其の犀牛兒を見そこなふたのでは無いか、なぜかと云ふにヤハリ在るの無いのと言ふて居るから、頭を

收め去れ其の犀牛兒の頭角を出させないやうにして置くが好い、頭角を出せばハヤ第二第三に落つるであらう、資福一圓相を盡して中に於て一の牛の字を畫す、此の資福如寶福師のことは前の第三十三則に出てあつた通り、瀧仰宗の嫡流の人であつて、常に轍もすれば一圓相を畫する癖のある人である、一圓相といふは一つの眞ん丸な輪の形を畫いて、其中へ一つの牛の字を畫いた、此れが即ち國師の求める犀牛兒であるぞと云ふのであるが、前に風外老人が、何たりとも其處に有り合せた物を取つて國師に渡せと言はれたのも、此の機會である、結局道理を以て思量分別すべきことでは無い、只今その機會一つに在るのである、着語に草葉拈出するを勞せず、其のやうな古臭い畫の下書のやうなものを持ち出すには及ばぬぞと云ひ、又形を弄するの漢、畫にかいた牛では役に立たぬと云ふ、雪竇拈して云く適來什麼としてか將ち出さざる、其のやうな好い牛が居るならばナゼ先刻から早く出さなかつたと言ふ、其の實は雪竇全く資福に大賛成なのである、圓悟は金鑰辨、せず眞金であるやら眞鍮であるやら分らないのであらうと、雪竇の資福に賛成するのを抑へ、也た是れ草裡の漢、ヤハリ木分の立ち場では無いと何處までも抑へる、保福云く保福從展禪師のことは、前の第二十三則にも出、あつた通り雪峰和尚の弟子である、和尚年尊別に人を請せば好しと代語した、鹽官が侍者に向つて我に犀牛兒を還し來れと言つた時に、ハイ尊師は御老年のことで、老老して御座る様子であり、モウ拙僧には侍者の役が勤まりませんから誰ぞ他の者を侍者になされて、それから扇子なり犀牛兒なり御求めなるが宜しいと、斯う言へば好かつたにと云ふのである、ナゼかといふに、這箇元來他に隨て求むべきものでは無いからである、着語に僻地裡に官人を罵しる物蔭に居て高官の人を

罵しるやうに、鹽官國師を痛く抑へつけたナと言ふ、着語に辛を辭し苦を道ふて什麼をか作さん侍者の役が勤まらないなどと骨を惜んで何うするつもりぞと叱る、雪竇拈して云はく惜む可し勞して功なし、イヤハヤ永々の御苦勞も其れでお暇乞では骨折の効もあるまい、此事元來修行だの證果だのと云ふ勞苦を以て得らるべきでは無い、人々分上無劫始來ゆたかに具つて居ることぞと云ふ意を示すのである、着語に身を兼て内に在り、さう云ふ雪竇御前も餘計な御苦勞よ、乃至三世の諸佛も歴代の祖師も、也た好し三十棒を與ふるに、其の御褒美に打つてやらう、灼然實に雪竇の言ふ通りのことよと結局大賛成を表した。

頌 犀牛扇子用多時 遇夏則涼 遇冬則暖 人人具 問着元來總不知

知則知會則不_レ會 莫_レ辨 無限清風與頭角 在_レ什麼處 天上天下 頭角重生 是_レ什麼處 人好也 怪_レ別人不_レ得 無_レ限清風與頭角 會_レ天上天下 頭角重生 是_レ什麼處 起_レ浪 盡_レ同雲雨去難追 是_レ失_レ錢 遭_レ罪 雪竇復云 若要清風再復

頭角重生 人_レ有_レ箇犀牛扇子 二十_レ時中 全_レ得_レ他 請_レ禪客各下一_レ轉語 還_レ道

官猶在 鹽 問云 扇子既破 還我犀牛兒來 也_レ有_レ二箇犀牛扇子_レ 咄 時有僧

出云 大衆參堂去 誠_レ過_レ後 張_レ弓 被_レ奪_レ却 館 雪竇喝云 抛_レ鈎鈎鯤鯨

鈎得箇蝦蟇便下座 招_レ得_レ他 恁_レ麼 地

犀牛の扇子用ふること多時、人々具足個々圓成の犀牛扇子、無始劫來朝な夕なに君と呼ばるれば應と答へるのも此の扇子、腹が空いたと云ふて飯を食ふのも此の扇子、念佛申して往生したいと云ふのも此の扇子、佛を罵り祖を呵するのも此の扇子、寝ても起きても此の扇子が休んだことは無い、朝々扇子を抱いて起き夜々扇子を抱いて眠つて居るのである、圓悟は夏に遇ふては則ち涼く冬に遇ふては則ち暖かと思ふ、人々具足甚としてか知らざる、此の語は次の句の下に在るが好いと思ふ、阿誰か會て用ひざる斯んな着語は無くても好い、問着すれば元來總に知らず其の扇子の體相および其の功如何と問はるれば元來總べて知らず、此の總の字の中には三世の諸佛も歴代の祖師も皆こもつて居る、只々鹽官の待者が無對であつたばかりでは無い、維摩は默然、釋尊は拈華、迦葉は微笑、それもハヤ第二第三ちや、コ、に至りては田舎の念佛三昧で居る老嫗と同じく只々不思議と信するより外は無い、それを利口そうに科學であるとか哲學であるとか云ふて知つたらしく言ふたり悟つたらしく言ふたりするのは、皆其の實は僅に一部分を知覺したまでのものである、東坡居士は此の間の消息をもらして、廬山の眞面目を識らざるは只身の此の山中に在るに縁ると言ふた、圓悟は知ることは則ち知る會することは則ち會せずと雲寶が知らずと言ふた語脈を截斷して、ナニ知れぬことがあるものか只會することが出來ないのよと、要する所は其の語句に轉ぜられないやうにと云ふまでのことである、人を瞞すること莫くんば好し、總に知らずと他人の事のやうに言ふが、さう言ふ御自分は如何で御座る、人を馬鹿にしなさるなど言ふたやうなアンバイ、也た別人を怪むこと得ず他人の事ばかり言ふわけには往くまいと、此の語も贅言である、これで本則の問答は頌了つ

て、あとは投子石霜等の代語の頌である、限り無き清風と頭角と、これは扇子と云ふに因みて清風と云ひ犀牛と云ふに因みて頭角と云ひ、投子石霜資福保福の四大老が思ひ／＼に宗乘を擧揚せられ、蘭菊梅竹各各其の美を壇まゝにする有様を無限の二字を以て稱讚して、少しも其間に褒貶を加へない、着語に什麼の處にか在る其の清風とか頭角とか云ふのはソレは何である、了々として見るに一物なしと云ふ境界であるに、其のやうものが何處に在る、自己の上に向つて會せずんは什麼の處に向てか會せんとかレは門下後學に向つての警誡、天上天下、其の清風も頭角も宇宙に徧滿して居るぞ、頭角重ねて生ず、投子は頭角の全からざるを恐ると言ふてあつたが、此の雲寶の論證で見れば頭角が全くなつたと見えるとしやれ、是れ什麼ぞと抄着し、風なきに浪を起すと雲寶の葛藤を抑へる、盡く雲雨の去て追ひ難きに同じ、彼の四大老が限り無き清風を起し頭角を現はしたけれども、それが皆思量分別に涉ることの出來ない没蹤跡の消息であることは、恰かも朝雲暮雨の忽ち生じて忽ち散ずるやうなもので、亦た只不思議と仰ぎ見るの外は無い、圓悟が蒼天蒼天、それはハヤ手のつけやうの無い悲しいことよと讚歎する、也た是れ失錢遭罪、四大老の代語大きに御苦勞であつたが、其の効もなく雲雨の去つて追ひ難きに同じなどと言はれては御氣の毒なこともよと、これも本分の風光を讚歎の言葉である、これで全たく頌は済んだのであるが、以下は或時雲寶が上堂の因みに、此の公案及び自作の頌を拈提せられて、門下の衲子に參究せしめられた話を附録せられたのである、雪寶復た云く若し清風再び生じ頭角重ねて生ぜんことを要せば、請ふ禪客各々一轉語を下せ、彼の四大老が此の公案に就て限り無き清風を起し頭角を現はしてあつたのを、今日現在こゝで復た其通り

の景況を見やうと云ふには、諸禪客一同に各々彼の侍者に代りて一轉語を下して見ろ、諸人は異して能く清風頭角を實現させることが出来るかと一同に拶問せられた、圓悟は還て道ひ得て三轉了る一轉語のみか雪竇はハヤ三轉了つたでは無いかと言ふ、三轉と云ふは、初めに此話を提起したのと、次に此話を頌したのと、又今此話を拈弄するのとの三段である、兩官猶ほ在り、今また此處で拈弄する様子は、鹽官國師が出て来たやうであるぞと言ふのである、そこで雪竇が鹽官に代りて大衆に問て云く扇子既に破れなば我に屎牛兒を還し來れ、着語に也た一箇半箇あらん、斯う問ふたならば雪竇門下にも一人か二人か此の公案を捌き得る者が無いでもあるまいと言ひつゝ、更に咄と言ふて雪竇の此の提唱を根本から咄散してしまふた、也た好し禪床を推倒するに、誰ぞ一人驚直に雪竇の椅子を引くり反す者がありそやなものぢや、時に僧あり出で、云く大衆參堂し去れ、此の參堂し去れと云ふことは、人々自分自分の部屋へ歸れと云ふほどのこと、上堂說法などの濟んだ時に、主人から同一に申しわたす言葉であるから、今日の主人たる雪竇が言ふのならば當然であるけれども、それを門下の一人が飛び出してサア／＼一同に參堂してしまへと言ふのは、全たく主客顛倒したので、雪竇は一同に各々一轉語を下せと云ふのを打ち消して、モウ用は濟んだと云ふたアンパイであるが、これが果して如何なる機鋒であらうぞ、圓悟は賊過後の張弓と云ふ、前に雪竇が清風再び生じ頭角重ねて生ぜんことを要せばと云ふた途端に、其のやうな要は無いと云ふので、直に其禪床を推倒してやれば好かつたに、今頃になつて參堂し去れなどと云ふてもモウ遅いと抑へるのである、けれども是れで雪竇は鎗を奪却せらる、主人の位地を引くりかへされた、然し前は村に擣せ

ず、後は店に送せず、互ひに主ともつかず客ともつかず双方不具になつた、然るに雪竇咄して云く釣を擣ちて鯢鯨を釣る箇の蝦蟇を釣り得たりと言ひつゝ、便ち下座してしまつた、此の公案を香餌にして鯢鯨の如き大魚を釣らうと思ふたに、このやうな主人の椅子を奪ふやうな蝦蟇一つ釣つた、サテ／＼笑止なことと言ふて、上堂の席を下られたと云ふのである、これは雪竇が此の僧を褒めたのであらうか叱つたのであらうか、更に參ぜよ三十年である、先づ第一に鯢鯨と蝦蟇とは是れ同か是れ別か、とも參じて見ねばなるまい、圓悟は他の恁麼地なることを招き得たり、一體に雪竇が餘計なことを言ひ出したから此のやうなことになつたのである、今頃になつて蝦蟇だの鯢鯨だのと言ふても賊過後の張弓で遅い／＼、此僧の將に出でんとするに當りて忽ち下座してしまへば好かつたにと、結局都べての葛藤を勦絶し了つた。

第九十二則 世尊一日陞座

垂示動絃別曲。千載難逢。見兔放鷹。一時取俊。總一切語。言爲一句。攝大千沙界。爲一塵。同死同生。七穿八穴。還有證據者麼。試舉看。

絃を動すれば曲を別つとは、能く音樂に精通した人であつたならば、箏にもせよヴァイオリンにもせよ、

只ピンとかペンとか纒に一絃を動かすのを聞くと同時に、直にハヤこれは何の曲を奏するのであると云ふことの辨別がつくはずのものである、それが謂ゆる眞の知音と謂ふので、千載にも逢ひ難し中々容易に其人を得がたい、又兎を見て鷹を放つと、これは兎狩をする話で、山中をあさつてあるく間にチラリと兎の姿が見える途端、間に髪を容れるすきまも無くズーツと鷹を放つてやる、其の機合の敏捷さは一時に俊を取る俊といふは俊發とか俊爽とか續いて鋭敏なる姿、先づ斯う二つの譬喩をあげて置いて次に一切の語言を一句と爲す、一切の語言と云ふは、釋尊一代五十年間の說法、謂ゆる八萬四千の法門、支那の唐代に於てハヤ漢譯の經典ばかりでも五千四十八卷と稱した、都べての言教を、唯だ一句に約めては四十九年一字不説と言はれたこともあれば、更に一枝の金波羅華に托せられたこともあり、臨濟は一喝となし、徳山は一棒となしたけれども、曾ては維摩の一默となつたこともある、畢竟一默で説き足らぬでも無ければ一切の語言を以て説き盡せるのでも無い、更に大千沙界を攝して一塵と爲すと云ふたは、前句に對を取て語を巧みにしたまでのこと、其の意味は全く同じことで、一切語言が多いでも無く一言一句が少いでも無いが如く、大千沙界が廣いでも無ければ一微塵が小さいでも無いから、微塵を破りて大經卷を出だすこともあれば、須彌山を芥子の中に納れることもある、サテ是の如き境界に同死同生し手を携へて七穿八穴と、自由自在に働けるに至りて始めて彼の絃を動すれば曲を別つの知音とも謂ふべきであるが、還て證據の者ありや、それは世尊の陞座に文殊の白槌が誠に好い證據であると云ふので試みに擧す看よと本則を提起したい

本則 擧世尊一日陞座 文殊白槌云 諦觀法王

世尊一日陞座この陞座といふことは、登壇といふも同じことで、今日に於ても禪宗の師家は時々上堂といふ法式を行ふ、其時に自分が全く佛の地位に立つのであるから、常には本尊の佛像を安置してある所の須彌壇の上に登つて法を説く、それを常には上堂と云ひ又は陞座と云ふこともあるのである、乃ち或日のことであつたが釋尊が例の如くに陞座なされて、將にお說法をお始めなさらうと云ふ所であつた、着語に賓主俱に失す主といふは釋尊で、賓といふは其の席に集まつて居たお弟子がたのことである、一體に眞實の法といふものは他に向つて説き得らるべきものでも無ければ、又他人から聞かせてもらふべきものでも無い、然るに法を説かうと云ふて陞座する者も失なれば、それを聞かうと云ふて壇下に集つて居るものも失では無いが、然し是れ一回漏返するのみにあらず、此れは今度に限つたことでは無い、是れまで四十九年三百餘會の說法、まことにハヤ漏返だらけの釋尊よと罵しる、文殊白槌して云く諦觀法王法法如是、世尊が上堂して說法の座にお就きなされたのを見るやいなや、文殊師利菩薩がスーツと進み出で直に白槌をしたと云ふのである、此の白槌と云ふことは前にもあつたが、今でも禪林に於て大勢の坊さんたちが何ぞ報告をすることもあれば、彼の槌と申して木の短かくて太い柱を八角に削つたものを下に据えつけて置いて、又別に小さくて手の平に握れるほどで其れと同じやうな形に削つた砧といふ木を手につけて、其

の下の木をカチリと打ち鳴らして一同に注意を與へ、それから何なりとも報告するのである、其の事を乗
白とも唱白とも云ふのであるが、其時に必らず槌を鳴らすものであるから白槌とも云ふのである、サテ又
此上堂陞座の時には必らず其の陞座する師家に勝るとも劣ないほどの高德の人が、白槌師と云ふ名を以て
謂ゆる白槌を勤めるのであるが、最初陞座して説法を始める時には、白槌師が即ち槌を三聲打ち鳴らし
て、法筵龍象衆當觀第一義と言ふて、更にカチリと一聲鳴らすのである、即ち其時の報告に法筵の龍象衆
といふは、其席に列なつて居る衆僧を龍や象に比するのは尊敬の意味で、將に第一義を觀すべし、佛法中
の最上高尚なる第一義諦を觀念して、是れから説かれる所の説を聽聞し、且つ疑ふ所もしくは研究を要す
る點があらばソレをお問ひ申すが好いぞと云ふのである、そこで愈々説法があり、それから各自に問答商
量等があつて、モウ此れで法式が濟んだと云ふ時になつて、更に白槌師が進み出て例の如くカチリ／＼と
槌を三聲鳴らして、今度は今こゝで文殊が言ふた通りの諦觀法王法、法王法如是と證明の辭を陳べるので
ある、即ち諦らかに法王の法を觀すれば法王の法は是の如しと云ふのである、然るに今は世尊が陞座なさ
れたばかりで、これから説法にお取り掛りなさらうと云ふのであるから、乃ち前に申した法筵龍象衆當觀
第一義と云ふべき所を、文殊はソウ言はないで、モウ説法及び問答の濟んだ後に證明として言ふべきこと
を言ふてしまふたのである、これは決して文殊が間違へたものではあるまい、戯れたのであるまい、畢竟
何としたことであらうぞ、圓悟は一子親しく得たりと評した、流石に世尊の嫡子たる文殊だけあつて、不
説の法を不聞に聞き了りて、ハヤこれで上堂は濟んだぞと云ふたアンバイ、如何にも感服の外は無いと

讚歎である、世尊便ち下座と世尊も亦た一言の説法も無しに、文殊の白槌を聞くやいなやスーツと下座し
てしまはれた、只此の陞座し且つ下座する間に、百千無量の法輪を轉じ盡されたのである、吾々お互にも
朝な夕なの起居動作、皆悉く無盡の法を説きつゝあるのであるが、それを自から知らず居るから叱られ
るのである、圓悟は愁人は愁人に向て説くこと莫れ愁人に説向すれば人を愁殺す、眞に知音と知音の消息
は不言の間に在るので、それと同じやうに苦辛した者でなくては其味ひは判らぬ、鼓を打ち琵琶を弄し相
逢ふ兩會家、よく調子の合つた名人と名人の三曲を聞くやうであるとの讚歎である。

頌 列聖叢中作者知 山莫勝釋迦老子好 還他臨濟德 法王法令不如

斯 隨他走底如麻似粟 三頭兩會中若有仙陀客 就中難得二伶人 文殊何

必文殊下一槌 更下二槌又何妨 第二第三槌總

列聖叢中作者知らば、法王の法令斯の如くならざらん、此の頌は世尊未だ陞座せざる以前に向つての立ち
場から見られたのである、列聖と云ふは釋尊門下の大菩薩たち大羅漢たち八萬の大衆と云ふが、其中にも
常隨昵近の弟子千二百五十人と云ふ、若し其中に眞に作家たる衲僧が居てあつたならば世尊が陞座なされ
たり文殊が白槌してから又下座したりして居るやうな餘計なことをするにも及ばないのであるにと云ふの
である、何でも法の本體の上から見れば皆この通りに違ひない、ワットが發明しない以前に於て、蒸汽の

力は宇宙間に充滿して居る、フランクリンが生れない前から、電氣は世界に働いて居たに相違ない、此の法が無始劫來人々分上ゆたかに具つて居ることも勿論である、只それを自覺させようと云ふために佛祖は百千萬言を費やして說法もすれば、未だ一言も發せざるに終結の白槌もするのである。程度には色々差違があつても、念佛と云ひ題目と云ひ、坐禪と云ひ觀法と云ふ、皆只魚兔を得るまでの筈に過ぎぬのである、既に魚兔を得た上には其の筈に用が無いと同様に、念佛も題目も坐禪も觀法も、乃至陞座も白槌も皆去年の曆のやうなものである、着語は釋迦老子を諷すること莫くんば好し、八萬の大衆の中に一人も作家の漢がないなどと言ふては、其の師たる釋迦老人の耻辱にならうぞ、一體に其の作者とか云ふものが、何の用に立つのかと言ふたやうなアンパイ、其の眞に作家とも稱すべきものは他の臨濟徳山に還へす彼等の棒喝が眞に法王の法令よ、然るに其の眞の作者たる者は千箇萬箇中に一箇半箇を得がたきものよと古今にかゝる、他に隨て走る底は麻の如く粟に似たり、昔も今も幾らもある、然し列聖とも言はれる程のものならば、法王の法令を知つて居るはずであるに、それが知らぬと云ふは三頭兩面の妖怪ぞと抑へ、灼然として能く幾人ありてか這裡に到ると此れは雪寶の言はれる通り、實に其人は少いと贊成である、會中に若し仙陀の客あらば、此の仙陀と云ふことは、具さに云へば仙陀婆といふ梵語で、此の一語に四種の義がある、即ち鹽のことも仙陀婆と云ひ、器のことも水のことも馬のことも仙陀婆と云ふ、其事に就て、涅槃經の菩薩品に面白い譬喩を説かれてある、或る國王の近臣に甚だ伶俐敏捷な人があつた、時々國王が仙陀婆を持つてこいと言はれる時に、其の求められるのが鹽であるか器であるか水であるか馬であるか通常の

人には判らないから、更に問ひ返さなければならぬのであるが、其人だけは決して間違へたことが無いと云ふ話なので、眞に俊發の機鋒を具へた者であつたならば、第二言を聞くには及ばぬ、一言一句一機一境の下に、直に千萬重の要關をも飛び超えてしまふはすのものである、即ち今もソレほどの伶俐の漢が居てあつたならば何ぞ必ずしも文殊一槌を下さん、文殊の點檢をうけない以前に、恰も前則の一僧が雪寶の機を奪ふて參堂し去れと言ふたやうな働きが無ければならぬのであるぞと言ふ、着語の中に就て伶俐の人を得がたしと云ふは、モハヤ贅語である文殊も是れ作家にあらず、世尊陞座の後に於ての白槌は遅い、閑黎も定て不是ならん、雪寶もやはり後れたぞ、更に一槌を下すも又何ぞ妨げん、コ、で文殊の一槌は萬萬已むを得ぬ所である、然し第二第三槌は總に要せず此れは前句の注脚のやうで後人の妄添かと思ふ、當機の一句作麼生か道はんと座下に拶着し、驗わづかに擬議にわたれば喪身失命するぞと警誡せられた。

第九十三則 大光師作舞

本則 舉僧問大光長慶道因齋慶讚意旨如何不重光○這漆桶○
大光作舞莫嫌殺人○依僧禮拜又恁麼去也○是光云見箇什麼便不問
禮拜也好一抄○須辨過始得僧作舞依樣畫葫兒○果光云這野狐精此恩

此の一則には、垂示が無くて直に本則である、僧あり大光に向ふ、大光といふは潭州大光山の居誨禪師と曰ふて、石霜の法嗣であるから、青原下に於ける達磨十二世の法孫である、長慶道く齋に因て慶讃すと意旨如何と云ふの間である、長慶の話は前の第七十四則にあつたので、金牛和尚が毎日齋時になれば飯桶を昇て僧堂の前に至りて舞を作し、菩薩子喫飯せよと言はれるのが常例であつたと云ふことに就て、後に長慶和尚が人に答へて大に齋に因て慶讃するに似たりと言はれたことがある、其の意旨を如何心得ましやうぞと、此僧が大光に問ふたのである、着語に重光、かつて金牛に依て光を放つたのが、今又重ねて光を放つ、這の漆桶と此僧の人に向つて問ひまはるのを罵しる、然しながら、妨げず疑着するを、疑があつて決しられなければ致しかたも無い、問はずんば知られず、人に問ふも亦た已むを得ぬかと筆に任せて抑揚する、大光は舞を作す、彼の金牛と同道唱和の姿である、これ何の道理であらうぞ、人の爲めに濟度の方便を廻らすことは千變萬化で、皆之を神通妙用と名くるのである、着語に人を賺殺すること莫れ、其のやうなことをして見せると虚頭な奴等が直に眞似をしますぞ、舊に依て従前恁麼にし來る、昔の金牛も今の大光も相變らず其のやうなことばかりして居るか、僧禮拜す、凡そ斯ういふ處で禮拜するといふのは、何時でも其の答話に於て大悟徹底した場合に感謝の意を表するのであるが、此僧は大光の舞を見て直に禮拜した、果して何の所得があつたのであらうか、着語に又恁麼にし去るや、何の機鋒もなく只禮拜するとは意氣地の無い仕方である、是は則ち是なれども只恐くは錯て會せしならん、場合に依て禮拜を以て他の機鋒を奪ふこともあるが、それならば面白いけれども其うではあるまい、光云く箇の什麼をか見て便ち禮拜す

ると、穿鑿にかゝつた、也た好し、一撈するに何うも打ち棄て、は置けぬ、そこが大光の大光たる所である、須く辨過して始めて得べし彼の禮拜の眞偽を子細に勘檢して見なければなるまい、僧舞を作すと果して大光の影を逐ふて人眞似をし始めた、着語に、様に依て、猫兒を畫く透き寫して形を似せただけのこと、果然として錯て會すと云ひ光影を弄するの漢と云ひ重々に抑下した、光云く這の野狐精、只この一句を愛するのために雪竇が此の公案を頌したのであると云ふことである、此の妖物め人眞似をしやがつてと怒鳴りつけたアンバイ、これは此の僧を褒めたのであらうか、罵しつたのであらうか、圓悟は評唱の中に只管に舞を作して、遞相に恁麼ならば幾時に到つてか休歇し去らん、大光いはく野狐精と、此語金牛を截斷すと言ふてある、乃ち此の野狐精と言ふた一語で、只此の僧の舞を截斷したばかりでは無くて、最初に其の桶を作つた金牛までも截斷したのであると云ふのである、要は都べて如何なる事でも其れに住着しては皆悉く地獄の業因となる、況んや美食も飽人の喫に當らずで、如何なる御馳走でも満腹の人の口に要は無いに於てをやである、着語に此恩報じ難し、實に大光の斯う截斷せられた爲人の恩は廣大であると言ふ。

頌 前箭猶輕後箭深 誰云黃葉是黃金 無限平人被陸沈

處 曹溪波浪如相似 人帶累 天下一箇僧 不

前箭は猶ほ軽く後箭は深し、大光が初めに舞を作した機鋒は未だ温和であつたが、後に這の野狐精と叱りつけて金牛の脚跟までも裁斷したに至つては、實に其の活機の孤危峻峭さ景仰に堪えぬ、圓悟も百發百中いづれの箭にも空發は無いと稱揚した、什麼の處に向てか廻避せん斯う百發百中に射つゞけられては遁げ場が無い、誰か云ふ黄葉是れ黄金と、此れは涅槃經の中に説かれてある譬喩で、小兒が啼き悲しむ時に父母が楊樹の葉の黄色になつたのを見せて、これは黄金と云ふて貴いものであるが、之を與へるから啼くな啼くなと言ふて賑かせば、其の黄葉を黄金であると思ふて啼き止むやうなものであると、如來度生の方便を示されたことがある、今も其の通りのことで、金牛が舞を作したも大光が又舞を作したも畢竟は兒啼を止るの黄葉に過ぎぬのである、それを黄金のやうに思ふて、我も亦た舞を作さん、我も亦た舞を作さんと、舞を作すのが向上宗乗の事のやうになつては、謬妄とも錯誤とも申しやうの無いことになる、尤も是れは舞には限らぬ、都べての言句伎倆皆然りである、圓悟は誰か云ふ黄葉是れ黄金と云ふに答へて且らく啼を止ることを作すと答へ、又小兒を嘯じ得るも也た用處なしと抑へる、曹溪の波浪如し相似たらば限り無き平人も陸沈せられん、甲が舞へば乙も舞ふ、丙が喝すれば丁も喝すと云ふやうに、若しも曹溪所傳の禪宗が、同軌同轍で機變展轉の活用が無いやうなものであつたならば、天下の參禪學道の人が皆平地で溺死してしまふであらうと言ふ、着語に其の人眞似をする者を叱りて泥團を弄するの漢什麼の限りかあらんと云ひ、様に依て猫兒を畫くと抑へ、一路を放行す、只一箭道の外に別路のあることを知らないかと彈呵する、又活底の人に遇着すとは、雪竇の此の勘辨を稱揚し、天下の衲僧を帶累して摸索不着ならしむと

は、世に似せ者があるために多くの人が一言に雪竇の罵倒を受けるのであると云ひ、遂に鬪黎を帶累して出頭することを得ざらしむ、雪竇御自分にも此れが爲めに迷惑するであらうぞと言ふ。

第九十四則 楞嚴經若見不見

垂示 聲前一句。千聖不傳。面前一絲長時無間。淨裸裸赤灑灑露地。白牛。眼卓朔耳卓朔。金毛獅子則且置。且道。作麼生是露地。白牛。

聲前の一句は千聖不傳、心に思ふことソレが聲に發して語となり句となる、然るに今は未だ其の聲に發せざる以前の一句と云ふので、其の實は句と名くべきものでは無いのであるが、毎度申す如く禪宗は尤も詩作の盛んに行はれた唐朝の時代に當りて、詩句を以て宗乘を擧揚したものであるから、其の道の達人を作者と云ひ作家と云ひ、又其の理想をば那一句と云ふたりする所から、今も聲前の一句と云ふ言葉も起つたのであるけれども、其の實は謂ゆる向上宗乗の眞際を言ふのである、それは本より千聖、すなはち諸佛も諸祖も各自に開發するもので、他から傳はるべきでも無ければ、他に傳へ得られるものでも無い、面前の一絲と云ふは、吾人朝な夕な現實の上に於て仕ること作すこと、皆一筋の絲に引かれるやうに、眼に物を

見るにつけ耳に聲を聞くにつけ、直にチラリと一念心の動く姿、此の初一念は長時無間である、長時無間といふは無始劫來未來永劫、暫時の間斷もなく、謂ゆる無限の時間を通貫して思量分別に涉らず、花を見ては花と知り月を見ては月と知る、釋迦達磨に在りても其の通り、吾人に於ても其の通り、地獄の衆生に於ても其の通り、勝劣もなく増減もなく、宇宙の大精神そのまゝの現成である、淨裸々赤灑々露地の白牛、淨裸々と云ひ赤灑々と云ふは、皆宇宙の真相が平等一相にして明鏡の一點の曇りなきに似たる姿、露地と云ふは平等一齊と云ふ意味の俗語であるけれども、今は都べての塵垢を掃ひ盡したる立ち場を謂ふので、或は常寂光土とも名け、又は密嚴國土とも華藏世界とも、或ひは極樂淨土とも名けらるゝ處のことである、白牛と云ふは他の權方便の教を、羊や鹿に比して法華經の一乘實教を牛に譬へ而も其の牛が無垢清淨の白牛であると云ふのが、謂ゆる法身の佛陀の姿である、眼卓朝、耳卓朝、卓朝と云ふは卓立と云ふも同じ意味で、犬にせよ猫にせよ眼を逆か立て耳を聳やかす時に其の俊發敏活なる姿が見える、況んや今は金毛の獅子の眼卓朝耳卓朝したるが如き伶俐活達の機は則ち且く置く、其れは別問題として置く、且く道へ作麼生か是れ露地の白牛、謂ゆる淨裸々赤灑々たる一乘圓頓の實相、而も教家の所談のやうに淨土だの法身だのでは濟ませぬぞ、サア何う之を處分するぞ。

本則 擧楞嚴經云吾不見時何不見吾不見之處好箇消息○
若見不見自然非彼不見之相咄○有甚閑工夫○不可見○
○釋迦老子 若見不見自然非彼不見之相教山僧作兩頭三面去也 若

不見吾不見之地向什麼處去也○咄 自然非物按平頭喫草○更云何非

汝設備設我總沒交涉○打云脚跟下自家看取○還會麼

楞嚴經に云く、此の楞嚴經と云ふは、經題を具さに云へば大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經と云ふ恐しく長い表題の經文で、唐の神龍元年に、天竺の沙門般刺密帝といふ人が翻譯して十卷にしたのであるが、其の文章は房融と云ふ儒者が手傳つたので、史記評林の物評やらにも楞嚴と維摩とは文の東神なるものと評してあつたと思ふ、此の經の成り立つた最初の原因は、釋尊の俗縁では從弟であり法縁では三十年間常隨昵近したと云ふお弟子の阿難尊者が、摩登伽と云ふ淫婦の魔術に罹つて已に戒體を破らうとしたのを、釋尊が文殊に命じて之を救はせられた後に、眞實の修行が足りないからである云ふので、非常に御深切な御教誡のあつたのが即ち此の楞嚴經の肝要なる所を大略話さねばならぬことになるから、一朝一卷にあるので、委しく之を講ずるには楞嚴經の肝要なる所を大略話さねばならぬことになるから、一朝一夕のわけには往かぬに依て、心ざしのある人は之を縁にして楞嚴經を研究して見るが宜しい、凡そ多くの經典の中にも楞嚴だの間覺だの維摩だのと云ふ經文は、昔から尤も多く世間の學者に、歡迎せられたものである、今こゝに引かれた文の前に、釋尊が阿難に向はせられて、阿難よ是の諸の近遠の有らゆる物の性は復た差殊なりと雖も同く汝が見精の清淨にして屬る所なり、則ち諸の物類には自づから差別あるも見性は殊なること無し、此の精妙の明は誠に汝が見性なりとお教訓があつて、要する所は吾々お互ひ誰にもせ

よ、眼に物を見る、其見ると云ふ性の上に於て法性平等の眞理を示されるために、彼の客觀の見られる物は千差萬別であつても、見ると云ふ主觀の方に於ては誰れ彼れの差別が無い、佛の見るのも衆生の見るのも平等一齊である、それが即ち汝の眞性であるぞと云ふことを訓誨せられた、其の語についで尙ほ若し見是れ物ならば則ち汝も亦た吾が見る可し、若し同じ見る者を名けて吾を見ると爲さばと云ふ語があつて、其れから今の本則になつた文に續くのである、然るに此の若し見是れ物ならば則ち汝亦吾のを見る可しと云ふ語が、頗る判りにくいのであるが、これは阿難が曾て見の性と云ふものも、彼の見られる物の方に屬して、客觀の物に種々の差別があるやうに、見の性にも各自差別があるであらうと思ふて居る、それを今釋尊が御諭なさるのであるから、若しも其の見と云ふことを、亦た彼の見られる物に屬してあるとしたからは、佛が今何ぞ一つの物を見られる時に、其方も同時に其物を見れば、其の物と一處に佛の見と云ふものをも其方が見ることが出来るであらう、且つ又見が已に物に屬してあるとすれば、其の反對の不見と云ふことも亦た物に屬して居るであらう、若し同じ見る者を名けて、吾すなはち佛の見をも見るとするならば、吾が不見の時に何ぞ吾の不見の處を見ざると詰り問はれたのである、モウ一つ前に溯つて云へば、一體に此の見の性と云ふものは、眼で見る見ないに拘はらず、其の本性は誰にも何時でも具つて居るものであるから、例へば盲人が何も見えないと云ふのは、それが肉眼で物を見ないと云ふだけのこと、其れで見の性が無いと言はれぬ、そこで初めに阿難が釋尊に其方は見の性は如何なるものであるぞと問はれて、ハイ暗い處は暗いと見る明るい處は明るいとして居りますと言ふた、そこで釋尊は其れならば

暗い處は暗いに還へし明るい處は明るいに還へしてしまふた時に何が見える、若しもそれでは何も無いと云ふならソレは虚空といふものである、其の虚空をも虚空に還へしてしまふたならば、モウ還へすものもあるまい、其のモハヤ何も他に還へす物の無くなつた處が即ち汝の眞性であらうかと云ふ意味の御諭しか、此の見の性の研究が此處に及んだのである、着語に好箇の消息この不見の處をナゼ見ないと佛の仰せられたのが嬉しいと云ふのである、一體に見を用ひて什麼をか作さん、已に永嘉大師も「一法を見ざる即ち如来」と言ふたのでは無いか、けれども此のやうに説き過てされては釋迦老子滯返少なからずと佛を咎める、若し不見を見るといはゞ自然に彼の不見の相に非ず、若しも見と云ふことが物に屬すと云ふならば、物を見ると同時に其の見と云ふ事をも見るはずであるのみならず、それと同じく不見と云ふことも見られるわけであるに、それはナゼ見えないぞと詰られたお言葉に續いて、若しも亦た其の不見の處を見る事が出来るると云ふたならば、ハヤそれは不見の相と云はれぬではないかと仰せられた、着語に咄と佛の饒舌を叱る、甚の閑工夫かあらん、何を詰らんことを言ふて居るぞと重ねて抑へる、山僧をして兩頭三面と作し去らしむ可からず、見ると云ふたり見ぬと云ふたり、圓悟は其の様な御相談を眞平御免蒙むると排斥する、若し吾が不見の處を見ずんば自然に物に非ず、已に不見の處を見ることが出来ないとしたならば、見の性は物に屬したもので無いと云ふことが判るでは無いかとの御教訓である、着語に什麼の處に向つてか去る、斯う責めつけられては逃げ場が無からう、鐵槩に釘つに相似たり此の説きつけかたに少しも隙が無い、咄と更に其の説法を排斥する、牛頭を按して草を喫せしむ、これは前にもあつたが、殺された牛

の頭ばかりのものに、幾ら草を食はせやうとしたからと云ふても食ひ得るものではないと云ふことで、釋尊が如何ほど御心配なされても、阿難に悟れる者で無いと云ふのであるが、風外老人は此の着語を取らぬと言はれてある、更に什麼の口頭の聲色をか説かん、元來自悟自覺すべきことを何のために口を酸くして説き聞かせられるのぞと抑へる、とゞのつまり云何ぞ汝に非ざらんと、此の一語が實に肝要なので、雪竇が楞嚴經を引いて頌を作つたのも、畢竟只此の一語が目的であるのである、汝と云ふは汝の自性と云ふこととて、謂ゆる眞我とか大我とか名けられ、或は佛性とか主人公とか這箇とか那一物とか呼ばれるもの、ことである、都べて見るにつけ聞くにつけ、客觀の事物を逐ふて他郷に流浪するのが常人の病である、今それを自己に反省して其の眞性を開悟させるのが佛の大慈悲である、圓悟は爾と説き我と説く總に沒交涉元來自他を離れる處に於て我であるの汝であるのと言ふは甚だつまらぬと抑へる、打て云く釋迦老子を見るや、このやうな説法の言葉の上に於て眞の釋迦を見ることは出来ぬぞ、眞に釋迦老子たる所以を今我が打つた端的に於て何う見たぞと一拶して、更に爭奈せん古人の背て承當せざることを、惜しいことに阿難はこれでも悟られなかつた、打て云く脚跟下自家に石取せよ、昔の阿難のことばかり見てゐてはならぬ、還て會すや諸人の脚跟下悉く是れ光明遍照十方世界では無いが。

頌 全象全牛 腎不殊 從來作者共名模

西天四七唐土二三天下老 和尙如麻似粟 猶自少在 如今要見黃頭老 刹刹塵塵

在半途 脚眼下蹉過了也 更教山僧

此頌は圓悟が評唱の中に、雪竇教眼を出で、知す、亦た物をも知せず、亦た見と不見とをも知せず、直に只見佛を知すと言はれてある、全象と云ふは涅槃經にある譬喩で、或る王が多くの盲人を集めて大象を摸らせた、各々象の一部分を摸つて見て、牙に觸つて見た者は象は蘆菴根の如くであると言ひ、耳に觸つた者は箕のやうだと言ひ、頭に觸つた者は石のやうだと言ひ、鼻に觸つた者は杵のやうだと言ひ、脚に觸つた者は木臼のやうだと言ひ、脊に觸つた者は牀のやうだと言ひ、腹に觸つた者は毳のやうだと言ひ、尾に觸つた者は繩のやうだと言ふ、皆その象を離れて居ないけれども悉く全象を見ることが出来ぬ、一切衆生の全く佛性を見ることの出来ぬのも之と同じやうなものぞと云ふのである、全牛と云ふは莊子にある話で、包丁といふ人は牛の料理をする名人で、刀を振つて牛を切り割く時に、只その心のまゝに豆腐を切るが如く大根を切るが如く、眼中に全牛を見ないと云ふ話、其の全象を見ると云ふも亦た全牛を見ぬと云ふも、都べて其の道の堂奥に達したことのやうではあるが、其の見るの見ないと云ふ所が即ち腎不殊ならすである、腎と云ふは眼病のことで、眼病の人が有りもせぬのにチラ／＼空中に花のやうなものを見たとか見ないと云ふのと何の差別があるぞと抑へた、着語に半邊の瞻漢とあるが、此の語は無いが好いと云ふことである、次に半開半合、已に見と云ひ不見と云ふからには設ひ全象も全牛も皆半分だけのことよ、扶籬摸壁して什麼をか作さん、盲人が垣根に寄り添ふたり壁を撫でたりするやうなことをして何の詮がある

然るに雪寶が臂不殊と一、刀兩斷せられたは痛快である、從來作者共に名撰す、昔も今も見とか不見とか自とか他とか色々の名をつけたり、様々な形を想像したりして誠に詰らぬぞと罵しる、其の從來名撰し來つた連中は西天の四七二十八代、唐土の二三代其他に天下の老和尚たる麻の如く粟に似たるほど多くある、イヤ猶ほ自ら少くこと有り、雪寶御自身がぬけて居るぞ、如今黃頭老を見んと要せば、黃頭老と云ふは釋尊のことで、有り難そうに言ふときは金色だの金身だのといふが、禪宗では黃面の老子と云ふことが多い、それを今は黃頭老と云ふのである、即ち其の釋迦其人を見やうと云ふなら、見の不見のと云ふやうな間にウロついて居て見られるものではない、着語に咄それを見て何にする、這の老胡あの天竺の老耄を何のために見んと要するや、膳漢備が脚跟下に在り、ウム盲目奴それ釋迦が貴様の脚下に居るでは無いか、どこを遠方さがして居るぞ、利々壓々半途に在り、こゝで利と云ふは三千大千世界のこと、又は佛土と云ふも同じ意味である、壓といふは多數の意味で、今利々壓々と云へば百千萬億無量無數の世界に百千萬億無量無數の佛陀世尊が居られて、各々其の國土の衆生を濟度せられると云ふやうなことを聞けば、何やら眞の佛土佛身を見たやうに思ふかは知らんが、それは皆報身應身の方便に過ぎぬので、未だ一眞佛の邊に望むれば纔かに半途に在り、前途なほ遼遠であるぞと言ふ、着語に脚跟下蹉過了れり、雪寶は恐ろしい遠方にしてしまふたが、それでは人々各自脚跟下の佛土佛身を見諍るであらうぞと云ふ、更に山僧を以て什麼をか説かしめん、到る處佛土であるものを強いて半途に在りなど云ふ者に對して、モハヤ説いて聞かせる詮もない、其のやうなことでは驢年にも還て曾て夢にも見んや、何時まで経ても眞佛を見るこ

とは出來まいぞと、更に雪寶の上を超駕して本分の地を示すのである、驢年と云ふは十二支のうち無い年である、つまり萬劫末代たつたと云ふ意味に過ぎぬ。

第九十五則 長慶有三毒

垂示有佛處不得住住着頭角生無佛處急走過不走過草深一丈直饒淨裸裸赤灑灑事外無機機外無事未免守株待兔且道總不恁麼作麼生行履試學看

何事にもせよ、これと一つ取りつく處があれば皆本分に背く、迷ひに取りついて居るのが凡夫で、悟りに取りついて居るのが聖者であるが、凡夫だの聖者だのと云ふて居るのが皆本分の沙汰では無い、火が物を焼くのが迷か悟か、水が物を濡らすのが凡夫の仕事か聖者の仕事か、總てに没交渉である無關係である、凡聖迷悟を離れて火は常に物を焼き水は常に物を濡らす、吾人も亦た復た然り、乃ち有佛の處にも住するこ

陥る、然らば無佛の處が好いかと云ふに、其處も亦た急に走過せねばならぬ、佛も法も無いと云ふやうな萬事を掃蕩し盡した處にウロついて居て、走過せざれば草深きこと一丈、其の掃蕩し盡くした邊に於て、更に自分の自己を埋却する所の草漫々裡に落ち入ることになる、然らば一切すべて手のつかない凡聖迷悟悉く遠離した所が佛祖の立ち場かと云ふに、直饒淨躰々赤灘々にして事外に機なく機外に事なきも未だ免れず株を守て兔を待つことを、コ、で事と云ひ機と云ふは、機は心の作用すなはち主觀のこと、事は即ち客觀の都べての境界と見るがよからう、即ち心の外に物が無く境の外に識が無い、謂ゆる物心一如境智冥合、または神人合一生佛不二などと云ふ所が本分の眞際かと云ふに、其のやうなことを思ふたり言ふたりして居るだけハヤ株を守りて兔を待つやうなもの、柳の下に何時でも泥鰌が居ると思ふて居る痴愚と云らぶ所は無いことになるぞ、且く道へ總に不慙ならば何も彼も皆不可んとした日には、サア何うしたものぞ作麼生か行履せん、試みに學す看よ。

本則 學長慶有時云寧說阿羅漢有三毒無一不說如來有二三種語已過老子了不道如來無語猶自顧預○早只是無二三種語之乎者也○說三什 保福云作麼生是如來語道好一抄 ○慶云聾人爭得聞望空啓告 保福云情知爾向第一頭道鼻孔○何止第二頭 慶

云。作麼生是如來語較些子 保福云。喫茶去領○復云還會

長慶慈稜禪師のことは、前の第二十二則にもあつた通り、雪峰和尚の法嗣である、ある時保福と話して居る因みに阿羅漢に三毒ありと説くとも、如來に二種の語ありと説くべからずと云ふた、阿羅漢と云ふは小乗教の修行に依て得る所の四果と云ふて、四種の悟りの最上を阿羅漢果と云ふのである、阿羅漢は梵語であつて、之を漢譯すれば無生と殺賊と應供との三義あると云ふ、無生と云ふは無始劫來生れかはり死かはりして來た謂ゆる生死輪廻の身であつたけれども、此度の悟りに依て生死の原因が盡きてしまふたから、モハヤ再び此世に生れてくると云ふことが無いと云ふ意味、又その殺賊と云ふは謂ゆる八萬四千の煩惱、即ち生死輪廻の原因を賊に譬へて、今は其の都べての賊を殺し盡してしまふたと云ふ意味、又應供と云ふは凡そ出家沙門たる者は自ら織らす自ら耕やさす、一切衆生の供養を受けて生活するのであるが、若しも己れの修行が眞實でなくて徒らに人の供養を受けることになつては、之を虛受信施と申して本統に人の供養に感ずるの資格が無いのみならず、極めて重き罪過を犯すことになるのである、然るに今此の阿羅漢の悟りを得たに就ては、始めて其の如何なる供養にも應ずることが出来る身分になつたと云ふ意味である、其中に於て今は其の殺賊の義に於て、既に總べての煩惱を斷じ盡してしまふたのであるから、貪慾と瞋恚と愚痴との三毒は絶えてあるべきはすが無い、然るに其の絶えてあるべきはすが無い三毒が、阿羅漢の身にあると言ふことは出来るとしても、決して如來に二種の語のあるべきはすが無いと云ふのである、二種

の語といふは、眞實の語とか方便の説とか云ふやうな表裏反對な語がないと云ふのである、然るに其の形式の上から云へば、佛説ほど表裏反對の語の多いものは無い、或時は有と云ひ或時は無と云ひ、時には彌陀如來は十萬億の佛土を隔てたる極樂世界に居ると云ひ、時には阿彌陀佛此を去ること遠からずと説かれたやうな例が多い、然るに其の形式に於て種々無量の差別ある所以のものが、其儘に直に是れ一味平等の眞際に結歸するのであるから、唯一乘法のみありて二も無く亦た三とも無しとも云ひ、龜言も細語も悉く薩婆若海に歸入すとも云へば、俗には狂言綺語も皆是れ讚佛乘の因縁であるとも云ふのである、着語に焦穀は芽を生ぜず、これは阿羅漢を叱つたので羅漢は自分の修行ばかり如何ほどに進んでも、少しも他を慙れみて衆生を濟度するの慈悲心が無い、それを焦穀に譬へたので、焦穀と云ふは米にもせよ麥にもせよ一旦焼きこがしてしまふた種は決して再び芽を生ずると云ふことの無いやうなもので、此の自調獨善、おのれの快樂のみを主として利他の心のかけたものは、決して眞實の佛道を成就することが出来ないと言ふのである、已に是れ釋迦老子を謗し了れり、佛は元來一字不説である、然るに二種の語が無いなどと云ふだけハヤ謗佛の罪であるぞ、長慶は更に如來に語なしとは言はず只是れ二種の語なしと注釋を下した、着語に猶ほ白から願預、其のやうなことを言へば言ふほど自己に背くことになるぞ、早く是れ七穿八穴、言へば言ふほど如來の價値を散々に損害する之乎者也と云ふは、誰も知る通り皆文章の助語であるが、今語なしとは言はずとか二種の語なしとか言ふのが悉く之乎者也、無意味の贅言であるぞと抑へ、更に什麼の第三第四とか説かん、已に二種の語さへ無いに、何で第三第四があらう、然し此の着語の如きは削りすてる

が好いと思ふ、長慶が斯く言ふに對して保福云く作麼生か是れ如來語と反問した、保福の從展禪師のことは、第八則にも第二十三則にもあつた通り、同じく雪峰の弟子であるから、長慶とは法の兄弟である、如來に二種の語も一種の語も無いのは知れ切つたことであるが、一體に如來の語と云ふは、何んなものであらう、果して其のやうなものが有るかナと突つ込んだ、着語に好一抄まことに好い答め處ぢや、什麼と道ふぞ、此の一抄に對して長慶は何と答へるやらと、次の答話を豫想した、慶云く豊人いかでか聞くを得ん、如來には如來の語があるけれども、豊人では聞くことが出来ぬ、これで保福が閉口すれば好いが斯んなことでは到底保福が承知しまい、圓悟は空を望んで啓告す、サスガの長慶少々狼狽したナ、七花八裂、脚下が亂れて來たぞ、ナゼかと云ふに、豊人に聞えないと云ふなら、如來語は耳さへあれば聞えるのが、其のやうな言葉咎めの議論に涉るやうなことでは未だし未だし、保福曰く情に知る備が第二頭に向て道ふことを、第一機には甚だ遠いぞと保福が抑へた、着語に争でか明眼の人を瞞し得ん、中々保福ほどの人を容易に屈伏させることは出来ぬ、遂に長慶は保福の爲めに鼻孔を裂轉されてしまふた、何ぞ止た第二頭のみならんや第三第四に落ちて居るぞ、そこで今度は主客入り代りて慶云く作麼生か是れ如來語と保福に向つて反問した、着語に錯、先刻自分で豊人には聞くことが出来ぬと言ふたでは無いか、それを今度は自分から問ふと云ふは何事ぞと咎める、イヤ却て些子に較れり、ヤハリ問はれて見れば保福が困るであらう、保福云く喫茶去お茶を召しあがれと言ふ、これが即ち如來語の當體であると見える、結局これは思量分別を以て知解すべきことでは無い、着語に領とある、それで能く領解が出来ましたと言ふ復云く還て會すや

と、これは諸人への抄着で、只此の喫茶去と云ふの一言、これが一種の語と云ふものか二種の語と云ふものか審細に参究して見ねばならぬ、若しも果してこれが如来語であるなどと思量分別するものが有つたならば、早く是れ蹉過し了る、到底株を守りて鬼を待つ所の謗りを免かるゝことは出来まい。

頌頭分第一 第二 榜樣 ○ 我王庫中無如是事 ○ 古今 臥龍不鑿止水 同道無

處有月波澄 勞下度 ○ 計什麼 ○ 徒 有處無風浪起 卓擊人 ○ 還覺寒毛稜

禪客稜禪客 莫出頭 ○ 失錢遭罪 三月禹門遭點額 ○ 只得飲氣吞聲

頭たり第一第二、これは妙な句の作りかたで、倒字の格と云ふのであるそうナ、順に言へば第一頭第二頭

と云ふべきを、初めに頭分と言ふて次に第一第二と綴つたのである、句意は若し第一頭だの第二頭だのと云ふ數量の間に如来の語を求めやうとするのが抑も大間違ひであるぞと言はんが爲めに、先づ此一句を提起して其の理由を次句に説明するのである、着語に我が王庫の中には是の如きの事なし王庫と云ふは法王すなはち如来のお手元には一だの二だのと云ふやうな數量に渉るものは無い、謂ゆる不可思議不可商量のものぞと言ふのである、それを今雪竇が頭分第一第二と提起した勢ひは、恰かも物を抛げ打たんとする時に先づ高くさしあげたやうなアンバイで、誠に古今の榜樣であるとほめた、けれども邪に隨ひ惡を逐ふは什麼をか作さん、長慶などが一種だの二種だのと言ふた邪惡を採りあげて、彼れ此れ言ふには及ぶまい、臥龍は止水を鑑みず、眞の如来語は臥龍の如き者で洪波浩渺白浪滔天の處に活動して神通妙用端倪す

べからざるものである、然るに第一頭だの第二頭だのと云ふことは止水の如きもので、牙子キツコが涌くより外に何の能もないやうなものである、何で臥龍が其のやうな處に居らうぞ、それを保福が喫茶去とやつてのけた調子は、殆ど活龍昇天の姿であると稱讚した、着語に同道まさまさに知るサスサスがに雪竇は保福の知音である、無處には月ありて波澄む、無處と云ふは龍の居ない處、即ち長慶の如き止水には月影ばかりで絶えて波瀾の活動が無い、着語に四海孤舟獨ひとりり自みづから行く、誠に海上無事で舟ふねを行なるには安心であると、これは圓悟が止水を、活用するの手段と見える、徒らに卜度ウラヒを勞す、止水裏シスイリに向つて活龍を求めるとは徒勞である什麼の腕うでをか求めん、設たひ有つたからと云ふても、食事の濟んだ後に膳テ碗ワの必要は無いやうなものよと掃蕩した、有處には風なきに浪起る、これは保福の喫茶去と道破した活機輪、即ち活龍の居る處には一點の風は無くとも、自然に白浪滔天の活動があるとの讚歎である、着語に人を嚇殺ウツす、長慶も之には驚いたであらう、嚇ウツの字は玉篇に口を以て人を距マぐ之を嚇と謂ふとあつて、俗にオドスと云ふことである、還て寒毛卓ツツするを覺ふるやと座下へ一抄して何うちや諸人ゾツとする感じがあるか、其の感じも無いやうでは參禪の効はないぞ、拈ニつて云く來れりソレ氣キをつけろ、活龍がソコへ來たぞ、諸人の脚下に蟠ワまつて居るは無いか、稜リョウ禪客稜リョウ禪客と長慶の慧稜エリョウを呼び出した、着語に賊テツを勾カして家を破る、長慶が保福を釣ツらうとして還つて保福に嘯フみつかれたのは、賊を捕へたために身代限りシナシカキをしたやうなものぞ、鬧市裡ナウシに出頭シュツトウすること莫なれ、田舎の僧父は都市の賑やかな處へ出かけないが好い、失錢遭罪シツゼンゾウズイ、金錢を費した上に罪人にされるやうな目に遭ふぞと重ね々長慶の死句に落ちたを抑へて、保福の活句に光彩を添へる、三月禹門ウツツ遭ウツツ點テン額ガク

額に遭ふ。これは第七期の頰で委しく言ふた通りのこと、支那の俗説に、毎年三月三日に鯉が禹門三級の瀑布を登り送れば角が生えて龍になるけれども、若し途中で力が盡き流されて戻されるのを點額と云ふのである、今長慶がせつかく如來語の龍門を透過しやうと思ふて登りかけたのを、保福に突き戻されて點額に遭ふたは誠に氣の毒であつた、着語に己を退いて人に譲るは萬中に一もなし、然しこれは長慶が保福に一步を譲りて、彼れに面をあげさせたのであらう、それならば容易に出来ぬことぞと長慶を冷かす、只氣を飲み聲を呑むことを得たり左に右に閉口頓首の外はあるまいと、徹頭徹尾長慶の死句を抑へて保福の活句を稱揚し盡した、彼の喫茶去、すなはちお茶あがれと云ふ一言に、何ゆゑそれほどの價值があるのであらうぞ、只その思量分別に涉らざる一點に在るのみぞ。

第九十六則 趙州三轉語

本則 舉趙州示衆三轉語

此の一則には、垂示が無くて頰が三首になつて居る所が、全く他の則と違ふて居る、趙州從諗禪師の示衆三轉語と云ふのであるが、其の三轉語の本文は、謂ゆる三首の頰の第一句に置いて在つて此には提示してない、轉語と云ふことは宛轉投合の義で、語句を宛轉し取り合せて學人の機に投合する意味である、其の語が一句なれば一轉語と云ひ、三句なれば三轉語とも云ふのであるが、今此の三轉語とあるのは、最初趙

州が自から三轉として垂示せられたのでは無くて、或時上堂の法語に金佛不渡、鑪、木佛不渡、火、泥佛不渡、水、眞佛內裡坐、菩提涅槃眞如佛性、盡是貼體衣服、亦名煩惱、實際理地、甚麼處着、一心不生、萬法無咎云々と云ふ文句があるのを、雪竇が其の最初の金佛と木佛と泥佛との三句だけ抄出して、三轉語と名けて一首づゝの頰をつけたのである、趙州の意は、却て第四句目の「眞佛は内裡に坐す」と云ふ句と後の「一心生ぜざれば萬法咎なし」と云ふ處に在るのであるけれども、それでは餘りに露骨で、禪語とは思はれないほどであるから、特に此の奇警なる三句の上に於て、謂ゆる眞佛を示し、且つ一心生ぜざれば萬法咎なき眞相を開發せしめたるの手段である、着語に什麼と道ふぞ、元來一語もさしはさむべきで無い事を、三轉の四轉の何を言ふかと抑へ、三段不同、只此の一箇の天真自性を三段不同に分別するは何故ぞと學人に疑着せしめる。

頌 泥佛不渡水 神光照天地 立雪如未休

鑪 何人不雕偽 牌中數箇字 木佛不渡火

方 清風何處無 杖子忽擊着

知^チ辜^コ負^フ我^ガ

似^ニ相^シ似^ニ○模^モ索^{ソク}不^フ着^{シヤク}○有^ユ二^ニ什^シ麼^メ用^ユ
 一^ニ處^ニ○着^{シヤク}天^{テン}蒼^{ソウ}天^{テン}○三^ニ十^ニ年^ニ後^ニ始^シ得^{ドク}

泥佛水を渡らず、これが三轉語の第一句である、それを其儘に提起して頌の第一句とするのは、雪竇頌古の常例である、泥佛と云ふは泥土で作った佛像であるが、都べての土人形みな同じことである、然るに泥と聞けばハヤ水に蕩るであらうと思ひ、佛と聞けば直に凡夫に異なるの觀念が起る、それを凡夫の迷情と謂ふのである、泥佛が水を渡れば蕩けるは誰も知れきつたことである、水を渡つた後に始めて之を知るべきでは無い、着語に鼻孔を浸爛す、既に泥佛と言ふ、早く已に眼も鼻も蕩けてしまふた、且つ趙州が事あたらしく斯のやうなことを言ひ出したのは風なきに浪を起すと云ふものよ、神光天地を照す、其の泥佛が水を渡つて蕩けてしまふて宇宙の本體に結歸し、それから後に始めて一味平等の光明を放つのでは無い、泥佛水を渡らずに、泥佛其儘に神妙不可思議の大光明を放つて宇宙萬象を照して居る、其實は泥は泥その儘に、水は水その儘に、皆神光天地を照して居るのである、但この神光と云ふことに就ては、二祖大師の故事がある、二祖と云へば初祖達磨大師の衣鉢を傳へて、支那禪宗の第二祖となられた勅賜正宗普覺禪師のことである、此人は初めて生れた時に神光ありて室内を照らし、其の光が霄漢を射るとあつて、餘程不思議な瑞相があつたに依て、幼名を神光とつけられたのであつた、其後に出家修行して遂に達磨大師の弟子になり、少林山に於て頻りに參禪辨道して居られたが、大師は只本人に自から開發せしめるのを主とせられるのであるから、一言も教へると云ふことをせず、只面壁坐禪して居るのみである、神光は益々煩悶

して遂に死を決して道を求めるに至つた、時しも後魏の光明帝の太和十年十二月九日の夜のこと、雪は深々とふりつもり、寒氣凛冽骨髄に徹すると云ふ折から、其の雪の中に突立て、追々と雪が腰を埋むるやうになつても頑として動かさない、サスガの達磨大師もこれは本氣になつて道を求めるのであると云ふことを察れられて、始めて聲をかけて、汝は何の求むる所ありて其のやうに雪の中に立つて居るぞと言はれた、神光は涙に咽びつゝ、唯願はくは慈悲甘露門を開きて廣く群品を渡したまへと願ふ、大師は更に勵まして諸佛の妙道は曠劫に精進して、行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ、豈小徳小知、輕心慢心を以てすべけんやと示された、此に於て神光は遂に窈かに携ふる所の利刀を以て左の臂を斷ちて大師の前に置き、身を捨て、法を求むることを表明せられた、そこで大師が更に汝は雪に立つて臂を斷ち、それで何うしやうと云ふのであると問ふ、其時に神光は某甲心未だ安からず、乞ふ師安心せしめたまへと願ふ、大師は心を將ち來れ汝がために安んぜんと言はれたのが、達磨が二祖に法を傳へられた時の問答で、名も此時から神光を慧可と改めに安心し竟ると言はれたのが、達磨が二祖に法を傳へられた時の問答で、名も此時から神光を慧可と改められたのである、此の問答をモツと委しく話せば面白けれども、餘りに長くなるからお預りにして置くが、要する所は心を求むるに不可得と云ふのが、即ち大安心の端的である、語を換えて言へば、佛だの悟だのと云ふて外に向つて求むべきでは無い、人々各自本來具足の本心の靈光を放つことさへ出來れば好いのである、然るに其の心の光は、修行の力を新たに外から得るのでは無い、元來具足のものであつて、最初から寝ても起きてても大光明を放つて居るのであると云ふことを示すために、二祖は達磨大師に遭はな

い前に於て、既にオギヤと始めて産聲をあげた時から神光室内を照らして霄漢に至つたと云ふのでは無いか、即ち泥佛水を渡らず、其儘に十方法界の大光明よと、本來成佛の眞際を示されたのである、圓悟は他の什麼の事にか干からんと言ふ、泥佛なら泥佛で何の不足も無いに、何のために二祖だの達磨だのを引出すのかと抑へた、然し泥佛不渡水を承けて、直に神光照天地と言ふた調子は實に兎を見て鷹を放つての機合で、寸分も隙がないとほめる、サテ第三句以下は前の神光に因みて、雪竇大慈悲の垂誨である、即ち二祖の安心は本來不可得の當體であつて、人人具足には相違ないけれども、雪に立て如し未だ休せずんば何うして其の本具の靈光を自覺して、七通八達自由自在に宇宙を照すことが出来やうぞ、此事は前にも申しあつたと思ふが、永平寺開山承陽大師のお示しにも「此法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も修せざるには現はれず證せざるには得ることなし」とあつて、いくら本具の理性が悟れても實地の修證に現はれないでは、謂ゆる空想と云ふものになつてしまふ、さればとて修證に依り始めて理性が出来るので無いと云ふことは無論である、コ、の様子さへ能く得心がゆけば佛法の理論も事實も思ひ半に過ぐるのである、今彼の二祖も、産聲と共に放つた神光を、更に雪に立ち臂を斷ちて始めて大休歇の地に到つたのである、然るに若し萬一にも只空想に走つて本來具足の自性のみを認め、更に實地の修證が欠けたことであつたならば何人が雕僞せざらん、誰でも口眞似したり、模擬したりして、似せ悟りを振りまはすことは出来るであらうぞと誡められたのである、雕僞は僞はり飾ることであるから、實修眞證のない姿を形容したのである、着語に一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ、これは謂ゆる本分の上から言ふので、二祖が雪に立つて悟り

を聞いたなど云ふことを、一人誤り傳へた者があつたために、老々大々たる雪竇までが斯のやうなことを言ふと抑へた、實に二祖の本分は雪に立つを待つべきでは無い、即ち泥佛水を渡らずである、將錯就錯、大間違の遺傳であるぞ、阿誰か會て僞を見來る、二祖が雪に立ち始めて休したと云ふ實地を、誰ぞ見てきたものがあるかと詰る、寺に入て額を見る、凡そ寺へ往つたならば直に其の門頭の額を見て、ハ、これは三緣山増上寺である、これは萬年山青松寺であると云ふことが分るやうに、讒かに人を見る、直に此れは實修眞證の人である彼れは謂ゆる雕僞の似せ悟りであると云ふことは歴々分明ぞと言ふ、二六時中走上走下是れ什麼ぞ、吾々お互ひ朝な夕な寝たり起たりして居るのは果して是れ眞實か將た雕僞か人々各自に脚下を照願せよと云ふアンパイ、闍黎便ち是、その雕僞の典型は先づ雪竇お前ぢやナ、泥佛は泥佛で何の不足も無いものを、神光天地を照すなど、餘計なことを言ふたものだ、又本分に結歸せしめた、次に第二頌は金佛鑪を渡らず、鑪は鑪であつて、即ち金鐵を鑪解する處である、これも金佛には限らない、銅人でも鐵牛でも鑪に入つて鑪解してしまへば、一味平等の眞際に歸入するに違ひない、然るに今は鑪解を待たず其儘である、着語に眉毛を燎却す、既に金佛と言ふ、早く已に眉目も口舌も爛れ盡して痕迹を留めない、然し今は金佛その儘に天上天下唯我獨尊である、銅人でも鐵牛でも皆同じことよ、人來つて紫胡を訪ふ、衢州紫胡巖(傳燈錄には子胡と書いてある子紫普通と見える)の利蹤禪師の事は前にもあつたが南泉和尚の法嗣で、一疋の猛犬を飼つてある、門前に建札があつて紫胡に一狗あり上は人の頭を取り中は人の腰を取り下は人の脚を取る擬議すれば則ち喪身失命すと書いてある、畢竟一狗とは、人々本具の大智慧光明の

ことである、今雪寶が泥佛のお相手に其の狗を呼び出して来た、此の狗は纔かに擬議に涉ればワンダリと咬みついて、如何なる人でも喪身失命の厄に遭ふと云ふことであるが、此の金佛も亦た其の通り、少しでも擬議に涉れば其の眞際に辜負す、着語に又恁麼にし去るや、これは前にも神光などを引出して泥佛に疵をつけたが、それにも懲りず又かと云ふの意、けれども紫胡の犬が出て来ては只恐くは喪身失命せん、人用心しろよとの注意、牌中數箇の字、すなはち前に申した紫胡巖の門前に建て、ある牌に書いてある文句、寸分も擬議に涉らない處、然しそれは其の文字が讀める人の話で、若し字を識らざる底ならば猫兒も也た話會の處無からん、字を識らない者は牌が讀めぬに依つて、紫胡の狗はサテ置き、猫のことも合點ゆくまい、結局これは言語道斷の處であるから天下の衲僧も皆を挿むことを得ず、誰でも口出しは出来ぬ、此次の只恐くは喪身失命と云ふ着語は、誤つて重出したのであらうと云ふことである、サテ其の擬議に涉らず言詮を絶して觸處光明と云ふ風光は、敢て紫胡の門風に限つたことでは無い、清風何の處にか無からん、森羅萬象其儘に昔も今も清風匝地、何の極まりか有らんである、着語に又恁麼にし去るや、これも衍文であらうと云ふことだ、頭上漫々脚下漫々、天下到處皆清風颯々の眞佛土であるに依つて、彼の紫胡の狗を牽きつれて優々と散歩するに好箇の大公園である、來也、ソレ紫胡の狗が口を開いてきたぞと學人を警醒する、次に第三頌ちや木佛火を渡らず、人々具足箇々圓成の當體であることは全く前と同じことである、着語に燒却し了れり、木佛と言ひ出せばハヤ其時に灰になつてしまふた、而して其の火を渡らざる底の眞意は唯我れ能く知る其れは到底他の窺ひ知るべきでは無い、常に思ふ破竈墮、これも傳燈錄にある故

事で、嵩山に一人の高僧があつた、即ち嵩山慧安國師の弟子であつたが、常に姓氏を人に言ふたことが無い、附近の村落に一つの竈を神に祭つた祠廟があつて、その祭禮の度毎に多くの犠牲を備へて祀るために夥しく殺生をする、少しでもそれを怠れば祟ると云ふので村民が恐ろしがつて居る、それを彼の高僧が怒んで、直ちに其の廟中に入り、拄杖を以て竈を三たび敲き、咄汝本塲土合成、靈何くより來り聖何に従て起り恁麼に物の命を烹殺するやと言ふて、又撃つこと三下した、途端に竈はグワラグワラと碎けてしまふた、須叟たつと、一人の青衣袈冠とある氣高い人が現はれて其の高僧を禮拜し、我は乃ち此の竈の神であります、久しく業報を受けて苦厄に沈んで居りましたのを、今日御濟度にあづかりまして有り難う御座いますと御禮を言ふた、其時に其の高僧が是れ汝が本有の性なり、吾が強いて言ふに非ずと言はれた、其後は此の高僧のことを誰言ふとなく破竈墮和尚と呼ぶやうになつたと云ふことである、此の一段の因縁に於て、其の是れ汝の本性なり吾が強いて言ふに非ずと云ふ一言が、今の木佛火を渡らずに尤も親しいので乃ち雪寶がコ、へ引き來つた所以である、着語に東行西行何か不可か有らん、これは雪寶が常に破竈墮を思ふと言ふたのを咎めたので、破竈墮に限らず、東でも西でも地獄でも極樂でも月でも花でも何を思ふても好いでは無いかと云ふ、然し癩兒件を牽いで、雪寶と破竈墮は好い道づれよ、杖子忽ちに擊着す、即ち破竈墮和尚が廟中の竈を打ち碎いて其の眞性を現はさせた有様、着語に山僧が手裡に在り、其の拄杖ならば圓悟が持つて居るぞと言ふ、敢て圓悟に限つたことでは無い、人々各自に持つて居るのであるが、只其の使ひかた一つである、山僧も用ひざること、在り、拄杖は打つに限つたものでは無い、誰が手裡に無き

此れは注釋的で面白くない、方かたに知る我われに辜こ負ふすることを、雷らい神かみが久ひさしく業ごう報ほうを受けて眞箇しんかんの我われに辜こいてゐたのを、今いまや和尚わうしやうに撃うつせられて初めて今いままで辜こ負ふして居ゐたと云いふことが知しれたと云いふのである、着ちやく語ごに備びに似にて相似しじたり、打うつた拄ちゆ杖じやうと打うたれた鐘かね、誠まことに能よく似にて瓜うりを二ふたつぢや、其そのはずよ、元もと來きた同胞どうぱうであるものを、木き佛ぶつと火かも亦またた其その通とほりのことである、然しかるに若わかし辜こ負ふして居ゐれば、兄弟けいだいは他人たにんの始はじりて摸も索さく不着ちやく、容よう易いに廻まり遭あふことが出来こぬ、尤なほも廻まり遭あふても什しつ麼まの用よう處ちよか有あらんと掃はひ、テモ辜こ負ふしたとは着ちやく天てん蒼そう天てん悲ひいことよ、然しかし實じつ參さん實じつ究きゆう三さん十じゆ年ねんの後には始はじめて得えてん、上あげたり下くだげたり、拈ねん弄りやうして學がく人の工こう夫ふを助たすける。

第九十七則 金剛經輕賤

垂す示し拈ねん一いつ放はう二に未み是ぜ作さく家か舉きよ一いつ明めい三さん猶なほ乖がひ宗しゆ旨し直ちやく得とく天てん地ち陡と變へん四し方ぱう絶けつ唱じやう雷らい奔ほん雷らい馳ち雲うん行かう雨う驟しゆ傾かう湫しゆ倒たう嶽たつ甕さう渴かつ盆ぼん傾かう也や未み提てい得とく一いつ半はん在ざい還えん有ゆう解かい轉てん天てん關かん能のう移い地ち軸じやく底てい麼ま試し舉きよ看かん

一いつを拈ねんじ二にを放はうつても未みだ是ぜれ作さく家かにあらず、一いつと云いふは即すなはち第一だいいち義ぎのことで 把は任にんして拈ねん提ていするにも第一だいいち義ぎ、放はう行かうして自由じゆうに任にんせるにも第一だいいち義ぎ、寢ねても起おきても第二だいに義ぎに下くだらぬと云いふ處ちよ、すなはち孤こ峯ほう頂てい上じやうに立た

つて居ゐたからと云いふても、未みだ其そのれが必かならずしも作さく家かの衲さつ僧そうとは言いはれぬ、サテ又また一いつを擧あげて三さんを明めいらむること、憐れん惻たく俊しゆん爽すわうも、猶なほほ宗しゆ旨しに乖がひく、到底たうてい佛ぶつ法ぽうは憐れん惻たく不ふ憐れん惻たくの間には無ない、また假かり設じやくひ直ちやくに天てん地ち陡と變へんし四し方ぱう絶けつ唱じやうし雷らい奔ほん雷らい馳ちせ雲うん行かう雨う驟しゆを傾かう湫しゆを傾かうし甕さうを渴かつ盆ぼんを傾かうくることを得えるも也や未みだ一いつ半はんを提ていげ得とくざることあり、とこれは如何いかんなる作さく略りやくを以もつてしても、到底たうてい作さく略りやくを以もつて金剛こんかう不ふ壞わいの般はん若じやくを全ぜん提ていすることの出来こるものでは無ないと云いふことを明めいかすので、陡と變へんの陡との字じは頓とんまたは遽じゆの義ぎであるから、設じやくひ天てん地ち間かんの日月じつげつ星辰しゆしん等を遽じゆに轉てん變へんさせる力ちからがあり、四方しぱう絶けつ唱じやうとは、世界せかい中ちゆうの人ひと々にグーの音ねも出いさせないと云いふ働はたらきを以もつて、雷らい奔ほん雷らい馳ち雲うん行かう雨う驟しゆと如何いかんに峻しゆん峻しゆん拔はくの機き録ろくを逞たくましくし、或あるは拂はら拳けん或あるひは棒ぼう喝かくと本ほん分ぶんの正しやう令れいを行いするやうでもあつても、又は傾かう湫しゆ倒たう嶽たつと大河たいがを傾かうけ大だい山さんを倒たうす勢せいひを以もつて甕さうの水みづをこぼし盆ぼんの水みづをふりまくやうに雄ゆう辯べんを振ふつて演えん說じやく法ぽうしても、まだ金剛こんかう般はん若じやくの一いつ半はんをも提てい起きし得えられるものでは無ない、サアこゝに至いたりて還えんて天てん關かんを轉てんずることを解かいし能よく地ち軸じやくを移いす底ていありや、前まへに擧あげたのは何なにほど峻しゆん峻しゆんでもソレは皆みな天てん地ち間かんの事ことであるが、今いまは其そのの根ね本ほんを抜ひいて天てん關かんを轉てんじ地ち軸じやくを移いす、即すなはち都みなべての迷ま悟ごも凡ぼん聖じやうも超ちやう過こし盡じんしたる處ちよに於おて、始はじめて眞しん箇かん金剛こんかう不ふ壞わいの般はん若じやく波は羅ら蜜みつ多たを受う用よう不ふ盡じんならしむるには何なにうしたものぞ、試しみに擧あげ看かんよと經きやう文ぶんを提てい起きせられた。

本ほん則そく擧あげ金剛こんかう經きやう云い若し爲なる人ひと輕けい賤けん故ゆゑ是人こゝろ先せん世じ罪ざい業ごう應お墮だ惡あく道だう以もつて今いま世じ人ひと輕けい賤けん故ゆゑ先せん世じ罪ざい業ごう

生^ニ豆^一則^チ爲^レ消^ス滅^ス重^ニ上^一加^レ霜^又一^一苗^一如^ニ湯^消水^一

金剛經に云く、委しく云へば金剛般若波羅蜜多經と曰ふので、新譯の大般若波羅蜜多經六百卷の中では、第五百七十七卷の能斷金剛分と云ふのであるが、それを是れよりズツと前に舊譯の方では、一卷だけ抄譯して、即ち金剛波羅蜜多經と名けたのである、此の經の全體が専ら真空の理を説いたものである上に、禪宗の第六祖曹溪の慧能大師が、此の經文の中の「應無所住而生其心」と云ふ語に感じて出家得道したと云ふ所から、禪宗に於ては各派とも此の經を日夜讀誦することになり、従つて禪宗繁昌の唐宋時代に於ては、此の經を受持し讀誦すれば、實に不思議の功德靈驗があると云ふやうなことを信仰的に言ひはやしたものと見えて、其の靈驗の事蹟を書きあらはした書物なども澤山ある様子である、さて又例の教家の側に於ては教家相應な解釋のことであらうが、それを今は雪竇が禪宗の見識を以て、頌古の題を其の經文中から抄録し來つたのが即ち本則である、此の文句は昭明太子が此の經を三十二段に分解した中に於ては、其の第十六の能淨業障分と名けられた處にあり、前に善男子善女人此の經を受持し讀誦してとあつて、其次に今の本文の若し人の爲めに輕賤せられんは云々と續くのである、即ち此の金剛經を受持讀誦する人であつたならば、都べての災難禍害を悉く免かるべきはずであるに、若し萬一にも此の經を受持讀誦しながら、世間の人々の爲めに輕しめられたり賤しめられたりするやうなことがあると云ふならばと云ふ意味である、着語に一線道を放てりとある、眞の金剛の正體には輕賤せられるとか尊重せられるとか云ふやうな

二邊にわたるはずは無いものであるが、暫らく利生の方便として一線の間道を開いたのであらう、又且つ何ぞ妨げん、況や作家の納僧ならば輕賤せられたからと云ふて何の差支があらうぞ、元來毀譽褒貶の支配を受くべきものでは無い、是の人先世の罪業ありて應に惡道に墮すべきに、其の輕賤されると云ふものは、先の世に於て輕賤せられるだけの罪を造つて置いた其の業因があつて、遂には無間地獄の苦報を受くべきはずである、着語にイヤハヤ其の罪業ならば驢駝馬、かぎりも無く澤山ある、陷墮し了れり、其のやうなことを言ふて居るのがハヤ惡道に落ちて居るのぞ、今世の人に輕賤せられるを以ての故に、現在目前世人の爲めに輕賤せられるので罪業の差引があつて、譬へば死刑に處せらるべき罪人が、獄則を能く守つたために無罪放免になるやうなものぞと云ふのである、着語に本に酬いて末に及ぼす、因果觀面、打てば響くやうなものである、只忍受することを得たり、如何ほどの毀謗でも侮辱でも平氣で受けるお蔭よと云ふ、先世の罪業則ち爲れ消滅す、これはモハヤ講辯には及ぶまい、着語に什麼の處に向て摸索せん、其の先世の罪業とか云ふものが何處にあつて、其れを何うして探すことが出来るぞと奪ふ、然し穀を種て豆苗を生ぜず茄の木に瓜は生らないやうなもの、因果の道理は味ませない、雪上に霜を加ふ又一重、罪などと言ふさへ餘計なことであるに、更にそれが消滅したなどとは何たる贅言ぞ、然し湯の水を消すが如し執れにしても同じ水の外は無い、一體に此の一則を參究するには、先づ其の金剛經と云ふは何のことであるかと云ふことを確かめて置かねばならぬのである、通常に經文と云へば、無論紙上に文字を書いたものであるが、其の紙上に文字を書いたものを何ほど受持したからと云ふても讀誦したからと云ふても、

何の靈驗功德があらうぞ、其事を評唱の中に領試みに一卷を將て閑處に放在して看よ、他に感應ありや也た無やと語り、更に法眼文益禪師の語を擧げて、佛地を證する者を名けて此の經を持つと爲すと斷案を下してある、さうして見れば、金剛經を受持讀誦するの功德靈驗と云ふことは、即ち佛地を證し阿耨菩提の悟りを得たと云ふことである、然るに其の佛地、即ち如來立脚の地は本より清淨圓滿の處であつて、罪禍だの幸福だの迷だの悟だのと云ふ二邊に涉つたことの絶えて無い處であつて見れば、先世の罪業も現世の消滅もあるべきでは無い、それを且らく經文の上には繞路迂曲を以て言ひあらはしてあるのを、今雪寶は直截に裁斷して一首の頌を作つたのである。

頌明珠在掌

上通霄漢下徹黃泉○道行一

有功者賞

忽若無功時作麼生賞

胡漢不來

○內外絕消息

全無伎倆

○打破漆桶來相見

伎倆既無

○去

波旬失途

○此在言前

瞿曇瞿曇

○不識我也無復

云勘破了也

○已在一條痕

明珠掌に在りと此經を明珠に譬へて頌し出した、これは法華經の安樂行品にある譬喩で、其の本據を擧ぐれば「譬へば強力の轉輪聖王ありて諸國を降伏するに、王は兵衆の戰功ある者を見て、功に隨て賞賜す、唯瞿曇中の明珠のみは以て之を與へず、諸の兵衆の大功ある者を見て今これを與ふるが如し」とあるので、

佛法の修行をする者も其の通り、小乗は小乗だけの功があり、權教は權教だけの功があり、功七級とか動八等とか云ふ所から、追々と功二級もあり動一等もあらうけれども、大動位功一級と云ふ所の譬中の明珠、すなはち金剛の正體は、謂ゆる唯佛與佛の以心傳心に止まり、決して動一等の人でも功二級の人でも窺ひ知る所ではない、然るに今われ雪寶は已に其の明珠、即ち金剛の正體を掌中に握つて居るぞと言ふのである、着語に上は霄漢に通し下は黃泉に徹す、其の明珠の光は無限の空間に充ち塞がつて居ると云ふ、吾も人も皆この光明裏に起臥して居るのであるが、何故に其の明珠を手に握らぬのであらうぞ、什麼と道ふぞ雪寶が其の明珠を掌に在るとか脚に在るとか云ふは惟しいぞと咎め、四邊諸訛八面玲瓏どもかしこも明珠ならぬ所は無いはずぞと指註する、功ある者は賞す、若し能く佛地を證する者があれば此の金剛不壞の明珠を賞典に遣はずぞ、此の明珠は胡人來れば胡人現じ漢人來れば漢人現す、森羅萬象歷々分明に一切諸法相照さすと云ふことは無い、着語に多少分明イヤ其の論功行賞の詮衡には決して誤りが無い、乃ち他に隨ひ去る功さへあれば必ず隨ひ來るのである、然し忽ち若し功なき時作麼生か賞せん、其功の見えるものは賞することも出來やうが、無功の大功は見えないぞ、胡漢來らざれば全く伎倆なし、然るに胡人も漢人も花も月も迷ひも悟りも絶えて、其の形象を見ざる本分の地に至りては、花來れば花を現じ月來れば月を現するの伎倆に用が無いに依て、亦た其の功勳の論量すべきも無い、即ち眞の金剛經の上には、先世の罪業もなければ現在の消滅も無い、それが即ち本統に能く金剛經を受持し讀誦すると云ふものである、着語に内外消息を絶す、内に照すべきの智もなければ外に照される境も無い、謂ゆる光境俱に忘じて亦た是れ

何物ぞである、と云ふも尙ほ些子に較れり、未だ本分の全提とは言へぬ、展轉して没交渉、色々とお話が變つてきて、到頭何の事とも分らなくなつた、什麼の處に向つてか探索せん、サア斯うなつた時には明珠の體用を何う参究したものと學人への一拶、漆桶を打破し來れ相見せん、都ての思量分別言句伎倆を棄切てしまはなければ、決して此の全く伎倆なき底の明珠を見ることは許さぬ、伎倆既に無し波旬途を失す、波旬と云ふは梵語であつて、漢譯すれば惡魔と云ふことになるさうな、今は都ての煩惱妄想を代表させたので、吾に伎倆、すなはち思想も分別も智解も作略もありさへせんければ、決して都ての煩惱惱苦に支配されると云ふことは無い、着語に休し去り歇し去る都ての思量分別を棄て切つてしまふた姿、阿誰か恁麼に道ふ、既に伎倆を絶したとすれば其のやうなことを言ふて居るわけも無いがと雪竇にからかひ、這の外道魔王蹤跡を尋ぬるに見えず、イヤ其の波旬が途を失して行衛が知れなくなつた、外道と云ひ魔王と云ふも皆途中の話で、本分の家郷には決して其やうな痕迹も無い、そこで雪竇は更に一段と地歩を進めて嬰疊と釋迦老人を喚び出した、波旬はサテ置き、佛と雖もこゝに至りては途を失するであらう、元來見るべきものでないから波旬に窺はれないばかりでは無い、佛にも窺がはれないのである、語をかへて更に通俗に云へば、煩惱が無いばかりで無く菩提も亦た蹤跡を絶して居る、そこを圓悟は佛眼に窺れども見えずと言ふ、又咄と云ふは、其の喚び出した嬰疊を叱りつけたのである、雪竇は嬰疊に向つて我を識るや也た無しや、何うで御座る、此の明珠を掌中に握つて居る雪竇を御存知であるかナと言ふ、久しく別れて居た兄と弟が曾て親から分けてもらふて置た割符を合せて見るやうなものである、着語に咄

と雪竇の自點胸を叱りつけ、勘破了也と雪竇の先をこした、雪竇は我を識るやと言ふた上に、更に復云く勘破了也と佛も魔も悉く勘破し盡し、各地歩を占めて十方法界を睥睨したアンバイ、着語に一棒一條の痕この勘破は骨に徹した、恰かも打つた痕が鮮かに肌へ附いたやうである、然し已に言前に在りソソなこと、は言はぬ先に判り切つたことよと、其の語脈を截りすてしまふた。

第九十八則 天平和尙兩錯

垂示 一夏嘮嘮打葛藤。幾乎絆倒五湖僧。金剛寶劍當頭截。始覺從來百不能。且道作麼生。是金剛寶劍。貶上眉毛。試請露鋒銚看。

此の垂示は、後の第百則の垂示と入れ違へてあると云ふことである、なぜかと云ふに、此の垂示は他の垂示とは全く體裁が違ふて、碧巖錄一百則の結局を告げられるための偈一首を提示せられたのであり、且つ其の垂示の意味が全く第百則の本則に適當して居るからである、そのみならず後の第百則の垂示は、亦た其れと反對に、全く此の第九十八則の本則に適當して居るのである、何うも此の碧巖錄といふものは、長い間多くの人に寫し傳へられた爲めに、色々の錯簡やら誤脱やら少くないので、着語の如きは殊に甚し

く思はれるけれども、今度の講話は評唱にまでは及びかねた爲めに、圓悟禪師の本則および頌に對する見かたを、着語に依て多少窺ふより外に致しかたが無いに依て、亂雜にも拘はらず着語を成るだけ助けて講話したのであつたが、斯ういふ事情であるから其處を能く含んで置いて讀んでもらひたいのである、サテ一夏嘯々として葛藤を打す、それが即ち巖巖百則提唱の終結を告げるために、圓悟の唱へられた七言四句の偈の第一句で、十蒸の韻を踏んである、一夏といふは、今さら申すまでも無いが、天竺の雨期安居の制度が支那へも日本へも傳はつて、毎年四月十五日から七月十五日までの九十日間、僧衆一同に禁足靜養して専ら辨道修行をするのが規則になつてゐる、それを或は結制とも云へば安居とも云ひ、又曹洞宗などでは江湖會とも云ひ、此の九十日間のことを一夏と云ひ又法歲とも云ふて、僧侶たる身の年齢は此の夏安居を経た數を以て算へるのであるから、法臘とか僧臘とか云ふ言葉も起つてくるので、世間の臘月は十二月であるけれども、法歲の臘末は七月十五日である、乃ち圓悟は或る年の一夏九十日間、此の雪竇頌古を提唱して、門下の衆僧の功夫を扶け導びかれたことであつたが、毎日嘯々として饒舌して、色々の葛藤、すなはち文字言句を弄し、幾んど絆倒す五湖の僧、四海のうち五湖のほとりから集り來つて居る雲水の僧だちに、絆倒の迷惑を懸けたことであつたと、平生の語氣には似ない誠に卑下した謝辭をのべられたのである、サテ今日いよいよ終結といふ時に臨んで、金剛寶劍とも云ふべき本分の知見を以て、從前のすべての葛藤を當頭に截りすて、見れば、始て覺ゆ從來百不能なりしことを、イヤもう都べての文字言句皆悉く何の用にも立たぬことよと、益々謙遜せられるやうに言ふて、本分の地には都べての言句伎倆を許さぬ様子

を示されたのである、且く道へ、ソレはさうとして置き、作麼生か其の金剛寶劍と云ふは果して如何なるものであらうぞ、眉毛を眨上して試みに請ふ鋒銳を露はす看よ、と即ち第百則の巴陵吹毛劍の公案を拈提せられたのである、眨の字は音サツで、眼を活動させる意味であるさうな。

本則 舉天平和尚行脚時參西院常云莫道會佛法覓箇

舉話人也無則是爭奈靈龜曳尾一日西院遙見召云從漪索了也平

舉頭重公案西院云錯也須是鐵裏敲過始得○劈腹劍心○平行三兩步

已是半前落後○西院又云錯案殊不知似水入水如金博金平近前落處○展

轉摸索西院云適來這兩錯是西院錯是上座錯是前箭箭輕平云

從漪錯磨錯認錯打殺千箇萬箇有甚麼罪西院云錯雪上加霜平休去○果然不知

落處○軒知個鼻西院云且在這裏過夏待共上座商量這兩錯

西院尋常春硬似鐵○當時何不趁將出去○平當時便行也似納僧○似後住院謂衆云貧兒思

也須是 我當初行脚時被業風吹到思明長老處連下兩錯

更留我過夏待共我商量我不道恁麼時錯我發足向南
 方去時早知道錯了也

爭奈道兩錯何○千錯萬錯爭
 奈沒交涉○轉見即當愁殺人

天平和尚と云ふは相州天平山の從濟と曰ふて、青原下の法系に屬す地藏瑠璃禪師の曾孫にあたり、達磨大師十六世の人である、行脚の時に西院に參す、西院の思明禪師は、臨濟大師の法嗣たる寶壽延沼の弟子であるから、南嶽下に於ける達磨大師十三世の法孫である、然るに此の天平從濟と云ふ人は、餘程自點胸な我慢の強い質で、自分は立派な悟りが開けたつもりであるから、従つて大方の宗匠だちをも輕蔑して居る、乃ち常に云ふ道ふこと莫れ佛法を會すと、箇の學話の人を覺むるも也た無し、今の世の中に佛法を會した者は絶えて無い、古則公案を舉示することを知つた者さへ一人も無いと云ふ大氣焰である、斯ういふ所で單に話とばかり云ふのは、即ち古則公案のことであつて、公案の參究ばかり主にして居る者のことを看話禪とも云ふのである、着語に漏逗少なからず、イヤハヤ疵だらけだナ、這の漢是は則ち是なれども靈龜尾を曳くを争奈せん、時弊を罵しるは好いけれども、さう云ふ自分が未だ垢が抜けない、靈龜曳尾と云ふことは、前に已に辨じてあつたと思ふ、つまり俗に頭かくして尻かくさすと云ふ意味である、一日兩院遙かに見て召て云く從濟、從濟は即ち天平の名である、着語に鑊鈎搭索し了れり、モウこれで天平の兜は西院の熊手に引かゝつてしまふた、平頭を擧ぐ、作家の漢ならば此で納僧の機鋒をあらはさなければならぬのであるに、喚びつけられて平々凡々に頭を擧げるやうではモウ可いぬ、着語に着、それ見る熊手に掛

つてしまふたらうがナ、兩重の公案、平生の廣言が一重の失策で、今の擧頭が再度の失策ぢや、西院云く錯、オツと違つたぞ、此の一言で天平の胸板をグサリと突き透してしまふた、但この錯と云ふことを文字につきまといふては將錯就錯である、喝とも咄とも、呵々大笑とも三十棒とも參究して見なければならぬのである、そこで着語に也た須く是れ鑪裡に鍛過して始て得べし、西院の此の勘破は尋常容易に出来ることでは無い、實に百煉の功を積んだ上の機鋒である、劈復刺心、西院老漢深切の蘊底を盡しての提携ぞ、三要印開して失點窄し未だ擬議を容れずして主賓分る、これは臨濟大師が或時の上堂に、一人の僧が如何なるか是れ第一句と問ふたのに答へられた語で、臨濟録には朱點側つとある、語意は宗乘の三玄三要を印判に譬へて、凡そ印判と云ふものは朱肉をつけて押しさへすれば、擬議に涉らず直に誰にもハツきりと判るものぞと云ふことで、今は西院の錯と云ふのが、實に能く臨濟大師の宗風を現はして居るとほめたのである、然るに天平は未だ悟れない平行くこと三兩歩と、活機輪を轉するやうな貌を見せた、着語に已に是れ半前落後で、ドチラへつかぬ曖昧の舉動であるぞ、這の漢泥裏に土塊を洗ふ、色々なことをすればするほどマヅくなる、西院又云く錯、着語に益々劈腹刺心ぞと云ひ、又人皆喚で兩重公案と作す殊に知らず水を水に入らぬ、只是れ一等の錯で、水を水に入れて前後の水を差別することの出来ないやうなものぞ、平近前す、此の和尙未だ目が覺めぬ、ヅカ／＼と西院の前へ進んで往つた、着語に依然として落處を知らず、何處までも錯と言はれた底意が解らぬ、展轉して摸索不着、何うやつて見ても捉まへられぬ、西院曰く遮來の這

の○兩○錯○是○れ○西○院○の○錯○か○是○れ○上○座○の○錯○か○と、深切に深切を盡して提携せられたけれども、不啻の天平まだ悟れない、着語に前箭は軽く後箭は深し、此の一擲で天平は愈々首を打ち落されてしまふた、平云く從溺が錯なり、イヤそれは拙者の錯で御座ると、何處までも自分免許の悟りを振り廻はすつもりであるが、それが皆眞箇のもので無いから致し方がない、圓悟は錯で驢鞍橋を認めて喚て爺の下領と作す、これほどの間違ひは無からう、驢馬の鞍の鞍骨は、人間の骸骨の領のやうな形をして居る、それを見てコレが我が父の下領である云ふたも同様のことよ、恁麼の拈僧に似たらば千萬箇を打殺するも什麼の罪かあらん、このやうな贗坊主は打ち殺してしまへと罵る、西院云く錯、何處までも普天率土、只是れ一枚の錯である、着語に雪上に霜を加ふ、幾たび言ふても何の用にも立たぬぞと抑へる、平休し去る、天平到頭西院の錯の落處を知らずに退いてしまふた、着語に錯て定盤星を認む、畢竟天平は已れに一つの僞見識があつて其れを杓子定規にして居るから、此で空しく休し去るやうなことをするのである、果然として落處を知らず、到頭合點がゆかぬのぢや、軒かに知る備が鼻孔別人の手裡に在り、結局西院の捕虜になつてしまふたのであるから、殺さうとも活さうとも西院の自由である、然るに西院の慈悲の甚だ深き西院云く且く這裡に在て夏を過して上座と共に這の兩錯を商量せんを待て、マア寛くりと此處で一夏安居して、此の兩錯の眞意を參究するが好いぞと涙のこぼれるほど有難いお諭してある、着語に西院尋常香梁の硬きこと鐵の如くであるに、當時何ぞ趕ひ將ち出し去らざる、打ち擲つて逐ひ出せば好かつたにと云ふ、然るにこれほど西院の慈悲の深いにも感じがなくて平常時便ち行く、何の西院がなどと云ふやうな我慢を逞しくして西院

の座下を去つてしまふた、着語に也た納僧に似たり、其の便ち行くと云ふ姿が他人の後には附かないと云ふやうにも見えるけれども、似たることは則ち似たり是なることは則ち未だ是ならず、雪と鹽とのやうなものよ、後に住院してと云ふは、即ち天平山の山主になつた後に、衆に謂つて云く、天平が自分の門下に向つて昔話をしはじめた、着語に貧兒舊債を思ふ、貧乏人が昔の借金を思ひ出したやうなアンバイであるが、也た須く是れ點過すべし、審かに彼の兩錯を點檢して見るが好いぞと擲掄する、サテ其の天平の後悔話は我當初行脚の時に業風に吹かれて思明長老の處に到りて連りに兩錯を下さる更に我を留めて夏を過ぐし我と共に商量せんを待たしむ、我恁麼の時の錯と道はず、我發足して南方に向て去りし時に早く知る錯と道ひ了れることを、此の話の大意を俗譯して見れば、私が曾て西院に兩度まで錯と言はれた時に、これは誰の錯ぞと西院が言ふたに依つて、それは私の錯であると答へてあつたけれども、あれは其時に始めての錯では無い、私が最初行脚に出掛ける時にモウ已に錯と言ひ了つてあつたので、我が錯は即ち蓋天蓋地の錯であるぞと云ふアンバイに、門下の衆僧に對して昔の失策を失策とも思はず、相變らず自點胸をやつて居たのである、結局此の一則は徹頭徹尾失策を續けながら、自から失策とも知らずに似而非悟を振りまはして居る者の誠めとして、雪齋がことさらに拈起して示されたものと見える、着語に這の兩錯を爭奈何せん、早く自ら知つたと云ふ自分の錯は且らく置いて、西院に兩度言はれた錯は何うであるぞ、今以て合點がゆかぬのであらうがナと抑へ、兩錯のみか千錯萬錯も沒交渉を爭奈せん、天平自分免許の錯は設ひ千萬ありとも西院の兩錯とは千萬里の隔たりであらうぞ、轉た見る郎當をして人を愁殺せしむることを、餘

りに氣の毒で見て居れぬぞと排斥し盡してしまふた。

頌禪家流 漆桶一 **愛輕薄** 也。有。些。子。〇。呵。佛。祖。如。麻。似。栗。 **滿肚參** 來用不着 用處。〇。有。

行脚 未。行。脚。已。前。錯。了。也。〇。踏。破。錯。錯。錯。是。什。麼。〇。雪。寶。已。西。院。清。風。頓。鎖。鑰。

錯 猶。較。些。子。〇。雪。寶。錯。何。似。天。平。錯。〇。且。道。畢。竟。如。何。〇。打。云。錯。

復云 忽有箇衲僧出云

禪家流、輕薄を愛すと、これは三言二句である、都べて何事でも誠實でなければならぬが、別して佛祖の大道を輕々薄々に皮相觀で往けるものには無い、然るに唐宋の盛時に於ても已に此の彈呵があるので、禪家者流に限つたことではあるまいけれども、今は別して禪僧に似而非悟を振りまはして居るのが多いとの歎息である、着語に漆桶一狀に領過す、イヤ誰も彼も同じやうな漆桶坊主ばかりぞ、一狀領過と云ふは、衆人同罪と云ふ意味、也た些子あり其れが中々幾分かの見識ありそうに見える、佛を呵し祖を罵る麻の如く粟に似たり、大層な見識で釋迦も達磨も奴僕のやうに言ふて居るのが多いと、當時の虚偽の禪弊を誠められたのであるが、今日はハヤ其の弊さへに見聞することが稀れになつた、滿肚參に來りて用不着、滿肚と云ふは俗に腹一杯と云ふこと、四方に行脚遊歴して飽くまで參禪し來つても皆輕薄で誠實が無いから、サア此處ぞと云ふ場合に臨んで何の用にも立たない、着語は只宜く用處あるべし、何處ぞで何かの用に立たなくては參じ來つた効が無いでは無いか、けれども、方木は圓孔に返せず、最初から輕薄な者は、到底誠實の用には立たぬ、然し闍黎も他と同參、雪寶お前も其のお同伴かなとからかふ、悲しむに堪えたり笑ふに堪えたり天平老と、愈々天平の批評に取掛つた、彼の西院があれば深切に提携してくれたものを、何處までも我漫の角が折れないで、失策に失策を重ねた有様は、氣の毒でもあれば可笑もある、着語に天下の衲僧も跳不出、これは天平に限つたことでは無い、此の悲笑を免るゝ者は恐らくは少ないであらう、旁人の眉を擡むるを怕れず、他人に厭やがられるのも知らずに、自點胸を逞くして居る而憎くさよ、也た人の鈍悶を得たり、只眉を擡むるばかりでは無い、餘りの馬鹿くしさに、人が鈍悶するぞと云ふ、鈍悶と云ふは、何となく心が悶えると云ふほどの意味と見える、人に其の通り笑はれたり悲しまれたりするをも知らずに、却て謂ふ當初悔らくは行脚したるをと、これは天平が最切發足の時に早く自ら錯と道ひ了つたのである、行脚の後に、西院などから錯を聞いたのでは無いなどと馬鹿を言ふて居たことを言ふのである、着語に未だ行脚せざる已前に錯し了れりと天平の意を擧げ、草鞋を踏破して何の用をか作すに堪えん、別に行脚などをする必要はなかつたと益々揶揄する、一筆に勾下す、これは雪寶が只此の一句に天平を彈呵し盡した景況、そこで雪寶は別に錯々と言ひ出した、これは聲ほがらかに錯なるかな錯なるかなと謡ひ出したアンパイ、圓悟は評唱の中に道の兩錯は擊石火の如く閃電光に似たり、これ他の向上の人の行履の處なり、劍に仗て人を斬るに直に人の咽喉を取つて命根まさに斷するが如しと評してある、其の雪

ら、サア此處ぞと云ふ場合に臨んで何の用にも立たない、着語は只宜く用處あるべし、何處ぞで何かの用に立たなくては參じ來つた効が無いでは無いか、けれども、方木は圓孔に返せず、最初から輕薄な者は、到底誠實の用には立たぬ、然し闍黎も他と同參、雪寶お前も其のお同伴かなとからかふ、悲しむに堪えたり笑ふに堪えたり天平老と、愈々天平の批評に取掛つた、彼の西院があれば深切に提携してくれたものを、何處までも我漫の角が折れないで、失策に失策を重ねた有様は、氣の毒でもあれば可笑もある、着語に天下の衲僧も跳不出、これは天平に限つたことでは無い、此の悲笑を免るゝ者は恐らくは少ないであらう、旁人の眉を擡むるを怕れず、他人に厭やがられるのも知らずに、自點胸を逞くして居る而憎くさよ、也た人の鈍悶を得たり、只眉を擡むるばかりでは無い、餘りの馬鹿くしさに、人が鈍悶するぞと云ふ、鈍悶と云ふは、何となく心が悶えると云ふほどの意味と見える、人に其の通り笑はれたり悲しまれたりするをも知らずに、却て謂ふ當初悔らくは行脚したるをと、これは天平が最切發足の時に早く自ら錯と道ひ了つたのである、行脚の後に、西院などから錯を聞いたのでは無いなどと馬鹿を言ふて居たことを言ふのである、着語に未だ行脚せざる已前に錯し了れりと天平の意を擧げ、草鞋を踏破して何の用をか作すに堪えん、別に行脚などをする必要はなかつたと益々揶揄する、一筆に勾下す、これは雪寶が只此の一句に天平を彈呵し盡した景況、そこで雪寶は別に錯々と言ひ出した、これは聲ほがらかに錯なるかな錯なるかなと謡ひ出したアンパイ、圓悟は評唱の中に道の兩錯は擊石火の如く閃電光に似たり、これ他の向上の人の行履の處なり、劍に仗て人を斬るに直に人の咽喉を取つて命根まさに斷するが如しと評してある、其の雪

寶の機鋒亦た別段であることを知らねばならぬ、着語に什麼と道ふぞ、餘り聞きなれない變つた曲調であるぞと聞き咎め、更に雪竇已に錯て名言を下し了れり、元來言詮不及の境に向つて、錯々でも咄々でも苟くも言句を容れると云ふは、ハヤ間違つたことよと抑へる、西院の清風も頓に銷鑠す、西院が會て兩錯を下したは、如何にも清風颯々の佳境であるけれども、更に今この雪竇が錯々と謠ひ出したので、彼の颯々たる西院の清風も忽ちに吹き止んでしまふたぞと、雪竇大層な大氣焔である、何もこれが雪竇の自慢といふわけでは無い、雪竇が彼の西院の兩錯を會して自分のものにして、更に活動させた時には、十方法界の一切諸法、皆悉くこの錯々となり盡して、頓に銷鑠せぬものは無いのである、楞嚴經には「一人ありて眞を發して源に歸すれば十方虚空も銷殞す」とあるも此の意味である、着語に西院什麼の處にか在る、西院は既に銷鑠して跡を絶つてしまふから行衛が知れない、何似生、その鎖鑠した有様は何んなであらうかな、道ふこと莫れ西院のみと三世の諸佛も天下の老和尚も此の錯々に遭ふては亦た須く倒退三千して始て得べし、此に於て會得せば偏に許す天下に横行することを、この雪竇の錯々が解れば宇宙萬象みな手の中ぢや、復た云く忽ち簡の衲僧あり出で、錯と云はん、これは雪竇の自問自答で、先づ其の自問に、若しも此へ作家の衲僧が出て来て、我が錯々と謠ふのを忽ちに奪ひ、更に我に向つて錯と言ふものがあつたならば何うしたものぞと云ふのである、圓悟は一狀に領過せん、それは同罪であるから同刑に處するぞと言ふ、又猶ほ些子に較れり、其の錯では未だ十分とは言はれまい、そこで雪竇自ら之に答へて云く雪竇の錯は天平の錯に何似、是れ同か是れ別かと參究を要する所である、圓悟は評唱中に更に參ぜよ三十年と言はれて

ある、吾人豈猛省せざるべけんや、着語に西院又出世す、雪竇の今の口つきは、西院の思明禪師が再來したかと思はれるやうである、歎に據て案を結す、先づこれで裁判宣告が済んだ、總に沒交渉、結局何とも手がかぬ、且く道へ畢竟如何と座下へ一撈して、打て云く錯と、コ、で圓悟の一錯に雪竇も亦た銷鑠し、一切掃蕩し盡して始めて天下泰平ぢや。

第九十九則 肅宗十身調御

垂示 龍吟霧起 虎嘯風生 出世宗猷 金玉相振 通方作略 箭鋒相拄 徧界不藏 遠近齊彰 古今明辨 且道是什麼人 境界試舉看

龍吟すれば霧起り虎嘯けば風生すと云ふは、同氣相求め同聲相應する姿、即ち本則の肅宗皇帝と忠國師との機々投合の様子を言ふたのである、出世の宗猷とは佛法と云ふこと、即ち忠國師の唱へられる所の宗乘は金石相ひ振ふ、如何にも陽春白雪の曲を聞くやうである、而も今肅宗皇帝を接せられる通方の作略は其の間に髪を容るゝ隙も無い様子、恰かも彼の弓矢の名人と名人が互ひに放つた箭鋒と箭鋒が途中でカチリと相拄ふたと云やうなアンバイ、此の活機輪は淨躰々赤灑々て徧界藏さず、十方法界に其の光を輝かして

居るから、遠近齊しく彰はれて何處に居ても能く見える、又古今明かに辨じて何時になつても判らぬと云ふことは無い、且く道へと前を承けて是れ什麼人の境界ぞ其の證據を試みに擧す看よと本則を提起する。

本則 擧肅宗皇帝問忠國師如何是十身調御

作家君主大唐天子也合知

冠脚下無憂履 國師云檀越踏毗盧頂上行須那把手共 帝云寡

人不會付 帝當時 便喝更用會作 什麼 國師云莫認自己清淨法身

雖三然葛藤却有三出身處一醉後郎當愁殺人一

肅宗帝と忠國師とのことは、前の第十八則に大略申して置いたことであつたが、肅宗は唐の玄宗皇帝の子で、代宗の父である、國師の名は慧忠と申して、六祖大師の法を嗣がれ、肅宗代宗二代の帝師になられ、古今未曾有の優待を受けられた大徳である、肅宗帝は未だ皇太子で居られた頃から國師に參禪せられたので、モウ此頃には自分が佛である、自分の外に佛はないと云ふほどの程度に見識を据えて居られたかと思はれる、或時國師に問はれた如何なるか是れ十身調御、調御と云ふは佛陀の十號と申して、徳號が十種ある中の一つである、即ちこれは佛が一切衆生を自由自在に濟度なされるのを、調馬師が馬を調御するのに譬へたのであるが、今は單に佛と云ふも如來と云ふも同じことと見て宜しい、さて其の如來の身には大體に於て法身と報身と應身との三身と云ふことも謂ひ、又は報身を更に自受用身と他受用身との二つに分け

て謂ふこともある、自受用身は本より佛の自受用であるから、他の窺ひ得らるべき所では無いが、他受用と云ふは、元來他の衆生を濟度するために現はす所の身であるに依て、只一合相の姿では千差萬別の機根に應ずるわけには往かぬから、乃ち十身と云ふ名も起るので、更に應化の身に至りては千萬無量の身相をも現することになるのである、偕て此の十身といふことは華嚴經に説かれたのが本據であつて、正覺佛と願佛と業報佛と住持佛と化佛と法界佛と心佛と三昧佛と性佛と如意佛との十である、斯ういふことは教家に於ては中々むづかしい議論のあることださうだが、今この碧巖の上では無雜作に如何なるか是れ佛と問ふたも同様に見て置いてよいのである、着語に作家の君、いかにも御見識のほど感服の次第ぞと稱贊し、又大唐の天子也、た合に恁麼なることを知るべし、四百餘州の天子たるからには其の位な見識が無ければならぬはずぢや、頭上の捲輪冠脚下、無憂履、左右の輪を巻きあげた冠を載き、一生不破穿の無憂履を踏むと云ふのは、即ち天子の正裝を謂ふので、其の天子の正裝そのまゝに毘盧舍那如來の御姿とありがたく拜まれるぞと冷かす、國師云、檀越よ毘盧の頂上を踏で行きたまへ陛下とは言はず檀那と喚んで、御自分が十身調御の佛陀になつたと思し召すのであらうが、其のやうな緩いことでは可けませんぞ、ナゼに其の十身の本體たる毘盧舍那如來の頂上を踏んで、モウ一段其上を立ち場になさらぬぞ、謂ゆる百尺竿頭さらに一步を進めたされと言ふのである、百尺竿頭さらに一步を進めた處と云ふは如何なる處であらうぞ、其處を立ち場として活動せんければならぬのである、檀越と云ひ又は檀那と云ふ、皆梵語の陀那鉢底の訛略で、漢譯すれば施主の意味になる、唐朝以前に於ては出家の僧たる者が、帝王に對して自から臣と稱した

ことが無いと同時に、亦た帝王を陛下とも言はない、宋朝以後彼の僧史略を書いた贊寧と云ふ人などの頃から、臣僧と言ひ始めて、契嵩などは殊に目立つほど臣僧臣僧と言ふて居る、日本でも弘法大師が少僧都を辭する表などにも、貧道空海と稱して臣僧とは言はなかつた、毘盧は毘盧舍那といふ梵語を略したので、漢譯すれば遍一切處、すなはち無限の空間に充滿して居ると云ふ意味、謂ゆる宇宙平等の本體に尊號を奉つた時に、之を摩訶毘盧舍那如來と謂ふのである、今は其の如來とか佛とか云ふ處に腰を掛けてはならぬぞと云ふのが國師の垂誨である、着語に須彌那畔に手を把て共に行く、國師が帝を導いて、更に向上せしむる様子の形容、猶ほ這箇の在るあり、毘盧頂上を通りぬけた處に猶ほ那一物がある、其處まで帝を引きあげて往くのぢや、帝云く寡人不會、帝もサスガに國師に對しては朕と言はないで寡人と言ふた、其の毘盧頂上を踏み越えて行くべき、其の歩きやうが未だ能く合點がゆかぬと言ふ、着語に何ぞ領話せざる解りそうなるものであるにナと云ふたやうなアンバイ、可惜許、これが解らんで残念なわけだ、好彩分付せず、好彩といふは精細といふも同じことで、コ、では委しい意味である、即ち國師がモツと委しく言はれないでは會せられぬのかナと云ふたのと見える、帝當時便ち喝すべかりしを、若し帝が本分の活機があつたならば、コ、で大喝一聲、國師を喝破すべきであつたに、更に會を用ひて什麼か作さん、毘盧頂上を踏んで行くと云ふ場合に於て、會の不會のと云ふて居るべき所では無い、國師云く自己清淨法身と認むること莫れ、これが即ち毘盧頂上の踏み越えやうを指南せられたのである、清淨法身と云ふは即ち毘盧舍那如來のことであるが、肅宗は自分が即ち其の清淨法身である、我の外に毘盧舍那如來は無いと云ふ見識で

あるが、國師は更に其の自身即佛と思ふのがハヤ大間違ひである、自分に何の不足があつて、更に毘盧舍那だの清淨法身だのと餘計な名をつけるのであるぞ、そのやうなことを思ふて居るのが、業く己に自己の外に佛といふものを認め法身と云ふものを認めて居るので、未だ眞實絶対の本分には契はないのである、一體に此の本則の問答は、傳燈錄の國師の章に出て居るのは少々相違があるのであるけれども、雪竇はこれを斯う綴つて頌古の題にしたのであるから、本録に立戻つて彼れ此れ云ふには及ばぬのである、着語に然も葛藤なりと雖も却て出身の處あり、此の國師の答は餘りに老婆心切に過ぐるやうであるけれども、サスガは國師であるから其間に自づから出身の要路がありて、凜然犯すべからざるの機鋒が見えるところ、然しながら其の深切過ぎる所は醉後郎當と云ふ有様で人を秋殺せしむ、傍觀の吾々までが甚だ迷惑するぞと抑へた。

頌 一國之師亦強名何必○空花水月 南陽獨許振嘉聲果然○坐斷要

箇中難得一箇半箇 大唐扶得眞天子可憐○生○接得 曾踏毘盧頂上行何○不○怨

箇廢去○直得 鐵鎚擊碎黃金骨暢○快○平生 天地之間更何物○在○言○前

下○上座○作廢 鐵鎚擊碎黃金骨暢○快○平生 天地之間更何物○在○言○前

茫茫四海少知音○全 三千刹海夜沉沉備○待○入○鬼窟 不知誰入○蒼龍窟

蒼龍窟會○三○棒 一棒也少不得○拈了也 還○英○語○認○自己○清淨法身

一國の師と云ふも亦た強て名く、西京光宅寺の慧忠禪師ほどの高僧は、一國四百餘州の天子の師であるなど云ふのも、且らく假りに強いて名けるまでのことで、其の實は至人に名なしと云ふわけで、國師などと名けたからと云ふて、此人の名譽になるわけでも何でも無いと諷ひ初めた、着語に何ぞ必とせん、實に國師と云ふ稱號などの必要はない、空花水月、畢竟すべての名は空花の如く水月の如きものよ、然しなから風過ぎて樹頭揺くが如く、それだけの徳があれば世人が自然に敬つて色々と尊號を奉つるまでのことぢや、南陽獨り許す嘉傑を振ふを、南陽と云ふは國師所住の地名で、國師は南陽白崖山の黨子谷に住し、四十餘年山門を下らずと傳に見える、即ち其の南陽の慧忠で、嘉傑すなはち此上も無い名譽を天下に轟かして居られる、これは今も昔も同じことで、動もすれば人阿を重んじて、國師とか大師とか云へば此上も無いことと思ふて、世間の富貴尊榮なる人々にヒヨコノ頭を下げる者の多いのを諷刺して、雪竇老人お序にお小言をいはれるのである、果然として要津を坐斷す實に國師の價値はコ、に在るのである、かくの如き大徳の高僧は千萬萬の中に一箇半箇を得難し、大唐扶け得たり眞の天子、此の國師は唯に大唐四百餘州の國王の師といふばかりでは無い、實は十方法界無數の國土の大導師であるが、其の緒餘の仕事としては、大唐の天子を二代までも扶け導いて、唯に俗世界の仁君たらしめたばかりでない、眞諦門から見ると本統の天子、即ち法王たらしめたこともある、着語に可憐生、國師に扶けられて眞の天子になつたとはソレは亦た意氣地のない氣の毒なことよ、接得して何の用をか作すに堪えん、こんな人の扶けを受けるやうな者が何の役に立つと抑へる、曾て毘盧頂上を踏んで行かしたこともあつたと、其の扶け得た様子を言

ふ、着語に一人の人何ぞ恁麼にし去らざる、それは大唐の天子に限つたことでは無い、誰でも毘盧頂上を踏んで行かねばならぬのであるぞ、さうさへ行けば直に得たり天上天下唯我獨尊であるが、上座作坐生か踏まん、貴公等は何うちややと座下への一移、鐵鎚碎碎十黄金の骨、これは肅宗が自身即佛と思ふて黄金佛を大切に抱いて居るのを、國師が自己清淨法身と認むる莫れと一撃して、其の黄金佛の骨までも微塵に打ち砕いてしまふた姿、着語に平生を暢快す其の打ち砕きやうの愉快さ言はんかたが無い、コレで平生の醉情がサラリと晴れた、けれども己に言前に在り、今更雪竇がソソなことを言ふのは遅い、天地之間更に何物かある、斯う國師に擊碎してしまはれた時には、宇宙茫茫として一物も認むべきものは無い、謂ゆる本来無一物の姿、着語に茫々たる四海知音まれなり、コ、に至りては香漢に獨歩するので、前に釋迦なく後に彌勒なし、全身擔荷、只雪竇一人で脊負つて立つのかと擲擲する、然し雪竇がソウ彼れの此れのと云ふのがハヤ沙を撒し土を撒するので、國師の本分を汚がすことになる、三千刹海夜沈々と、其の宇宙茫茫として一物も留めざる底の本地の風光を形容した、三千は謂ゆる三千大千世界の三千、刹は世界國土の義で、其の刹が限りも無く多くある意味を海の字で示したのである、さて其の三千刹海が、草木も眠る丑滿時ともいふべき眞夜中で、何の色も見えねば何の音も聞えない、コ、に至つては自身もなければ佛身もない、頂上もなければ脚下も無い、着語に高く眼を着けよ、コ、等閑に看過してはならぬぞと警誡し、封疆を把定す、此の沈々たる夜景は、決して他の犯すことの出来ぬ境界であると云ふ意味、備が鬼窟裡に入り去らんを待つが、若し此の夜沈々たる平等一相の處にばかり住着してあつたならば、これまた高等なる鬼

窟裡に入ることになるが、それが雪竇の望みであるかと言つて、吾人に一轉路を開かせやうとするのである、知らず誰が蒼龍窟に入る、此の蒼龍窟といふ語は、時と場合に依て色々に使はれることがあるが、今は全く思量分別の深坑に陥いる形容であつて、此の三千刹海沈々の靈境は、決して思量分別を以て測り得べき處では無い、苟くも思量分別智解情想をスツカリ奇麗に打ち棄て、しまひさへすれば、自から此の本分の地に契當するのである、然るに誰が蒼龍窟に入る者ぞと痛く諷めて、一切諸法を掃蕩し盡してしまふた、着語に三十棒一棒も也た少くこと得ず、若しも其の蒼龍窟に入つて思量分別に涉るやうな者があつたならば、三十棒を一棒も負かさずに打ちすゑるぞと、圓悟が蒼龍窟の門衛を勤める様子ぢや、拈了也これ雪竇は此の公案を遺憾なく拈提したつたが、還て會すや、我が座下の面々には合點がゆいたかと搔着し、咄と蒼龍窟を咄散し、錯て自己清淨身と認むること莫れと更に學人を警醒せられた。

第百則 巴陵吹毛劍

垂示收因結果盡始盡終對面無私元不曾說忽有箇出來道一夏請益爲什麼不曾說待爾悟來向爾道且道爲復是當面諱却爲復別有長處試舉看

此の垂示は、前の第九十八則の垂示と入れ違つてあると云ふことは前に申した通りのことである、然しこれはヤハリ百則の提唱終結を告げる意味は同じことであるけれども、本則の吹毛劍に親しいことは、前の第九十八則のが、に在れば適當であるやうに思はれる、それは左に右に因を收め果を結び始を盡し終を盡す、サテ雪竇頌古一百則の提唱も愈々此れで大團圓千秋樂と云ふことになつたが、對面に私なく元會て説かず、座下の衆僧と相對して其間に一點の私情をさしはさまず、已に千萬言は吐いた其儘に、一語も其の説に住着しては居らぬ、唯一陣の清風颯々として大空を吹き去るが如きものである、其風に觸れた草木人畜の側から見れば、吹いた吹かぬと云ふことは有るであらうが、清風其ものの方に於ては吹かうと云ふて吹くのでは無い、觸れやうと云ふて觸れるのでは無いやうなものぞ、然しコ、へ忽ち箇の一人ありて出で來り、一夏請益して什麼としてか會て説かずと道ふあらば、これは圓悟自ら問を設けたのである、一夏九十日の間、多くの僧衆に請益を許して雪竇頌古一百則を種に、一代藏經も千七百則のすべての公案も悉く説き盡すほどに説いて置きながら元會て説かずなど、云ふは、それは何う云ふわけかと問ふ者があつたならば、圓悟はそれに答へて爾が悟り來るを待て爾に向て道はんと答へるであらうぞと云ふ、到底これは他人に教へてもらふて會せられることでは無い、人々各々冷煖自知する時に到れば、自づからこの會て説かずと云ふ道理も會せられるであらう、且く道へ復た是れ當面に諱却すとせんか、復た別に長處ありとせんか、其の一夏の請益中に會て説かずと云ふのは、何ぞ説いては諱に觸れると云ふやうなわけで説かないのであるか、又は別に何ぞ説かない所に長處、すなはち尊ぶべき點でもあると云ふのであるか、その處

は本則の公案に参じて見ろと云ふので試みに擧す看よ、乃ち第九十八則の天平兩錯の話を提起せられたのである。

本則 擧僧問巴陵如何是吹毛劍。陵云珊瑚枝枝撐着月。

光吞萬象。四海九州。

僧あり巴陵に問ふ、岳州巴陵の新開院顯鑿禪師のことは、前の第十三則にあつた通り、雲門大師の法嗣で當時屈指の大宗師である、如何なるか是れ吹毛の劍、これは人々其足箇々圓成底の般若の智劍を、世の吹毛の劍に譬へて問ふたのであるが、其の據り所は臨濟大師が「吹毛用ひ了りて急に須く磨すべし」と言はれたことがあるので、このやうな問案も起つたのであらう、吹毛の故事は今委く言ふて居る暇は無い、つまり毛を吹きかければ其毛が直に切れてしまふほどの鋭利なる名劍と云ふことである、吾人の心性も亦た其の通りに鋭利なるものであるから、智劍とも云ふのであるが、其の使ひやう一つで地獄の刀山劍樹にもなれば極樂の彌陀の利劍にもなる、然るに今此の僧は能く其の使ひやうを知つての上のことやら何うやら、とにかく巴陵の目の前へキラリと吹毛の劍を提出した、着語に斬、それ斬られてしまふたぞ、噫ウフンと冷笑した氣味、陵云、珊瑚枝々上月を撐着す、何とも手の着かぬ奇麗な一句で、彼の僧の振りかざして居る吹毛の劍をヒラリと打ち落してしまふた、佐々木岩柳とか宮本武蔵とかやうな劍客が、三尺の秋水とも云ふべき大刀を以て、只一打ちにと切りつけてきたのを、美しい少女が輕羅の小扇を以て流螢を打

つやうに、其の利腕の急處を打つたやうなアンバイ、元來此の句は禪月大師の詩の句であるそうだが、今こゝでは何の意味とも義理をつけて思量分別するわけには往かぬ、少しでも分別に涉ればモウ千里萬里の隔たりとなる、只々如何なるか是れ吹毛の劍、珊瑚枝々上月を撐着すと、参じ去り参り來りて豁然啓發する時を待つの外は無い、着語に光萬象を含むと、月に就て劍光の斗牛を射る姿を讃歎する、四海九州照さぬ隈は無いぞと云ふ。

頌 要平不平。大巧若拙。或指或掌。

倚天照雪。大冶兮磨礪。不下。良工兮拂拭。

未歇。珊瑚枝枝撐着月。

人莫能行。直捷三千。將出來也。倒退三千。處。讚歎有分別。影。照。寒。潭。

不平を平げんと要す、古人の語に「劍は不平の爲めに寶匣を出づ」と云ふことがある、今巴陵は此の僧の心海未だ平かならざる所あるを見て取つて、此に太平無事の快樂を與へやうが爲めに、珊瑚枝上月を撐着すと平穩無事の妙樂、すなはち少しも知解情量に涉ることの出來ない光景を示された、着語に細なること、蚍蜉の如し、蚍蜉と云ふは蟻の類で、甚だ細小でありながら如何なる堅い土でも木でも穿つやうに、今此の巴陵の答話も甚だ優美柔和のやうであるが、其の斬れることは干將莫耶の寶劍も及ばぬぞとの讚歎、大

丈夫の漢須く是れ恁麼なるべし、苟くも人の師たらん者は必らず巴陵のやうにありたいものである、大巧は拙の若し、これは老子の語で大智は愚の如しだの、大辯は訥の如しだの、大象は形なしだのと云ふ句と並べられてあるので、何れも皆極めて勝れたものは甚だ劣つたやうに見えるものと云ふことである、今巴陵が吹毛の劍に對して、珊瑚枝上月を擽着すと、彼の僧の頭をスパツと斬り落した手際は、餘りに美しくて斬れたのか斬れないのか見分けが附かないから、全く劍術を知らないものであるかと思はれるやうであると極端に稱讚した、着語に、聲色を動せず、巴陵の手際は少しも聲色に露はれないから、見とめることも聞きわけることも出来ないものである、身を藏して影を露はす、拙なやうな所に身を藏しても、其の大巧の影は自然に見える、或は指に或は掌に凡そ劍術を能く使ふ人は、其の劍を指の先で使ふこともあれば、手の平で使ふこともあり、自由自在に劍を活動させる、着語に看よ、今現に人々各自の劍は指の先に在るか手の平にあるか氣をつけて見ろ、果然として這箇不是、若しも指掌の間に劍を求めやうとしたならば、己れの首が飛ぶであらうぞ、天に倚て雪を照らすと、これは巴陵の劍光のすさまじい有様、さなきだに抜けば玉ちる氷の刃か、朝風凛烈たる寒さの空に降り積りたる白雪を照らすと來ては、實に身の毛もよだつ凄愴さでは無いか、着語に斬、それ斬れたぞと般若の智劍の活用を示す、さりながら擽着すれば則ち瞎す、若し此劍を見やうと思ふ分別が起つたならば、直に盲目になるから恐ろしい、然らば此劍は如何やうに取扱ふたならば好いであらうかと云ふに、大治も磨轉し下す、良工も拂拭し歇まず、大治と云ふも良工と云ふも、共に刀鍛冶の名人と云ふこと、日本で云ふたら三條の小鍛冶でも正宗でも、磨がうと云ふて磨

げるものでも無ければ拭はうと云ふても拭へるものではない、畢竟各自の心性は各自の磨礱に依るの外は無い、謂ゆる冷煖自知であるから、釋迦に悟らせてもらふことも出来ねば、達磨に見性させてもらふわけにも往かぬ、着語に更に煨煉を用ひて什麼かせん、本來明煌々たる寶劍では無いか、且つ干將も能く來るなし、設ひ干將ほどの大治良工でも此の寶劍の前へ來ることは出来ぬ、人能く行くなし、誰でも寄りつくことは出来ぬ、直饒干將出で來るもまた倒退三千此の一語は最早餘計である、そこで雪寶は別々と揚言する、實に巴陵の機鋒は全く他人と同轍では無い、着語に咄と叱りつけて置いて什麼の別處か有らん、人々具足箇々圓成、十方法界只此の寶劍ならぬ所は無いと奪ひ、更に讚歎するに分あり然し其の別々は中々面白いと賛成する、然らば其の別な所は何處に在るかと云ふに珊瑚枝上月を擽着す、これが別ちやと再び巴陵の茶話を擧げて、雪寶自家の提唱とせられた、着語に三更月落ちて影寒潭を照らすと、これは圓悟が別々の拈提ちや、珊瑚枝上月と三更寒潭の月と、是れ同か是れ別かと參じて見ねばなるまい、且く道へ什麼の處に向てか去る、サテ其の劍は今何處へ住てしまふたやら、直に得たり天下太平なることを、モウ誰も犯すことは出来ぬぞ、酔後郎當として人を愁殺す、雪寶が巴陵に酔ふて餘計なことを言ひ過ぎる、其の爲めに此の圓悟までが色々餘計な心配がましたぞと、此の一語は兼ねて雪寶頌古一百則に對する惣着語の氣味がある。

さて雪寶頌古一百則、圓悟の垂示と着語を併せて、おぼつかなくも扶離模壁しつゝやつと終結に及んだが、元來吾々の口や筆にかけ得らるべきものではないのであるから、必ず其人を待つて指示を受くべ

きはすであるけれども、如何にせん専門家の提唱は門外の人には容易に解らず、昔からある色々な解釋も専門家が専門家に對した提唱ばかりで吾々の看るべきものは一つも無い、已むを得ずして請ふ隗より始めよと自から推薦して素人講釋の皮きりをしたのであるから、一人なりとも之を幾分かの枝折にして更に益々寶の山の奥ふかく進みゆく人も出来てくれるやうであつたならば、己れは此の宗乘を攪亂した罪業を以て無間地獄の苦報を受けても、喜んで閻老の宣告に服さうと思ふ、衆慈久勞珍重。

藹々青巒

碧巖集講話終

昭和五年七月廿五日印
昭和五年七月廿八日改版發行

碧巖集講話

定價金 參圓

講述者 大内青巒

發行者 今村延雄
東京市芝區露月町一八

印刷者 瀧澤一郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



發行所

東京市芝區露月町一八

鴻盟社

振替東京二九七九
仙台六〇五三
電話芝二〇二七

岸澤惟安老師編	修證義大綱講話	四六判 三八〇頁	定價 送料	一圓五十錢 十錢
來馬琢道師著	叢林 必携 禪門寶鑑	菊半版 一〇〇〇頁	定價 送料	三圓八拾錢 三圓貳拾錢
承陽大師御述	縮刷 正法眼藏	四六版 七五〇頁	定價 送料	三圓四拾錢 二圓五十錢
北野元峰禪師著	般若心經講話	和本 一六四頁	定價 送料	一圓五十錢 十二錢
水野靈牛師著	西國卅三所 觀音靈場 御詠歌說教	四六版 二八〇頁	定價 送料	一圓二十錢 六錢
秋野孝道禪師著	普勸坐禪儀講話	菊版 一七八頁	定價 送料	八十五錢 八錢

鴻盟社發行略目錄

大内青巒居士	縮刷	碧巖集講話	四六版 八〇〇頁	近刊
曹洞宗務院編纂	現行	曹洞宗宗制法令類纂	四六版 七七〇頁	定價金參圓 送料金拾八錢
丘宗潭老師著	禪	の信仰	菊判和本 二〇〇頁	定價金壹圓五拾錢 送料金六錢
細川梧蔭老師著	觀音信仰講話		菊版 四〇〇頁	定價金參圓 送料金拾八錢
細川梧蔭老師著	活用自在	禪學道話集	四六版 五〇〇頁	定價金貳圓七拾錢 送料金拾貳錢
新井石禪禪師著	禪	の要諦	菊版 二二五頁	定價金壹圓五拾錢 送料金拾錢
忽滑谷快天先生	禪學	批判論	四六版 二四〇頁	定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

錄目略行發社盟鴻

境野黃洋先生著	日本佛教小史	菊判 一七〇頁	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢
境野黃洋先生著	印度支那佛教小史	菊判 一八〇頁	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢
境野黃洋先生著	禪宗小史	菊判 一六〇頁	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢
境野黃洋先生著	大乘佛教の五大主義	四六版 三五〇頁	定價金貳圓貳拾錢 送料金拾錢
峯玄光先生著	冠註修證義	菊判載 五〇頁	定價金貳拾五錢 送料金貳錢
古田梵仙著	冠增宏智禪師頌古	和本 一二〇頁	定價金貳圓 送料金拾錢
永久俊雄譯註	冠和註碧巖集	四六判 二二〇頁	定價金一圓三十錢 送料金拾錢

錄目略行發社盟鴻

大內青巒居士著	三同契、寶鏡 三昧、五位頌講義	禪學三二要	菊版 八五頁	定價八十五錢 送料四錢
大內青巒居士著		普勸坐禪儀講話	菊版 五五頁	定價三十五錢 送料四錢
秋野孝道禪師著		坐禪用心記講話	菊版 一七〇頁	定價八十五錢 送料八錢
秋野孝道禪師著	承陽大師坐禪 常濟大師三根坐禪說	箴講話	菊版 四五頁	定價四十錢 送料四錢
秋野孝道禪師著		般若心經講話	四六版 六八頁	定價三十錢 送料二錢
大久保道舟校註		正法眼藏隨聞記	四六版 二八〇頁	定價一圓三十錢 送料十錢
大久保道舟著	永年 二祖	孤雲懷裝禪師御傳記	四六版 一〇頁	定價五十錢 送料六錢

鴻盟社發行略目錄

大內青巒居士著		坐禪用心記講話	菊版 六二頁	定價五十錢 送料四錢
直心淨國禪師御講述 岸澤惟安師編輯	永平 初祖	學道用心集提耳錄	菊版 一八三頁	定價壹圓貳拾錢 送料六錢
曹洞宗宗務院編		佛教讀本	上卷 下卷	定價七十五錢 送料各四十五錢
曹洞宗宗務院編		禪宗讀本	上卷 下卷	定價六十五錢 送料各四十五錢
新井石禪禪師若		曹洞宗綱要	四六版 二二三頁	定價壹圓五拾錢 送料八錢
大內青巒居士著	通修	證義講話	四六版 三一三頁	定價壹圓五拾錢 送料十二錢

鴻盟社發行略目錄

弘津說三老師著	承陽大師御傳記	菊版 二〇〇頁	定價八十五錢 送料六錢
孤峰智瑛老師著	常濟大師御傳記	菊版 二〇〇頁	定價八十五錢 送料六錢
高橋竹迷師著	佛教唱歌	菊版 七〇頁	定價二十五錢 送料二錢
黒田眞洞師著	標註八宗綱要	和裝	定價一圓 送料六錢
萬俣道坦和尚著 丘宗潭師改訂	改訂禪戒抄	和裝	定價一圓參拾錢 送料六錢
萬俣道坦和尚著 岸澤惟安師改訂	改訂室中三物秘辨	和裝	定價七十五錢 送料四錢
町元吞空師冠導	永平初祖學道用心集	和裝	定價六十錢 送料六錢

録目略行發社盟鴻

大内青巒居士著	青巒歌集	三六版 九六頁	定價五十錢 送料四錢
新井石禪禪師著	禪の生活の純化	四六版 三六〇頁	定價一圓八十錢 送料十錢
新井石禪禪師著	佛教四恩講話	四六版 一七五頁	定價五十錢 送料四錢
廣瀬玄鱗師著	曹洞宗在家勤行聖典	三六版 一六五頁	定價六十錢 送料四錢
護法編輯部編	最新曹洞宗寺院名鑑	四六版 三五五頁	定價一圓五十錢 送料八錢
瀧谷琢宗禪師著	修證義筌諦	菊版 九〇頁	定價六十五錢 送料四錢
高橋竹迷師著	信仰の人人	菊半載版 二〇〇頁	定價一圓 送料六錢

録目略行發社盟鴻

松浦百英老師著	授戒說教	四四六頁版	送定	料價	貳圓八拾錢
秋野孝道禪師著	教授戒文纂解	五菊二頁版	送定	料價	貳圓五拾錢
佛祖正傳					
境野黃洋先生著	莫妄想	三四六頁版	送定	料價	十二圓
高橋竹迷老師著	應用引導大全	四四六頁版	送定	料價	拾貳圓
	妙法蓮華經訓譯	四菊半截頁版	送定	料價	六圓
茂木無文老師編	曹洞宗日課聖典	三六八頁版	全一册	定價	四圓
加藤咄堂先生著	はなしの庫	一菊半截頁版	全一册	定價	三十五圓
新井石禪師述	日日の心得	精養修	全一册	定價	拾五圓
松浦百英師述	家庭の宗教		全一册	定價	拾五圓

鴻盟社發行略目錄

387

272

終

